

# 臆病者が行くIS学園

灰人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

強制的にIS学園と言う監獄に送り込まれた双真が、転んだり起き上がったたりして何とか生きづらい世界で、もがいて行く。

# 目次

1話	ヘタレ入学する	1
2話	ヘタレ自己紹介する	3
3話	ヘタレ考える	10
4話	ヘタレ驚く	17
5話	ヘタレ戦闘する	23
6話	ヘタレ和解？する	30
7話	ヘタレ絡まれる	37
8話	ヘタレ殴られる	42
9話	ヘタレイジケル	51
10話	ヘタレ強さを求める	60
11話	ヘタレ自分の内情を語る	69
12話	ヘタレ帰る	80
13話	ヘタレ決心する	92
14話	ヘタレ気ますぐくなる	97
15話	ヘタレ跳ねる	104
16話	ヘタレ備える	113
16・5話	これまでの双真君と深緑	119
17話	ヘタレ喧嘩する	121
18話	ヘタレ衝突する	128
19話	タッグトーナメント 前	135
20話	タッグトーナメント 後	143
21話	祭りの後は	150
22話	祭りの準備	157

# 1話 ヘタレ入学する

1話 ヘタレ入学する

「コーコーはーどーコーなーんーだー」

取り合えず叫んでは見たが誰も気付いてはくれずため息一つ。

「試験会場は何処へ？」

立ち止まっても始まらないので道なりにそって歩く。

「大体試験会場なんて一緒にするなよ。日本のバーカバーカ」

愚痴をこぼしつつも歩く、そして扉があった。

「ギターーやっど試験会場だよ。神様ありがとう」

俺は扉を開けて中に入った。すると誰もいなくISだけが部屋の中央に鎮座していた。

「んだよ。ISかよ」

あーあよりにもよってIS学園の試験会場かよ。神様め俺をぬか喜びさせやがって、恨むからな！

「でも、いまこの部屋には俺一人。別に触っても文句を言われない……よな？ じゃあ記念に触っていくか、これも何かの縁だし」

俺はそのままISの方へ向かい丁度向かい合う形となった。

「では、失礼しまーす」

一応許可を取り俺はISに触った。するとISと繋がったような感覚が体を突き抜けた。

「ナンジャコリヤー！ー！」

なに俺IS動かせたの!?!彼女居ない暦Ⅱ生まれた年の俺に?!あ、最後の関係無かった。

俺が起動している間に誰かが入ってきた、誰か助けてください！

「な、これは?!」

いや驚いている暇があったら助けてください！

でも、男がIS起動させたら驚くわな。困った困った。

「これで二人目……」

なに言ってるのこの人達。遠くからだからよく聞こえない。

俺は手を離したらようやく止まった。体は何もなっていないよな、大丈夫だよな。

「あく怖かった。あまりの驚きで心臓が止まると思ったわ」

でも、IS動かしたからどこかの研究室とかに連れて行かれて改造されたらしないのか……俺嫌だよ、起きたら左手がマイナスドライバーなんて。

「君今から来て欲しいところがあるんだが？」

「あゝ」

キターーこれ絶対改造室送りだよ。起きたらマイナスドライバーは嫌!!

「え、いや、あの……すみませんでしたー!」

瞬間的に土下座の形をとり、そのまま頭を床にこすり付けた。

「何を言ってるんだ？」

「改造だけは勘弁してください!お願いします!」

理解不能と言った顔で俺を見下ろす試験官さん。

だがこれは好機と見たこの勢いで乗り切れば許してもらえる……はず。

「改造は、改造だけはどうか——」

「いいから来なさい」

どうやら試験官さんは強硬手段と行くそうだ。さよなら俺の青春、さよなら俺の左手。

試験官さんは俺を車に乗せ、自分も車に乗った。試験官さんの一言で俺は戦慄したね。

「君にIS学園に入学してもらおう」

「は?」

俺の青春はこうして幕を閉じたと同時に、新たな幕が上がった。

## 2話 ヘタレ自己紹介する

### 2話 ヘタレ自己紹介する

IS学園それは女の園……らしい。

ぶっちゃけた話IS学園なんて俺からしてみれば都市伝説みたいなもんだったし友達ツレにも羨ましがられたが正直これからあんな所で3年間女と一緒になんて正直俺の理性が吹っ飛びそうだった。

「……くん。安部双真くん！」

「うひゃあ」

びつくりした。急に声をかけないでください。

「えーと今『あ』なんだよね。自己紹介してくれるかな？駄目かな。できれば早くして欲しいんですけど………」

「わ、分かりました」

俺は席をゆつくりと立った。周りを見渡すと、女女女男女女女、男？ 他にも男がいた！やったぜ。

俺は心の中でガッツポーズを取ったがどうやら実際にやっていたらしく周りから変な目で見られた。

「早く言わんかッツ」

ズバン

「いったい！」

いきなり出席簿のような物で叩かれ悶絶。後ろには破壊神のような表情をした何かが無然とした表情で見下ろしていた。

「こわっ……」

「何か言ったか？」

「い、いえ何でもありません！」

「さっさと自己紹介をしろ」

初対面の人にこんなに殴れるなんて初めてだな……ハッ！ まだ睨んでいる。さっさと自己紹介をせねば。

「え、えと雪平双真でしゅ。この学園には初めて入学します。みんなと仲良くにやりたいでしゅ！」

アレ？勢いで喋ったら大変な事になったぞ、なんか皆黙ってるし誰か助けてへるぷみー。

『きゃあああああああ』

鼓膜が、鼓膜がああああ。耳をふさぎ損ねた俺はあまりの大音量に気絶しそうになった。

「二人目、二人目ええええ！」

「何か可愛い可愛い可愛い!!」

「神様ありがとう」

「言ってる事無茶苦茶、すごい噛んでる。なんか可愛い」

なんか色々言われているけどまあいいか。早く終わってくれ頼む。俺は急に恥ずかしくなって急いで座り顔が見えない様に伏せた。

もちろん後で破壊神の出席簿アタックを喰らいました。超痛かったです。

自己紹介も何とか終わり（途中叫び声が何度か聞こえたが）今は休憩中。

「これが平穏か。大切にしよう」

心から休もう、10分だけだけど……だがそんな平穏も後ろから声がかかって来て無くなるわけで、

「すごかったな。お前の自己紹介」

「……辞めてくれ。アレは俺の黒歴史の中でもトップを争うセリフなんだ。だからあまり触れないでくれ……ると助かります……」

「悪かったよ。俺は織斑一夏。よろしく」

「俺は安部双真。よろしく織斑」

この学校で初めて男と会ったような気がする。まあ俺と織斑しかないから当たり前なんですけどね？

「一夏でいい」

「……じゃ俺も双真でいい。これからよろしく一夏」

なんていい人なんだ俺は初めてこんな良い人に会ったような気がする。良かった変な人じゃなくて。

「おい、一夏」

話していると後ろから声をかけてきた、声がしたほうを見ると大和撫子っぽい雰囲気を持つ美少女がいた。

「ちよつと来い」

そう言つて一夏を引つ張つていった。あ……一人にしないで……。「行つてしまった……だが正直この空間に一人は正直はきつい……」

見なくても分かる好機の視線、視線なのにどうしてこんなに痛いんだろうか？ しばらくして一夏達が帰つてくると同時にチャイムがなつてしまった。

good—bye俺の平穩……

「……終わつてしまった……」

正直次の休み時間が待ちどうしかった。

○○○

現在俺は授業を受けているわけだが中学の時とは大違いだった。まず全く知らない単語がオンパレードで俺の頭もカーニバルだった、全く分からん。

「先生」

「何でしょうか？安部君」

質問されて嬉しいのか声が上がっている、あれこの人なんて名前だっけ？えーとや……山内だっけか？山……思いだせんもう巨乳先生でいいや。

「どうかしたんですか？」

「全く分からないんですけど」

ガスッ

「ぎゃああああ頭が割れるううう！」

そのまま床に倒れこみのた打ち回る俺。絶対いまでの俺の色々なアレが死んだ、絶対死んだ！ 絶対馬鹿になった！

「まったくどこまで馬鹿なんだお前は。他に分からない奴はいるか



？」

同意を求める織斑先生。

だがこの教室にももう一人の勇者がいた。その勇者は恐る恐る手を上げ、宣言した。

「先生俺も分かりませ」

ビシッ

「目があああああー！」

織斑先生は出席簿を投げ一夏の目に直撃させた。先生それはやりすぎでは？ 皆が引いてますよ。

「他には？」

教室内は恐怖で支配され、そこで授業の終わりを知らせる鐘が鳴った。俺は痛む頭を押さえ戦友の席へ向かった。

「よお、相棒」

「おおう、まだ目が見えん……」

「ちよつとよろしくて？」

なんか声がかかって来た、せつかくこつちは傷の舐めあいをしていると言うのに……空気を読んで欲しい。

「ん？」

「まあ何ですか！その言葉遣い！」

なんだこのパツキンドリルは、そういう髪型なのか？ このドリルのセンスが理解できんな。

「なにか失礼な事を言われたような気がします……」

「ギクウ！ ベ、ベべつべ別にパツキンドリルとか言ってます……あ」

やべえ！ 言っちゃった！ 怒ってる……凄く怒ってるよ……ドリルの人……。

「そ、そんな事を思っていましたのね！ 大体私のようなエリート中のエリートとクラスを同じになれたこと事態が幸運なことですので言うに事欠いてドリルですって!? 信じられませんわ！」

「……ど、どうしてエリートなん……ですか？」

「私はイギリスの代表候補生。だからエリートですの」

だいひよーこーほせい……何か大仰な肩書きだな。

「ちよつといいか?」

「なんですの下々の民に教えを説くのも代表候補生の勤めですから特別にお答えいたしましょう」

「代表候補生ってなんだ?」

ビシッ

今教室の中の何かが割れるような音がした。十中八九一夏の外的な事を質問したからだろう。

「あ、あなたそんなことも——」

とここで授業の始まりを知らせる鐘がなった、なんかこの学校の鐘はずごく空気を呼んでくれているような気がするが気のせいだろう。

「また来ますわ」

出来ればもう来ないで欲しいと思ったのは俺だけでは無い………はず。

どうやら次の授業はクラスの代表を決めるらしい。どうせ他の奴がやるだろうと高を括っていたのだが、どうやら俺はこのクラスを嘗めてました、ハイ。

「織斑君がいいと思います!」

「安部君がいいと思います!」

「俺!」

俺と一夏シンクロ、ホントにいい友達を持ったもんだ………なんて感傷に浸つてると後ろから耳障りな声が聞こえてた。

「納得いきませんわ!」

やはり来たかパツキンドリル今度は何ですかね………いい加減にしてくれ……まあ無理か。

「どうして私を差し置いて極東の猿共を推薦するんですか! ここを動物園にするつもりですか?!」

これキれるなって言うほうが難しくない? 落ち着け、落ち着けよ双真。落ち着け……素数を数えるんだ! 1、2、3、4、これ整数じゃん!

「それに文化的に後進的な国にすむ事自体苦痛ですわ!!」

「はあ? 何言ってるんだあこいつは。今カチンときたね。」

俺は勢いよく席を立ちパッキンドリルの胸倉を思いつきり掴んで立ち上がらせた。

「さつきからペラペラ良く喋るなカス野郎。文化的に後進的だつて?

「ISを作ったのはどこの国だ? 馬鹿野郎。それも分からないでんな事言ってたら、そこら辺の小学生より頭がわるいんじゃない?」

胸倉を掴んでいるため話せないのか口をパクパクさせている。金魚かよ。どうやら猿にも金魚にも劣っているらしい。

「やめろー!」

誰かの怒声により我に帰った俺は掴んでいた手を離した。ドリルは肩で息をしながら怒声を浴びせてきた。

「何なんですかいきなり!」

「別に」

沢○エリカよろしく素っ気ない返事を帰して席へ戻っていく。

「け、決闘ですわ!」

「ああ良いよ。全力でかかってこいや」

そう俺が言ったら周りから笑いが起こった。俺何かおかしい事言ったか? 言つてない……よな?

「無理だよ。大体男が女に強かったのつてもう何年も前の話だよ?」

「……お前ら馬鹿だろ。俺だってISに乗れますししかも、こんなバカが代表候補生何だから、相当国のレヴェルも低いぞ。こんなカスに負ける要素がどこにあるんだ?」

言ったらクラスが静まり返った、そこまで頭が回ってなかったのか?

「……話はまとまったな、では来週に代表決定戦を行う。安部と織斑は後で職員室へ来い」

ここで授業は終わったんだが何か大変な事をしたような気がする……やべえどうしよ……。

「双真、お前……」

「言わないでください。お願いします」

俺はすばやく席を立ち土下座の体制になり頭をこすり付けた。

「おいやめろって!」

「本当はすごい怖かったんです。だからアレは記憶から消していただけると有り難いです」

俺は頭を何度も打ちつけ懇願した。一夏は必死で俺を起こそうとしているが俺の土下座はそう簡単に破られはしない! ……でも俺あんなタンカきつといて負けたらすごい恥ずかしいよな……。

えーい! こうなったら恥も外聞もかなくなり捨てやっつてやろうじゃまいか!

### 3話 ヘタレ考える

「やっと終わった……」

現在破壊神もとい織斑先生の説教から今しがた生還できたのだが問題は山積みである。ISとかISとかISとか、ああやつぱり怒りに任せてあんな事言うんじゃないか。あは、あははは。ハア……死にたい。

「ていうかなんで俺もやらなきゃいけないんだよ？」

「……そりゃ推薦されたからじゃね？」

いまからドリルに謝ってこようか真剣に迷ってるいると一夏が名案を思いつたのか俺の肩を揺さぶってくる。う、うぶ、やめろ、一夏。酔う……。

「……ど、どうした？ 一夏」

「俺たちでISの特訓すればいいんじゃないか?！」

「でも俺達って何も出来ないか?！」

言われて気付いたのかシユンとなる一夏、俺と一夏はあーでもないこーでもない論争を続けていると朝に一夏をさらった人と出会った。確か名前は……。

「い、一夏」

「どうした筈?！」

ああ! そうだった筈さんね、覚えておこう。

でもこの学校ってレベルが高いよな先生然りクラスの皆然りどうやったら集まるんだって言うくらいいるよな? お前もそう思うだろう読者諸君。

不細工がない学校ってこの学校しかないんじゃないのか?!

「ほ、ホントか?！」

む、こっちはこっちで話が進んでいるようだった。なんか筈さんは顔が赤いし何かあったんだろうか?!

「べ、別にやつてもかまわないぞ」

「双真やったぞ! この筈先生がISを教えてくれるそうぞ」

「本当か!?!ありがとうございますございます箒先生」

俺は救世主メシアに大してお礼を言った。途中「二人つきりじゃないのか……」とか聞こえたが、俺だって試合に勝ちたいので無視した。「とりあえずは明日からだ」

「Yes Sir!」

取り合えず軍隊式感じで答え寮へ意気揚々と向かったんだがそこでも問題が起こる。今日一日呪われてるんじゃないか俺？

○○○

「部屋割り?」

巨乳先生そういうことは初めに言っときましようや……後から言われたって変なりアクション取れないんだから、一夏に至っては固まっていますよ?」

「まだ部屋が空かないので一人か同居という事になります」

おいこら、なに重要な事サラツと言ってるんですか、男女15にして同衾せず。

常識だよな。え、違う? そうですかすみません。

「何重要な事サラツと言ってるんですか! そんな事初めて聞いたんですけど!?!」

さすが一夏は俺が思ってることをさらつと抗議してくれたぜ。そこに痺れる懂れる。

「当たり前だ私が決めたからな」

ギャーーーーー破壊神! この人の決定かよ……もうだめだな……腹くくるしかねえ……。

「千冬姉なに——」

ガスッ!

「織斑先生と呼べと言っただろう」

一夏は拳骨を喰らい床に倒れた打ち回っている、俺も授業中にやられてたから痛みは分かるのだが! 今は一夏に同情している暇はない、俺の平穏を得るために一夏には犠牲になってもらおう。

「はかゲフンゲフン……俺一人部屋がいいんですけど」

やば、言ってしまったしそうだった、ギリギリセーフ。

だが織斑先生の眉根はつり上がっていき俺に圧力をかけて来る。ヤバイ心が折れそうだ……俺は涙目になりながらも必死に堪えた。一夏？ 知らん。

「いいだろう。場所は——」

織斑先生から場所を教えてもらい部屋へ行く事にした。荷物？もうすでに部屋に運んでいるとの事仕事が速くて俺的には嬉しいのだが、どうも織斑先生は俺と話しているときだけ怖いような気がする。気のせいかもしれないが……

「ついたか」

ようやく部屋の前まで着きの扉を開けてみる。

入った部屋の中身はどこぞのホテルと遜色ないレベル、当然俺の部屋より断然きれいだしなにより臭くない。そして圧☆倒☆的☆広さ！

「これは……ホントにここに住んでいいのか？」

取り合えず部屋の散策。

○○○

「この部屋本当にすごいな。まじで俺の部屋とダンチだ」

冷暖房完備、シャワーはもちろんの事。そして一番は……！

「ベッドがフカフカだ!!」

俺はベッドにルパンダイブ！ そのまま一人ゴロゴロ転がっていた。た。

「でもトイレが無いんだよな……」

IS学園は女しかないから当たり前前なんだが、最悪シャワー室でやるしかない。だが授業中にトイレに行きたくなった場合は……考えたくも無い。

「あ、一夏はどうなったんだ？」

扉を開け周りを見る所したら丁度一夏も部屋を入ろうとした瞬間らしく目が合った。がつつり

「よ、よう」

「お前隣だったんだな……」

「そうらしい……な」

一夏はまだ頭が痛むのか頭を押さえていた。ご愁傷様。

「じゃあ、また明日」

「おうじゃあな」

俺は一夏に挨拶をして、シャワーを浴びてそのまま寝た。

○○○

何時だろうか？ 取りあえず体を起こし携帯を開いてみた。時刻はもう少しで6時になるうかとという時刻、俺はシャワーを浴び制服へと着替えた。

そして着替えも時計を見てみると時間も丁度よかったので食堂へ行く事にした。

「いざ、食堂へ」

無意味な掛け声と一緒に扉を開ける、そしてまた一夏と目が合った。がつつり

「気のせいかデジャブを感じるんだが？」

「奇遇だな、俺もだ」

取りあえず固まってもしょうがないので、

「なあ一夏一緒に飯でも食わないか？」

「ああいいぜ。箸も一緒に行くよな？」

一夏は後ろで準備をしていた箸さんに声をかける、返事は良いとの事で三人で食堂へ向かう。

しばらく歩いていると目的地に着いた、どうやらここの食堂は安いのに味は絶品という場所らしいが……俺からして見れば胡散臭い話だ。

取り合えず食券を渡しトレイに乗せてもらった。

因みに俺の好物はカレーだ。

「うまい……」



一夏達も食べ始めるが大体こんな反応。それにしてもこんな初めてたべたな、胡散臭いとか言つてすいませんでした!!

飯も食い終わったので俺は先に席を立ち一夏達に挨拶して先に教室へ行く。

「そもそもあのドリルは代表候補生とか言つてたけど一般人と何が違うんだ?」

「お答えしますわー!」

後ろから聞いたような声が聞こえてきたが無視する。

「ちよ、無視しないでください!」

「…………ハア」

自然に出てくるため息。

こう言う人は苦手なんだ、しつこい奴は特に。

俺は立ち止まりドリルと向き合う、するとドリルは喜色満面といった表情になるがそんなに説明するのが好きですか? ドリルさん。

「端的に言う専用機を持つてるか否かですね——」

「ふーん、ありがと」

俺は説明を適当に切り上げ教室へ向かう。ドリルは説明を切り上げた事に怒っているが、これ以上アイツと関わりたくないのでさっさと教室へ行く事にする。

「…………しかしあのドリルどうやって沸いたんだ?」

誰にも聞かれないように一人呟いた。もちろん誰にも気付かれる事なく俺の呟きはクラスの喧騒に消えてしまった。

○○○

「——例えば皆さんはブラジャーをしていますよね?」

「ブホオ」

時間は飛んで現在授業中なのだが中途半端に聞いていたのだが、何これ!? どういう状況でしょうか? ブラジャー? あああれね知ってるよ。女の人が付ける下着的なやつでしょ。でも最近には男用のブラジャーとかもあるらしくて——何を話しているんだろうか…………俺は。

「先生。俺と一夏はその……着けて……ないと思う……ですが」

巨乳先生はこちらをみて何が？ 見たいな顔しているが……。

「何を着けてないんですか？」

もしかして気付いてないのか!? もしかして天然？

「その……ブラ……ジャーを」

「安部君聞こえないのですか？」

俺は立ち上がり先生に聞こえるように言った。

「俺はブラジャーを着けてないんです!!」

静まり返る教室、先生はようやく気付いたのか顔を真っ赤にしている。クラス中は笑い声に包まれているが、こっちは溜まったもんじやない!

「す、すいません！ 男の人にはわかりませんよね!!!」

クラスの皆はまだ笑っているが俺は恥ずかしすぎる。一夏はいつも通りなのだが……何でこんな状況で平然と入れるんだ？ もしかして金玉無いのか？

「んん！ 山田先生」

織斑先生の一喝によりクラスにまた静寂が戻る。——あの人本当にすごいな実は人間じゃなかったりして。そして今教鞭を取ってる先生って山田先生って言うのか、もしかして恋愛とかに奥手なのか？ いい物持つてるのに残念だな。

「そ、それともう1つ大事な事は、ISにも意識に似たようなモノがあり、お互いの対話——つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようとしています」

ISって人間みたいな物なのか？ 唯の鎧にしか見えないんだが……でも動かした分だけ分かり合えるのか……人間とは違うんだな、人間なんて一生分かり合えないのに。

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せる事になるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

「先生それって彼氏彼女みたいな関係ですか？」

それは確かに一理あるな、ISを人間としてみればの話だが。だがもしISに人格という物があったら面白いそうだな。いつか話をしてみたいもんだね。

キーンコーンカーンコーン

「次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

チャイムがなり次の時間の内容を知らせる山田先生。

「ISって言うのは意外と興味深いものかもしれない」

こんな人生でも一回しかないんだ今は楽しもう。

俺はそのまま軽く伸びをする、背骨から小気味いい音が聞こえてくる。

「さて次も頑張りましょう」

## 4話 ヘタレ驚く

休み時間も終わり授業中なのだが、教壇に立っている織斑先生から連絡があるとの事。授業を中断するほどの連絡だったらしいが、どんな内容か非常に恐い。

「織斑と安部、お前達の I S だが準備まで時間がかかる」

「……俺と一夏って専用機でやるんですか？」

「ああ。状況が状況だからな。データ採取などの目的のため、お前達にはそれぞれ専用機が国家から贈られる」

なあんだそんな事かビビって損した——なんて事を思っていたら頭に出席簿が飛んできた……何故？

「お前が馬鹿な事を考えているからだ」

「……すみませんでした……どうぞ続きを」

なんて理不尽なんだ……俺は痛む頭を押さえながら一夏をみるとなぜか一夏は手を上げていた、なんか今までの所で分からないところなんてあったか？

「俺にもわかるように説明してください！」

馬鹿だなく一夏。もつとも俺も人のことをいえた立場ではないが……一応言っておくがクラスの皆はまた？ 見たいな顔をし、織斑先生に至っては頭を押さえていた。

頭痛だろうか？

「……織斑、予習はしてきたのか？」

「専門用語を覚えて来たんですけど、まだ構造的なモノはちよつと……」

「そうか……では教科書7ページ音読してみろ」

「は、はい——」

様はこんな感じ。

・ I S は世界に467機しか存在しない

・ コアは篠ノ之博士以外作る事は出来ず、博士ももう作る事を拒んでいる。



もう疲れた、あなたとの会話。そつとして置いてくれませんか？  
無理か…

「あの時の事は謝るんで、もう辞めてくれませんか…ごめんなさい」  
俺は誠心誠意土下座をした、これにはドリルも驚いたようで慌てて  
いる。

横から「セシリアさんってあんな事が…」と囁かれているが今は  
問題では無いだろう。

一夏はもう俺の土下座が日常と化しているのか俺とドリルの応酬  
をみても平気な顔でノートを書いている

「取り合えず頭を上げてください！」

俺は無理やり起こされドリルと向かい合う形となった。

いいか、俺は向かい合った時に決して「こいつ可愛いな…」とか思っ  
てないからな！ 絶対。

「な、なにいきなり変な事言ってるんですか!? あなたは?!」

「ん？ 俺何か言ったか？」

「その、かわ…い…いなんて」

しまったああああ!! 口に出たああああ!!!

「い、いやそそそんな事思ってたねーしい。むしろ——」

「寧ろなんだ？」

とここで箒さん登場ありがとう救世主。あなたはいつもいい所で  
来ますね、空気を読んでいるのですか？

「寧ろ、箒さん同様かわいいって事です!!」

しまったああああ!! またやってしまったああああ!!!

こうなったら最終手段。

「つて一夏が言っていました!」

「なにそれは本当か!? 一夏!?!」

「え、何が?!」

あれこれ状況が悪化してない? 何なんだこのカオス…やべえ  
な逃げよう。

「まあ、そういう訳なんだ。ドリル君察してくれ」

「何がそういう訳なんですか!? 今までの事を鑑みてどう察しろ!?!」

いやそんな剣幕で詰め寄られると……顔が近い……。

「あく腹減った。飯食いに行こう、うん」

俺は逃げる口実の為食堂に行こうとするが、ドリル手を掴んできた。why? 何故?

「逃がしませんわよ。私も一緒に食べますからさっきの事を説明してくれるまで、離しませんから」

「本当にやめてください!! そんな事したら俺が泣くんで、ほんとやめてもらって頂けないでしょうか」

ドリルのお譲」

「あなた本当に許してもらおう気有るんですか!? 前から思っていたんですがドリルって何なんですか!? 私にはセシリア・オルコットっていう名前があるんですよ!」

「あーもう分かったから!! 詳しい話しは食堂で話しつけましょう。ドリル……オルコットさん」

取り合えず一緒に向かおうとするのだがなぜか一夏が宙をまっていたのは気のせいだろう。

「……一応確認を取るが、俺達って敵だよな?」

「ええ、そうですわね」

なんで平然と言ってるのけるんだよ……俺は女と会話するだけで一杯一杯なのに……緊張でちびりそう。いやもうちよつと出てる。

「なんで一緒に飯を食べてるんデスカ?」

「毎度毎度空気が読めないチャイムのせいで私のありがたい話を聞かせれなかったからですわ!!」

「すいませんでしたああ! 辞めてください本当マジで!」

もう嫌、この人怖い……その後俺はきつちりドリルのありがたいお話を昼休みが終わるまで聞かされましたとさ。

なんか俺の説明からありがたいーいお話にシフトしていたがそこは問題じゃないだろう。

〇〇〇

一夏に言われ剣道場へ言ったみたにはいいがなぜか箒さんが一夏へと詰め寄っていた。

「どうしてアイツがここにいるんだ！」

「俺が誘ったから」

一夏に言われ箒さんはこつちを睨みつけてきた。何か俺はお邪魔虫らしい……自分から誘っておいてそれは無いんじゃないすかね。

「すいませんでしたあ！ 俺は他の所で勉強しておくんで二人で楽しんでください」

何か面倒くさくなったので適当に謝り剣道場から出ていった。出ていく途中に後ろから「やっと二人きり……」なんて聞こえたが二人きりだったら何が有るんだろうか？

「とは言った物のこれからどうしようか……」

大体どうやったら強くなれるんだ？ 勉強をして強くなれる物なのか、いまいち分からん。

「こういう時は織斑先生にでも聞いてみようか」

俺はなけなしの勇気を振り絞って職員室へと向かった。

「——というわけなんです」

「……お前の言わんとしていることは大体分かった」

おお分かってくれた！ でもどうして織斑先生は頭を押さえてくれるんだろうか？

「私はお前を見くびっていたようだ」

「じゃあ——」

「お前は馬鹿だ」

なんで馬鹿とか言われなきゃいけないんだ。じゃあアンタも馬鹿だ。バーカバーカ。

「いいか。ISというのは直ぐに強くなるわけではないんだよ。

努力によって強くなるんだ」

「努力ですか……嫌いな言葉です」



「まあ、そう言うな。取り合えず自分で出来る事をやってみろ」  
うまくかわされたような気がするが、この際何も言わない。いえな  
いと言うべきか。不用意に変な事を喋ると出席簿が降ってくるしね  
……。

「……はあ、分かりました」

俺はそのまま職員室をでてこれからのことを考えていた。

「どうでしょうか？ 取り合えず教科書でも読むか……」

俺は『IS関連の教科書を読む』を当面の目標にした。寮に戻る途  
中剣道場から悲鳴が聞こえたような気がしたが気のせいだろう。

## 5話 ヘタレ戦闘する

時間は飛んで一週間後。なんで一週間も飛ばしたって？ 考えて見る男がずっと机に向かっている描写が延々と続くのなんて誰も楽しくないだろ？ つまりはそういうことなんだ。

「よう、一夏そっちはどうだった？」

「……まあな」

酷くテンションが低い一夏。見たらなんか痣になってるしとても痛そうだ……。

「織斑君と安部君はこちらに来てください」

山田先生に言われるがまま誘導されていくと、そこには巨大なコンテナが二つ並んでいた。

「デカッ」

思わず間抜けな声を上げてしまったが、誰も言葉を発しなかったの  
で俺の声は無かったかのように進められる。

「織斑君は『01』と書いてある方で阿部君は『02』って書いてる方  
です」

まず一夏のコンテナが開き白いISが姿を現したんだがISって  
こんなにでかかったんだな。

「織斑君のIS『白式』です！ 続いて阿部君です!!」

コンテナが空くわけだが何か山田先生のテンションが以上に高い  
気がするんだが気のせいかな？ 開いたコンテナから緑色のISが目  
に入った。

「阿部君のIS『深緑』です。そのままですな！」

「……はあ」

山田先生のテンションが異常な程高くまともに応答が出来ない。  
それを見兼ねたのか織斑先生が奥からやってきた。

「取りあえずは……安部ISに乗ってみろ」

「分かりました」

俺は言われるがまま深緑に乗ってみる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じがいい。後はシステムが最適化をする」

装甲の閉じる音や空気が抜ける音がやけに大きく聞こえる。成すがままに任せているといつの間にか準備が終わり、俺は深緑と繋がった。

「こりやす〜い…」

ISに乗るのは二度目だがあの時以上の感動が胸に突き抜けた。五感の方も優れていて360°。見渡せるようになっていたりとか色々すごかった。

「後は、戦う順番の方だが——」

戦う順番はと言うと。

安部双真対セシリア・オルコット

織斑一夏対セシリア・オルコット

安部双真対織斑一夏

一夏とオルコットさんは二回連続でやるのか……代表候補生って言っても辛いもんは辛いと思うのだが違うんだろうか？

「じゃ行つて来ます」

「頑張つてこいよ」

「逝つて来い」

……箒さんそれは死ねつて事ですか？ あまりの威圧感に何も言えず俺はピット・ゲートへと進み前傾姿勢を取った

教科書で読んだ操縦方法は自然と頭の中に入って来て、体へと染み込んでいつてずっと一緒にいたかのような感覚を覚える。まだこれで最適化処理フィッティングも終わっていない初期化フォーマット状態なのだからこの後の進化に期待が膨らんで行く。だけどその前にやらないといけない事がある。

俺は飛ぶイメージを浮かべ空へと飛び立った。

「あら、ずいぶん遅かったんですね」

「……待たせてすいませんね」

相対しているのは青いISに身を包み、宙に浮かぶオルコットさ

ん。彼女の方に目を向けるとセンサーを通して情報が流れて来た。

彼女の専用機『ブルー・ティアーズ』。特徴的なのは右手に携えた長大な銃と背中に装備されている4枚のビット。反重力装置によって重さの概念をさほど感じない為、今の僕達のように宙に浮かべたりオルコットさんのように自身の身長を超過武器を持てたりする。

やっぱり女子のISスーツってエロいよな。やばい顔が熱い、どうしようか……。

「どうかしましたか？ 顔が赤いようですが

「何でもありません……ありません」

「そうですか……」

気まずい空気が流れ始めたが、ここで試合開始のブザーがなった。

「最後のチャンスを上げますわ」

「チャンス……だと……」

願っても無い提案だ！ 俺は真剣にこの提案を受けようか迷っていると、オルコットさんはまた話し始めた。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで降参してもいいですわ」

「マジで!?! 良いの?!」

「そうですね……って、ええ?!」

「どうかしたか?」

「どうかしたって……あなた本気で言ってますの?!」

本気もなにも痛い嫌だし……ここで嘘を言っても仕方ないし。

「俺はいつも本気だ」

「あなたって人は……そうやっていつも逃げるんですね!」

「その言い方は酷いな! いいよ、やってやるやればいいんでしょ!!」

だがこれは挑発だった事に気付いたが時既に遅し。オルコットさんは『スターライトMK?』を構え撃ってきた。

飛んできた光線は一直線に俺に向かってくる、恐怖に駆られた俺はスラスターで横に移動したが腕に少しかすったらしくシールドエネルギーが少し減っていた。

ISの競技ルールは簡単に言ってしまうえば操縦者を守るシールド

に使われるエネルギー、所謂シールドエネルギーを相手よりも早く0にさせた方が勝ちになる。

0にさせるには攻撃するしかないが、威力に比例して実体の方にもダメージが通る。そのため破損箇所には大なり小なり影響を受ける。だがそれが原因で死亡しないように『絶対防御』という半自動機能が備わっており、大幅にエネルギーが削られる代わりにどんな実体ダメージも0にする。

でもこのくらいのダメージで『絶対防御』が発動するわけがない。となると、また痛みを感じていない、つてことか。

「このままじゃ負ける。武器は無いのか!？」

すると武器の欄が出てきて今使える武器が表示された。

「……遠距離ライフルっておま……」

仕方ないので遠距離ライフルを呼び出す、両手にスナイパーライフルが現れる。ずしりとした重厚感が手に収まり俺は覚悟を決める。

「……やるしかないのか……」

スコープを覗き込みオルコットさんを狙い引き金を引く。一直線に向かっていく弾丸はオルコットさんを掠める、どうやらギリギリでかわしたようだ。

「私と同じ中距離!?! あなたどこまでも私をコケにしますわね!」

「違う長距離だ!」

そう言って引き金を引くがオルコットさんは余裕をもって避ける。

流石に二度目は通用しないか……これ殆ど無理ゲーじゃねえか!

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまでほぼ互角にやりあえたのはあなたが初めてですわね」

「……そりゃどうも」

上から目線なのが腹立つわくだがこのまま行けばジリ貧だ、しかも相手はまだあのビットを使ってはいない。アレを使われると思うゾツとするな。

「ですがそれもここまで。ここで閉幕のフィナーレと行きましょうか!」

四枚のフィンが外れそれぞれ違う動きをしてこっちに迫ってくる。

フィンから逃れようとするがそれぞれが動きを先回りして逃げられない。

ピキユン ピキユン

ピキユン

ピキユン

タイミングをずらしながら撃ってくるレーザー光線にことごとく被弾してしまい集中力が途切れなすがままになる。

「これで終わりか……悔しいな」

初めてだこんなに悔しいと思ったことは……初めてだ負けたくないと思っただのは……！

「終わりですわ！」

四枚のフィンは俺を囲むように並び一斉にレーザー光線を発射させた。爆風がおこり自分の負けを悟ったが、

「……終わってない？」

——最適化処理フィッティングが終了しました。

見るとISの姿が変わり色も更に濃い緑色になったような気がした。

「まさか一次移行ファースト・シフト!? 今まで初期設定の機体で闘っていたというの!?!」

「……まだ戦える」

俺はその感動をかみ締め気を引き締める。今度は武器の欄が自動的に出てくる。

遠距離ライフル『碎羽』、両肩と両手に装備された遠距離エネルギー弾『虚空』。どうやら初期設定のライフルともう一つの武器が解禁されたようだ。取り敢えず俺は『碎羽』を呼び出した。

「ケリ着けようぜ」

「望むところですよ！」

オルコットさんはフィンを飛ばしながら牽制し様子を見ている。それを俺は躲しながら『虚空』を撃ちだし応戦していく。

俺は一旦距離を離し、スコープを覗き込む。

「狙い打つ！」

こつちに近付いてくるオルコットさんに引き金を引く。先ほどと

は比べ物にならない程の速さで弾丸は飛んでいき直撃した。

「まだいけますわー！」

相当なダメージを食らった筈なのにまだ余裕そうなオルコットさん。フィンを動かしながら近付いてくる、二枚のフィンが近付いてきて牽制するが『虚空』を撃ちながら避けていると一枚のフィンに直撃した。

「残り三」

もう一枚のフィンを『砕羽』で打ち落とす。流石に焦りはじめたらしくフィンを引つ込め『スターライトMK?』を構える。

「そりゃ悪手だ」

狙いを定めているらしいが、俺は『砕羽』を引つ込め両手をかざした。両腕と両肩四つの砲門から『虚空』打ち出す。

「クッー！」

「ボサツとしてんなよー！」

必死に避けているが尚も打ち続ける。避け続けてスラスターゲージが無くなったのか急に動きが遅くなった。その状況に応じて『砕羽』を呼び出し狙いをつける。それに気付いたオルコットさんも『スターライトMK?』を構え狙いをつけている。

「これで終わりだ（ですわー）！」

タアン ピキユン

同じタイミングで放たれた銃弾は対なる相手へと向かっていく。だがに疲労感に襲われ視界が霞んでしまう……結局目の前に光線が迫ってくるにも関わらず避けられなかった。

——勝者セシリア・オルコット

「負けた…」

気を抜くのもつかの間シールドエネルギーが0になった事によりそのまま地上へと落ちていく。俺死ぬのか……短い人生でした。

「何勝手に死のうとしてるんですか!?!」

オルコットさんに抱き抱えられる、こういうのって良いもんだな。普通に考えたら逆なのかもしれないけど……。

「ああ天使って言うのはこういう奴なんだろうな…」

「な、なに言ってるんですか」  
もう疲れたお休みなさい。俺はゆつくりと瞼を閉じ、暗闇へと意識を手放した。



## 6話 ヘタレ和解?・する

目を開けると白い天井が目に入った。

どうしてここに居るんだ? もしかして戦闘が終わった後にここに運び込まれた……とかか? 分からん。

なぜか意識が途切れる前になんか恥ずかしいことを言ったような気がするが全く思い出せない。

「やつと起きましたわね」

「お前……ドリル……か?」

「……ハア」

なんだそのため息は……俺はなにも悪い事は言っていないはずだ!!  
誰かそう言ってくれ!! 頼む!!

「君は悪くないよ。悪いのは全部あの自称代表候補生何だよ。(双真裏声)」

「そ、そうなのか?」

「そうだよ。元は言えば彼女がぜんぶ「静かにしてもらえませんか?」ウヒィー!」

な、なんだこの重圧は!?! どこから発生しているんだ?! よく見てみると鬼が居た……金髪の般若が仁王立ちしてました。

「お、おれを食ったてなんの栄養にもならないよ! うん、ならない!!」

「貴方って人は……あの時はあんなにかっこよかったのに……」  
「? 何か言ったか」

「い、いえ何でもありませんわ」

なんだなんだ変なやつだな。といつてもこいつはいつも変だがな……今良いこといったな俺。

「で、何しにきたんだ? もしかして俺を笑いにきたのか?」

「い、いえ違いますわ。ちよつとしたお見舞いですわ」

「じゃあもう終わったな。帰れ」

「ええ!?! そんなもう少し「すまん。一人にしてくれ」……分かりまし

たわ」

言ったら渋々ながら出て行ってくれた。やっとな一人になれる……もう寝よ。

ベッドの中に潜り込もうとしたら勢いよく扉が開けられた。

「今度は何だ?! 鬼か? 悪魔か? いや違う、織斑先生だ!!」

「なにを言っている馬鹿者!」

頭上に出席簿が流星群のように降ってくる……あれこな「馬鹿が」

——ドスッ!

「がつ!」

イテエ……これ絶対本気だ(マジ)だ本気と書いてマジと読むアレだ……本気のボディブローが俺の腹を貫き、しばらく息が出来ずにベッドの上でうずくまっていたが、

「さつと起きろ」

え……今なんと? ちょっと……なに無言で出席簿構えてるんですか? その尋常ではない殺気は?!

「お……おぎまじだ……」

「うむ」

意味がわからず上体を起こし、織斑先生と向かい合う。

「とりあえずは大丈夫なようだな」

全然大丈夫ではありませんが? 主に貴方のせい……こつちの

体はボロボロだよ!

「……なんですか?」

「深い意味はないが、気絶したというので状態を見に来ただけだ」

そう言つて早々に部屋を出て行った。だったら別に殴る必要なくてね?

「そういえばISってどうなったんだ?」

体を調べてみると、首に何かがかかっている。

手に取ってみるとネットワークスだった、達筆な文字で『緑』と模られていた。

「これからよろしくな。深緑」

僅かに光ったような気が気のせいだと思い目を閉じた。

○○○

はい皆さんこんにちは。

俺こと安部双真はただいま空を飛んでいます、ISに乗るのはこれで……何回目だっけ？ まあいいや。とにかく一夏とドリルと俺の三人で空を飛んでいます。

「えくと、角錐をイメージする感じだっけ？」

む、どうやら考え事をしていたら勝手に話が進んでいる。俺も会話に参加してみる。

「いやいや。ジェット風船を飛ばす感じだって一夏」

「そ、そうなのか？」

「そうなんだ」

早速やり始めたのか無言になる一夏。その隙にドリルが話しかけてきた。

「本当に大丈夫なんですか？」

「知らない。適当に言っただけだし」

しばらく話し込んでいたが、突如として一夏の姿が消えた事に気づいた。どうやら普通に飛ぶのが飽きたのか加速してどこかへ消えたらしい、怖い話だ。

「消えたんですけど!？」

「俺しくらね(笑)」

なんて会話をしていたら織斑先生から通信してきた。

『三人とも急降下からの急停止をやってみろ。目標は地面から10cmだ』

なんちゆう無茶振りだ……だが以前にもやっているのかドリルはなんてことのないように答える。

「お先ですわ」

え……もう行くの？ 早くない……？ ねえ。

言うが早いですが既に下へ降りて言われていた事をこなしていた。できてる人はすごいです……根性があるんだろうなあ。

「俺もやってみるか……な」

覚悟をきめ一気に地面へ向かう！

ジェットコースターで一気に降りるような感覚が襲い掛かってくる。ドンドン地面に近づいてきて、恐怖に駆られた俺は指示通りの急停止をした。

「っうおー！」

危なかった……もう少しで地面とキスする羽目になっていた。横目で織斑先生を見ると、

「……まあいいだろう」

よかつたとりあえず及第点をもらいホッと胸をなでおろす。できればもう二度とこんなことやりたくないが……無理か……ハア。

「がんばれ一夏」

まだやっていない一夏を応援する、聞こえてないと思うがな。

一夏も言われたとおり、結構なスピードで降下していく。だが停止するタイミングがわからないのかそのまま地面へと墜落？ してしまっただ。

お土産でグラウンドにでかいクレーターをこしらえてな。

「一夏！」

「織斑君！」

篠ノ乃さんと先生達が一夏のもとへ向かっていく。いいなあ、俺もあんな風に心配されたいなあ……一夏め羨ましい……ちくしよお。

「そ、それなら……私が……」

「は？」

「い、いえ……なんでもありませんわ！」

するとドリルはいつの間にかISをしまい、女子たちの所へ向かっていった。

「俺もISをしまうか」

ISをしまい先生たちの指示を待った。

○○○

「いや、さっぱりした」

あ、今は学校といっても授業が終わりシャワーを浴びてたところですよ。

言葉足らずですいません。……誰に謝ってんだ俺？

「俺ってこの学校でやって行けてるんだらうか？」

いまさらながら不安になる。

しばらく考えていたが、誰かがノックしてきたので扉を開け来客を迎えにいった。

「なんだドリ……オルコットさんか」

「貴方は……まあいいですわ、今に始まったことではないですし……とりあえず、食堂でクラスの皆さんとパーティのをしますからついてきてください」

俺の手を掴んで強引に掴み連行していく。いきなり手をつかまれ思わず顔が熱くなってしまふ、素直に恥ずいぞこれは……マジで。

「じ、自分で歩けますってー！」

自由な方の手でドリルの手を離そうとしたが思わず手に触れてしまい、

「ああ」

同じタイミングで声をあげ、同じタイミングで手を引っ込めてしまふ。

「……………」

気まずい空気が流れ始め、とりあえずはこの空気から一刻も早く抜け出すために早足で食堂へ向かう。

「ま、待ってください」

俺の後ろについてくる、お互いに顔を見えないこのときがチャンスだと思ひ振り向かずドリルに話しかける。

「あの時はすまなかつた」

「え、いつの話ですか？」

「いや、ほら……オルコットさんの胸倉を掴んだ時の」

「そんな事もう気に「違うんだ」……」

それも有るけど、そんなことじゃない俺はいろいろオルコットさん

の……うがー上手く言葉にできない!!

俺は振り向き頭を下げた。

「格好悪いな。あんなこと言って負けたりして……上手く言葉にできないけど……とりあえずすまなかった」

「そんな……いきなり……ずるいですわ」

そんな呟きが聞こえ頭を上げると真っ赤にしたオルコットさんと目が合った。

「言いたいことも言ったし行こうか。オルコットさん」

「セシリア、ですわ。双真さん♪」

……えーととりあえず名前で呼んでいいとかそんなか？

「あーと……行こうかセシリア」

「はいー」

急いで食堂へ向かう。

もちろんくるのが遅かったとかで無茶苦茶冷やかされたのは、言うまでもない。

○○○

その翌日一夏に会うといまだにクラス代表がどうかゴチャゴチャ言っていたので仕方なく聞いていると、面白い話を聞いた。

「そうだ二組のクラス代表が変更になった聞いてる？」

「ああ何とかって転校生に代わったって」

「転校生？ 今の時期に？」

まあ確かに中途半端ではあるな、うん。

「フン、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

尊大なポーズで、そんな事をいうセシリア。それは絶つっつっつっつっつ対違うと思う。それにしみじみ思うんだけどこの性格が無ければ普通に可愛いのに、この残念な性格のおかげで色々駄目になってるんだと思う。

「今のところ専用機を持つてのって1組と4組だけだから余裕だよ」

「その情報古いよ」

みんなが一斉に声のした方向を見るとちっこい女子がいた。

「今誰かちっこいって言わなかったかしら？」

……どうやらちびっ子は地獄耳らしい。あまり不用意なことは口走らないようにしよう……。

「まあいいわ。中国代表候補生、凰鈴音ファンリンインよ！今日は戦線布告に来たってわけよ!!」

効果音がついたらきつと（ドーン）とか（ドカーン）とかなんだろうな……効果音が一緒なのはご愛嬌。

「お前鈴か？」

一夏は立ち上がり、旧友？に会えたことがうれしいのか若干テンションが上がっていた。

「お前何かツッコつけてんだすっげー似合わないぞ」

「一夏例えそれは合っても言っではいけない」

俺はちびっ子をフォローしたんだがなぜか睨まれ、

「なんてこと言うのよアンタはあ！特にそこのお前！」

「お、俺っすか?!」

「アンタ以外に「邪魔だ」……え？」

ギギギギと効果音がつきそうな程の振り返り方だった。だが面倒なことになった、何か変なやつに目をつけられた……今はセシリアだけで十分お腹一杯なのに……。

「また後で来るからね逃げないでよ一夏。お前もね!!」

コエエエエエエエエ!! 急いで逃げる準備をしなければ、俺の命に関わってくる!!

とりあえずはSHRが始まったのだが、例のちびっ子がいつ来るか気が気でなかった。

## 7話 ヘタレ絡まれる

さて授業が終わった……俺がこれからすべきことは………

ちびっこから逃げることだ

思ったら即行動。俺はダッシュで教室を飛び出しそのまま宛もなく走り出した。気分は盗んだバイクで走り出した感じだ。

「あんた何してんのよ？」

……イマノコエハ、ナンダロウカ。

聞こえない振りをしてそのまま走り出したが奴は簡単に俺に追いついた。

「あんたにも用があるんだから一緒に来なさい」

「いやだ！ 俺にはまだやり残した事があるんだ」

「うるさいわね。言う事聞きなさい！」

そう言った瞬間ちびっ子は俺の首をつかみ無理やり停止させた。急に止まったおかげで俺の首に多大な損傷を負ったのは内緒。

「や、やめてください。お願いします！」

「あっ」

「……なんでもございませぬ……すいませんでした」

反射的に謝ってしまいそのまま引きずられる俺。これからどこへ行くんだらうか……暗い未来を想像した俺は肉親に別れを告げたと瞳を閉じた。

「……ろ……おきな……」

ああここは天国かあ……でもなぜか体の節々が痛いなあ。

「起きろって言うてるでしょうが!!!」

「グフツ」

腹に強烈な一撃が来た。一気に覚醒しました。覚醒と言っても決してM発言じゃないんでお願いします。

「痛ってーな！ 殴ることないだろうがバーカ！」

「あんたいつからそんな生なま言えるようになったの？」



「……すいません。もう生意気言いません……」

……恐いこの人……もういや……帰りたい。

「さっさと中に「よう鈴！」……あぁっ！」

ちびっ子が俺を食堂へ入れようとした時、一夏が声をかけてきた。助かった……ありがとう一夏！

「一緒に飯食わねえか？」

「いいわよ。ほらさっさと歩け」

……俺は首根っこを掴まれそのまま引きずり込まれていく。

俺って確かこの小説の主人公だよな……？

「双馬そういう発言は、メタ発言って言って駄目らしいぞ」

お前はなんで俺の心を読んでるんだ！ やめろマジで、俺は今触ったら確実に死ぬハムスター並みにデリケートなんだぞ。

「ほら早く自分の受け取りなさい」

「あ、すいません」

俺は言われた通りに飯をトレイに乗せて二人に着いていく。そして今まで気づかなかったがセシリアと篠ノ之さんが後ろにいた。篠ノ之さんはクソチビの事が気になってるっぽいけど、一夏とクソチビとの仲が良すぎて間に入れてない。

「ソウマさん」

「ん、なに」

「さっつきは何故逃げ出すように教室から出ていったんですの？」

おうふ……このドリルはいきなり聞いてきやがったよ……。

「えーと……ほらあれだ。万引きした少年が店から逃げる感じだよ」

「……意味がわかりません」

「分からなくていいよ……それ以上聞いたらダメだから」

もうね……なんかね……おうちに帰りたい……。

「何そこで固まってんだよ。お前らもこっちにきて一緒に食おうぜ」

一夏よ空気を読んで欲しい。傷心中というか絶賛ホームシックな俺と変なドリルとずっとモジモジしてる篠ノ之さんを見てお前は何か思わないのか！ バカ！ アホ！ マヌケ！

それにチビツコがきたら殺すみたいな視線でこっちを見ているわ

けで気づけよアホ。

「セシリアと篠ノ之さん。指名が入ったから行こうか」

「……そうだな」

「そうです……わね。本当は二人で良かったのですが……」

もういい……なにも聞こえない。俺は心のスイッチをオフにして二人の席に近づき腰を下ろした。席には座ったが俺は話に入る気にもならず無心にカレーをかきこむ。

「あんた、ねえ聞いてんの!？」

「……え、俺?」

「あんた名前なんて言うの?」

「……なんて呼んでも良いですよ別に。多分貴方とは関わらないと思いますから……」

「アンタねえ人が親切に聞いてあげてるんだから答えなさいよ!」

バン! と机を叩き身を乗り出して俺に顔を近づけてきた。なぜか俺にはその顔が鬼に見えて体中から変な汗が出てきた。

「……すいません。調子に乗ってました。安部双真つていいいます。生まれてきてごめんなさい」

恐怖感に駆られ名乗ってしまった。周りを見ると篠ノ之さんが虫を見るような目付きで俺を睨んでいた。特定の人達がやられたら嬉しいだろうが、俺には残念ながらその気がないからただその目をみてもガクガクと震えるだけだ。

「ふーん、アベソウマねえ……確かアンタも専用機持つてるんでしょ?」

「お、おい鈴!」

一夏よ居たのか。さつきから全然声を発さないから死んだと思っただぞ。

「一応持ってますけど……」

「本当に持つてるんだ」

何か嫌な予感がする……他の三人もそれを感じ取ったのか、皆一様に顔を背けていた。俺はというとチビッコが何を言い出すのか、待ってみる。「あたしと戦いなさい!」とか言われたりして(笑)。

「アタシと戦いなさいよ!」

本当にそうだったああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!

「やだ! っつか一夏とかセシリアとかいるだろ! なんて俺なんだよ!!!」

ふざけんやマジで! ビームとか食らったら痛いんだぞ!  
あんなのドマゾ以外誰もやんねーよ。頭沸いてんじやねえのか?  
こいつは?

「お前は脳みそまで筋肉なのかバーバーバーカ! アホ! ゴリラ!」

「あ、あんたねえ! ぶっ殺してやるわ! 覚悟しときなさい!」

「ハア! なんでだよ! なんで俺が無意味に殺されなきゃなんないんだよ。良いよやってやる、後で吠え面かくなよ。バーカバーカ」

「そっちこそ泣いて謝っても許してやらないだから!」

まったくイライラする。俺は勢い良く席を立ち食器を返却口に返し、そのまま大股歩きで食堂を出ていった。

「……ハア……もうやだ家に帰りたい……」

ただいま屋上で自己嫌悪中。

また勢いであんなこと言ってしまったけど……やりたくない……  
もしかしたら死ぬかもしれない、ついそんな事まで思ってしまう。

大丈夫かもしれない。でも世の中には”絶対”なんて言葉はない。

現にほかの国はISを戦争に投入しているところもあると聞いた。  
俺はもしかしたらとんでもない兵器に選ばれてしまったのか……  
なんて思ってしまった。

でもこの話を聞いたクラスの皆の反応は淡白であり、まさか自分がそんなことに巻き込まれるはずが無いとでも思っているような顔だった。

俺は声を大にして叫びたかったが、俺にそんなことが出来るはずが無くただ黙って心の中で叫ぶことしか出来なかった……初めて自分

がこんなにも弱いと感じたことは無い。

ただ一言「これは兵器にすらもなり得る凶悪な物と言うものを理解しているんですか？」と言うだけで変わったかも知れないのだ。

「こんなところにいたんですのね……」

「セシリア……」

セシリアはずつと俺を探していたのか少し息が上がっていた。

「こんなところで何をしていたんですの？」

「……放課後にやる試合の作戦を練ってた」

「一人……で？」

俺は首を縦に振って、ベンチの方へ向かい腰を下ろした。

「勝てるんですか？」

「……十中八九負けるだろ。悔しいけどな……そうラッキーはおきな  
いだろうよ」

「まあ、そうですわね……」

「ありがとな」

「な、なんですの！ いきなり！」

「えー少し気が楽になったから……礼をいったつもりだったんだが  
……」

そんな反応されると辛いな……兎に角前の戦闘みたいにへまだけ  
はしないように頑張らないとな！

「もうすぐ授業はじまんぞ。行こうぜ」

「そうですわね」

俺とセシリアはベンチから立ち上がって教室へと向かっていった。



と、最近の歌手だとか漫画、世間話など他愛も無い会話が続いていく。アリーナが見え始めたところで俺と一夏は別れ、俺は控え室へ真っ直ぐ進んでいった。

「あーあ、死にたくないなあ」

ISスーツに着替えながらそんな独り言を言言ってみる。もちろんそんなことを言っても誰も返してはくれないので言ってもしようがないのだが……なぜか、なぜか喋ってないと異様な寂しさがこみ上げてくる。

「誰か俺の話を聞いてくれないかな」

(大丈夫だ。俺達がすっかりサポートしてやるからよ)

「は？」

なんだ今の声？ 直接頭に送り込まれたような……まあいいか、気にしてもしょうがないし。どうせ幻聴だろ……あまりの寂しさに幻聴が聞こえてくるって、俺とだけ……こんな事考えても意味ないのでやめる。

「さあて行きますか」

そのままみんながいる場所へ歩いていく。

○○○

「やつと来たか」

「すいません。遅れました」

ピットに向かうと織斑先生とセシリアがいた。

「まさかお前が試合に応じるとはな……大方脅されて呑んだとしか思えんが」

「合ってますよ……どうせ俺はヘタレでチキン「いいじゃないか」ゑ」「クラスに、お前みたいなのが一人でもいいじゃないか。からかい甲斐あつてこつちとしては助かるんだがな」

クソ外道め……この人の前世は鬼だ。違うない。

「と、とにかく頑張ってください！ ソウマさん！」

やけにセシリアが優しいなあ、これってドツキリだったりするんだろうか？ きつとドツキリだろう。

「早くISを展開しろ」

「わ、分かりました」

いそいでISを展開してピット・ゲートへと向かう。

「じゃあ行ってきます」

「いってらっしゃいですわ」

織斑先生は既にどこかへ消えてしまったが、セシリアは俺が外に向かうまでずっと居てくれた。そんな些細な事が嬉しくてつい顔がほころんでしまう。

「さあてと中国代表候補生さんごたいめくん……つまんね」

「やつと来たわね。ビビって逃げたかと思つたわ」

腹立つわくでもビビっていたのも確かで、逃げようと思つていたのも確かなので何も言えないのだが……なんだか無性に腹が立つてる。

「そんな軽口言う暇があつたらかかつてこいよ。それとも俺にビビって攻撃できないのか?」

「言つたわねもう許さ「甘えよ」んな?!」

俺はちびっ子が話している最中に虚空を打ち出していた。勿論開始のブザーは鳴ってないから反則なのだが、仕返しも込めて打ち出す。

ギャララーはざわつくが構うものか。

「ざまあみろ」

一言呟いて、ようやくここで開始のブザーが鳴った。

「ぶっ殺すー」

チビッコは薙刀を展開してこちらへ向かってくる。すかさず俺は碎羽を展開しチビッコに照準を合わせる。だが予想以上に速くて容易に懐に潜り込まれる。薙刀を振りかぶった所で咄嗟に碎羽をだしてつばぜり合いの状態に持ち込む。

脳内麻薬がドバドバ溢れているような気がする。いかん……冷静に……落ち着けよ……俺。

「いきなり不意打ち食らわせやがって、アンタ何考えてんの?!」

「手が滑りました」

「……完全に切れた!」

コケにされたと思ったのか薙刀をグイグイと押し返す。それに負けじと俺も押し返す。しばらくそんな状態が続いていた。

だが、今日の俺はなんだか冴えているのかこの状況を打開する名案を思いついた。

ちびっ子が押しているのに対して、俺はそつと後ろに下がった。

「っ?!」

突然そんなことされると、前に勢い良く飛び出てバランスが保てなくなってしまう無防備な状態を晒すチビッコ。そして目の前の無防備な奴を見逃すほど俺もチキンじゃないので、碎羽の引き金を引いた。

——タアンと乾いた音が響いた時には、既に直撃した後だった。俺はとりあえず距離をとりちびっ子の出方をうかがう。……五分ぐらい経ったのだろうか、しばらく動かないチビッコを俺は目を逸らさずにジツと次の出方を窺っていた。

「……さっきの一撃で漸く目が覚めたわ……これからは本気で行くわよ」

喉元にナイフが突き立てられたような感覚が俺を襲う。思わず後ろに下がって距離を取ろうとした直後に俺は見えない力によって吹っ飛ばされ壁に直撃した。

絶対防御が発動してエネルギーをこっそり持っていていかれ、壁に激突したショックで肺の中の空気もこっそり奪われた。お陰で苦しいったらありやしない事。

「これからアンタを蹴り殺してやるから覚悟しときなさいよ」

「じゃあ蹴られる前にお前を墮としてやんよ」

精一杯の強がりをついた後、俺はチビッコに照準を合わせ引き金を引く。銃口から火花が散り、チビッコにむかって飛んでいく。だが直撃もしなければ掠りもしない。

その異様な気配に気後れしてしまつて狙いが定まらない。俺の体を、精神を、どんどん支配していく。もうダメだ……負ける……死にたくない……。

「何やってんの？ 全然当たらないんだけど」



何か眩いたのかもしれないが、俺の耳には全く届かない。恐怖で体が震える。

「あんたつまんない男ね。なんであんたがISに乗ってるのかさえわからないわ……まあいいわ、ここであんたを倒せばそれで終わるんだし……」

そうだな…もう俺のシールドエネルギーも無いに等しいから。やるんなら早くしてくれませんかね。

「アンタとは仲良くなれそうにないわ」

「あつそ。お前が突つかかかってきたんだろ……あ」

いいこと考えた！

「降参しますー！」

声高らかに発し、アリーナに、はては学園全体に響くような声だった。

ビーー！

俺の降参を受け取ってくれたのか終了のブザーが鳴った。

そんなわけでこの試合は終わったのだが、目の前で降参宣言されたチビッコは目を丸くしていた。そして徐々に怒りの色が見えてき初め、今度は殺意の色に変わっていった。

「何それこわい……」

かくして俺は試合に負け『安部双真君、安部双真君。織斑先生がお呼びです至急教員室に来てください』……俺何かした!? ……したか。とりあえず急ご。

俺はピットゲートに戻りISを解除し、急いで司令室へと「ソウマさん！」このエンカウント率……今度からは聖水浴びながら学校を歩こうかな……。

「どうした」

「……見損ないましたわ」

「え？ ああ、そう。じゃあ俺急いであるから用事があつたら部屋にでも来てくれ」

後ろで何か騒いでるけどまあいいか。とりあえずは織斑先生のとこへ急ごう。なんだって至急だもんな、急いだほうが良い。

○○○

俺は呼ばれた通り教員室とか言うところに入った瞬間、急に顔に火花が散った。そして床をゴロゴロと転がり、何かの機材にぶつかり漸く止まった。誰かが悲鳴をあげたような気がするがよくわからなかった。

「なんださっきの試合は」

これは誰の声だ？ ああ織斑先生の声か……口の中が鉄臭い味で支配される。ここで漸く俺は殴られた……と認識した。

「いえ……言ってる意味も俺が殴られた意味も……分かり……ません」「っ貴様……！」

「本当に分からないものは分からないんです！ だって俺はただ不意打ちと降参だけじゃないんですか?! 先生は学園の皆に強くなつて欲しいとかなんとか言つてたけど……そんな無理ですよ！ 大体俺は嫌だつたんですよ！ 初めからこんな兵器持たされて、戦え？ 無茶を言わないでください！ いいですよね先生はふんぞり返ってるだけで良いんだから！ さぞかし気分がいいで」

俺はまた吹っ飛ばされた。どうやらよっぽど苛立っていたんだろう。

もう何だか疲れた……マジでこの学校辞めたるかい。そんな俺の心情とは裏腹に俺の口と体は動いていた。

「分かりましたもういいです」

「何がだ」

俺は待機状態である深緑を首から取り、床に投げつけた。こんなものがあるから……俺は……まじでむかうつわ。

「お前……何をしている」

「こんな物要りません。どうぞ初期化するなり、ぶっ壊すなりしちやつてください」

「何を……言ってるんですか！ 双真君!？」

「俺には釣り合わなかったって事ですよそれぐらい考えてください。良かったですね織斑センセ問題児がひとり消えますよ」

この学校辞めよ。これからどうしようかな……中卒って就職出来

るんだろうか？ とりあえずバイト「双真!?!」……聞いた声が入り口から聞こえた。てか結構いるな……まあいつものメンバーなんだが。それとセツトでチビツコがいた。

「よお一夏。俺この学校辞めようかと「甘えるな!」……なんですか」「お前がやっていることはただの逆切れだ！ そんなことをしてなんの意味がある?」

「少なくとも平穩は帰ってきますね。織斑先生に殴られたりもありませんね、うん」

「なんだお前は私に殴られるのが嫌なのか?」

「当たり前じゃないですか。あとこの学園じゃ」私が正義 っていう感じが嫌なんです。……ISが無ければ何も出来なくせに……」

「双真テメエ!」

何故か知らないが一夏が急に殴りかかってきた。もちろん避けることも出来ず顔に直撃した。痛くてたまらないが無理やり立ち上がり、口から言葉をひねり出す。

「やっぱ根っこは変わんないんですね。最終的に暴力つて……ちゃんど躡し……たん……」

最後まで言おうとしたが、目の前が暗くなりそのまま床に倒れた。

○○○

「(ん)ど(ん)……」

白い天井が見える俺何してんだ？ あの時気絶して……なんか色々言っつて訳分かんなくなつて。

「痛っ」

どうなつたんだ……思い出せない……まいつか寝よ。

「ソウマさん!」

「ドリア……何してんの」

「ド、ドリア!? 私はセシリアです!」

無然とした表情でこちらを睨んでくるが、別に怖くないし……なんて思っついたら急にこっちに近づいてきた。

バチン!

「……なにさ」

「貴方という人に心底腹が立った……というだけです。私と戦ったときは「うぜっ」なにか言いましたか？」

「いやなんでも無いよ。で？　続きは」

それからクドクドペチャクチャ説教垂れてくる。別に真面目に聞いてないからいいんだけど。でも騎士道精神がどうか言ってたので、どうでも良い内容だったのだろう。

「あのさセシリア」

「なんですか」

「一応言っとくけど俺日本人。セシリアイギリス人。ここんところOK？　それで続けんるんだけど、俺はそのキシドーサーしんとかブシドーサーしんとか言う奴嫌いな、努力の次に」

セシリアは押し黙ったまま俺の話を聞いてくれる。

「まあ俺は俗に言うへタレって奴じゃん。だから俺は生きれたら良いしその為だったら、反則使ったって良いし、降参も有りと思うんだが？」

言い終わるとまたビンタされた。いてえ……。

「私もそれが悪いとは思いませんが、少なくとも今回はやりすぎです。貴方は相手の事を考えずにああいう態度を取った事に怒っているのです。あんな行為人間のする「だから？」……」

「俺は生きたいからしたまででお前に人間じゃないとか言われる筋合いは無い。そりゃ反則は……まあそりゃ悪かったとは思うけど、それは良いん「良くありません！」……なんなんコイツ」

「何がどう良いのですか！　貴方ちよつとおかしいんじゃないんですか?!」

「ああ俺はおかしいよ。お前ら英国人と違って騎士道精神とかは持ち合わせていませんから。だから俺は不意打ちもするし命乞いもする。お前は俺になんかの幻想抱いてんのかもしんないけど、俺はただのへタレでチキンの小物です。貴方とは違うんです」

「……そうですか。もういいですさよなら」

セシリアは椅子から立ち上がり出ていった。まあ反則は良くない

？ よな。うん、良くない。あとで謝ろ。

「まいつか。寝よ」

俺はベッドに背を預てそのまま目を閉じた。

## 9話 ヘタレイジケル

携帯のアラームが鳴り俺は目を醒ます。半覚醒状態の俺は寝惚け眼をこすり、洗面台へと向かった。

蛇口を捻り冷たい水で顔を洗う。

「スツキリ！」

何かの番組か忘れたが、それらしい事を言って灰色の脳みそを無理やり起こす。

「……やべえなあ。なんか教室行きづらい……」

織斑先生にも殴られたし、一夏にも殴られたし……はあ、憂鬱。サボりたいな。でも考えても仕方がないので制服に袖を通し、準備が整った所で食堂へ向かった。

○○○

気のせいだろうか……やけに視線を感じる。いつものように動物園のパンダを見る感じじゃなくて、無茶苦茶敵意のこもった視線……どうにも居心地が悪い。

仕方が無いので天そばを急いで口に運んでさっさと教室へ向かう。昨日の事ってやっぱり駄目だったのか……？ どうにも理解できない。

IS学園ってこんな学校だったのかよ……すこしいや、かなり幻滅した。もっと和気あいあいとした感じでISの事を勉強するのかもしれない……ただの軍隊学校じゃん。

ああいうの……所謂覚えられなかつたら、体で覚えろっていう感じ教育って性にあわんどうにも。

そりや学園にいる女子はそれが当たり前だったんなら、別に良い。俺は何も言えない。でも俺は所謂この世の中でいう負け組。

俺は小学校・中学校とをISの、あ、の字も知らずに生きてきた。偶に女子からはキモイだのウザイだのイチャモン付けられて殴られたりしたこともあった。それでもめげずに生きてきた。

って何感傷に浸ってんだ俺。過去はどうでもいいだろ。

色々考えていたら教室の前まで来ていたらしい。扉を開け教室に

ビシャ……なんだこれ……水？

ワツツハツプン？

「ごっーめん。お茶飲もうとしたら。安部君にかかっちゃった☆ごめんね？」

「……じゃあ俺雑巾持ってきて拭いとくから……別に気にしなくていい……」

ここまでするかよ……エゲツネエ……女性不信になりそう、割りと真面目に。

とりあえず制服が濡れているので、一旦教室から出ていく。後ろから不愉快な笑い声が聞こえてくるが無視して、久しく忘れていた感覚に寒気を覚える。

乾かしたいのは良いがどうやって乾かすそうか……とりあえず屋上に行こう。外だったら乾くだろう。

俺は駆け足でいつもの屋上へと向かう。

「ハア……やっぱ昨日のが駄目だったか……」

先生に言ってもなあーまた面倒ごとになると思うし……それに先生たちの事だから、我慢しろだとか言っても取り合ってくれないと思うし。悲しいなあ、泣けるなあ。

こんなときってどうしても仲の良かった奴等を思い浮かべてしまう。一人って辛いわ。

「もう授業とかどうでも良いや、寝よ」

天気は俺の心と違って快晴だし、春眠暁を覚えずって言う一文も有ることだしな。ゆっくり寝るとしよう。うん、それが良い。俺はベンチに寝転び目を閉じる。

キーンコーンカーンコーン

チャイムの音で目を覚ました俺は半身だけを起こして誰か来てな

いか確認する。結局授業サボっちゃまった……まあいいか。あその空間にいるより百倍マジだし。それに授業サボって、後で織斑先生に説教受けたほうが精神的に楽だ。

でも不意に悔しいって思ってしまった。何故か女に良いようにやられて怒りが沸々ふつつ湧いてくる。でも俺に何が出来る？無理だろ、諦めろよ、お前はいつものようにヘラヘラ笑って、土下座してる方がお似合いだぜ、なんて心の声が聞こえてくる。

「ちくしょう……なんで俺はこんなに………弱いんだ………」

声を出して言うのと一層惨めな気分になる。勝手に涙が出てくる……止まらない止まらない止まらない。

いつそこから飛び降りやろうか………なんて思う。

そんな考えを首を振って頭の中から追い出す。でも結局は泣くことしかできない自分に腹が立った。この感情を誰かにぶつけてやりたい。

「うわあああああああああああああああああああああああああああ  
あ」

とりあえず絶叫して、床を殴った。こんな事をしても意味がない……けど、殴る何回も。痛みは感じない……けど胸がキリキリと締め付けられるような感覚がたまらなく鬱陶しかった。それがさらに怒りを増幅させる。

「こんな事やっても……虚しいだけなのになあ」

よく見ると殴った方の左拳から血が出ている。それも結構な量……やべっ意識したら痛くなってきた。

はははははははははは早く保健室に行かねば！

「やばいってマジで！ どれくらいやばいって言うマジやばい！」

「そんなにやばいんだったら保健室に行ったらどう？」

「変な声が聞こえたああああああああああ！ きつとこれはこの屋上から飛び降りた哀れな女子生徒に違いない！ そして俺を今から殺すために話しかけたんだー！ きつとそうに違いない！」

「やつ、ちよつと待って！ 私をいきなり学校の七不思議みたいな扱いにしないでくれる!？」



「父さん母さん妹よ。そしてまだ母さんのお腹にいる弟か妹よ、出来れば弟がいいです。俺は今から旅立ちます……どうかお元気で「人の話を聞きなさい！」「ごごめんなさい！ 食べないでください！」

「あ、うん、私の話を聞いてっつていったけど、土下座はやめて欲しいなあ……お姉さん困っちゃうんだけど……」

何か言ってる何か言ってる。屋上の幽霊さんは殺す前の準備か何かをしているんだろうか。

てか血が！ むっちゃや出てる！ そして痛い！

「まあ良いや……話は保健室で聞くから。行くわよ」

無理やり立ちあがらせ、そのままどこかへ連行された。どこへ連れていくんだ……地獄？ 霊界？ はたまた天国？ 戯言か……。

もういいや流れに身を任せよう。

○○○

「そうか……そういう事なんですか……分かりました」

「どうかしたの？ 主語が無いとお姉さん困っちゃうな」

何故か連れてこられたのは保健室で、何故か左手の治療されている。なんで何が起こった？ その前にこの人誰？ やっぱ幽霊？

「私は幽霊じゃないよ。まあ強いて言うなら……この学園の最強って言った所かな？」

急に扇子を取り出してバツと広げる。扇子には最強というふた文字が。

「で、そのさいきよーさんがどうして俺に構うのですか？ 俺なんてただの路傍の石ですよ？」

「まあそんな風に言わないでよく。まあ強いて言うなら君がISの操縦者だから……かな？」

「じゃあ一夏の方が良いですよきつと。なんせ織斑千冬の弟なんですから。顔も良い、ネームバリューもそこそこ最高のブランド品じゃないんですか？ 女にとっては」

「そういう言い方は良くないな。お姉さん困っちゃう」

飄々としている段々と態度がムカついてくる。抑えろまた問題を起こしたら……メンドイ事になる。一応治療してもらってんだから

……抑えろ。

「そういえばどうしてさつきあんな所にいたの？」

「……貴方にはカンケーの無いことです。さいきよーさん」

「私本当は知ってるんだ。貴方が今微妙な……いやかなり危ない位置にいるの」

「知ってるのに態々聞いたんですか。貴方も大概下衆なんですな」

「そりや当たり前だよな。不意打ちして降参とか虐められても仕方がうるせえな！」あちら怒っちゃった？ でも言うよ。昨日行動は貴方の人間としての品位が動物「やめろっ！」

俺は最強に殴りかかろうとしたが、簡単に動きを読まれ関節を極められた。抜け出そうとしても腕がミシミシと悲鳴を上げる……痛え。

「抜けないよ無理無理、君の力じゃあ駄目」やってみないと分かんねえだろうがっ！」へっ

無理やり引き抜こうとすると悲鳴を上げる。痛いでも我慢する。ここで負けたら俺は……。だからやる。

力をもっともっともっともっともっともっともっともっと。限界を超える！ 越えて見せる！

ゴキユ！

「えっ」

占めた！ 力が弱まった瞬間一気に抜け出し脱臼してない方の腕で最強を突き飛ばした。やっぱり女なのか俺が突き飛ばしても結構吹っ飛んだ。

「痛たたた。まさか脱臼してまで抜け出さそうとするとは……予想外だったわ」

埃を払い立ち上がった。でも彼女の頭からは打ちどころが悪かったのか血が出ていた。痛む腕を庇いながら消毒液とガーゼを勝手に取り出しゆつくりと彼女方へ近づいた。

「まだなんかするの？ 流星にもう止めてほし……あら？」

頭を打ったショックか分からないが倒れそうになるのを抱きとめる。無事な方の腕を貸してやり、ベッドへと降ろす。

「あちら意外と紳士なのね」

「黙って寝てくださいい……つうつ」

左手は……動かないので、右手で……しまった脱臼してた。てか痛ええええええ！洒落にならん！でも治療しないと行けないし……残ってるのは……口しか……あかん、恥ずかしい。

「大丈夫だよ。これぐらい」

「貴方は馬鹿なんですか。死ぬんですか。貴方は寝とけば良いんです」

「いやだって、君の方が明らかに重症じゃないの。馬鹿なの？死ぬの？君こそ寝れば良いじゃない」

そんな言質取ったみたいな顔してされても困るんですけど……。

「じゃあ俺が人呼んできますから、大人しくしといて下さい」

「大丈夫だよ。もう呼んであるから」

「じゃあそれを……つうー」

父さん……腕が……痛いです。

「はいじゃあ私と変わろうね〜」

言うが早いベッドから飛び起きて、かなりの早業で俺をベッドに寝かした。この人人間じゃないな。

てかさ動きが捉えられないってどうよ。

「もう君は私の玩具だよ」

「貴方の玩具だったら、俺を壊してくださいよ。あ、それともサンドバッグにしますか？いいですよー口も動いて暇しないし、ムカついたら殴れば良いんだら」

さぞかし気持ちいいでしょうよ。とそんなことを吐いて彼女の反応を窺う。もつと嬉しそうにするのかと思ったら、何故か複雑な表情をしていた。

「……まあいいわ。貴方がそう思うんだったら勝手にしなさい。どの道サンドバッグ何かにはしないけどね。一期一会っていう言葉を大切にする人だから私」

「二期一会って何？俺の事人間だなんて言うの。アンタ先言ったよな動物だって……もう言いんだよ……そういう気の遣い方……どうせアンタも後から笑うんだろ？良いよ理不尽な扱いも理不尽な暴



「たてなし？ 変な名前……プツ」

「笑わないでよ……しかも笑われたの初めてだし……」

以後もよろしくもしたくないけど一応頷いておく。

「俺の名前は……ってどうせ知ってるんだろ」

「えーでも君の口から聞きたいな☆」

「ハイハイワカリマシタ。俺の名前は安部双真です。多分会うことは無いと思うけどよろしく」

「はいよろしく」

そんな自己紹介も終わって沈黙が全速力で走ってきた。別に気まぐずは無いんだけどなんか更識さんがすごい気まずそうに俯いてらっしゃるんですよ。変な人って思われてるんだろうか……当たり前か（笑）。

「お嬢様」

そんな声が聞こえたかと思うと女の子二人が歩いてきた。ひとりの方はどつかで見たような気が……しないでもない。まあ人違いだろ。

「あ、ベーやんだ。どうしたの？ 今日全然授業来なかったね」

「いや、いやいや、いやいやいや！ その前にベーやんってなに!? つつう」

「なにになにどつか痛いのか？ お菓子の食べ過ぎは良くないよ。うん良くない」

「何勝手に自己完結しちゃってんの!? いい加減……痛い……」

「本音。話が終わらないから。少し黙ってくれるかしら」

「出たよ！ お姉ちゃんメーレー」「ほ・ん・ね?」「はい」

本音さん？ は口を3の字にしてまだブルー垂れていたがしばらくしたら黙ってくれたようだった。

メガネを掛けた如何にもキャリアウーマンやってますみたいな人がメガネをクイツとあげ、口を開いた。

「で、どうして私たちを呼び出したんですか?」

「それはまあ見たほうが早いといえますか……なんというか」

メガネの人ジツとこつちを見てくる、どうなるんだらうって一瞬だ

け不安を感じてけど、メガネの人は更識さんの肩に手を置いて――

「警察に行きましよう」

スザ○ヌもびつくりな発言をして俺と更識さんの目を丸くさせた。







「じゃあ分かりきってるじゃないですか……なんであんな落ちこぼれが我等が学園最強とツルんでるんだってなると思いますけど?」

そしたら更に俺への風当たりが強くなって、もっと生活しにくくなるじゃないですか……。

「そうだね。でも元はと言えば君が悪いんだし、そんなことは自分で解決してよ」

「はい正論きました。わく俺の負けですね」

「そうそうそれで良いんだよ」

とは言った物のぶつちやけた話、別に無視しとけばいい話なんだけどさ……出来るかな俺に……。

俺が大怪我負って虐めた奴ら自主退学！ みたいなシチュエーションが個人的には好ましいな、うん、よし！ この作戦で行こう！  
「そうですね！ 自分でなんとか解決してみせます!!」

「そうだよ！ その意気で頑張ろ！」

俺の薄っぺらい言葉に騙されてくれたのか、妙なテンションで乗っかってくれた。

「じゃあ困ったときは「大丈夫です！ 自分でなんとかします」…そう?」

「任せてください姉さん……あ」

「……姉さん?」

「違いますって！ きつと姉がいたらこんなだろうなって……俺なに言ってるの?!」

何かいろいろ間違ったああああああああああああああああああああああ。違う！ 俺は墓穴を掘ったのかああああああああああああああああ。不覚！

「いやほらっ、あれですって先生の事を間違って母さんって言ってしまふあれですよ！ かかかかかか勘違いしないで欲しい……です……」

「あ、うん、分かってるよ」

なんとか誤解は免れてくれたか。

「でも本当に困ったときはお姉さんに任せなさい」

「は〜い」

この人優しいな……きつと姉がいたらこんな人なんだろうな……しかも美人っていう……。姉さんって呼んでもいいかな……。聞いてみよ……。恥ずかしいけど。

「……やっぱ姉さんって読んでいいですか……」

更識さんは俺の言葉に目を丸くする。引かれたかな……。俺……当たり前「いいよ」ゑ。

「良いんですか!?! 本当に!」

「それくらいだったら構わないよ。勿論そ「ありがとうございます!」……うん」

なんか素直に嬉しい! なんか友達が出来たみたい、いや家族?

なるのか? まあいいやとにかく嬉しい。俺は更識さんの手を取って何回もお礼を言った。

「近い! 近いよっ!」

「あ、ごめんなさい……つい嬉しくて」

更識さんは顔が赤くなるくらい怒っていた。やっぱ手を握ったのが駄目だったのか……。そりやそうか、普通に考えたら嫌だよな……。軽率だった。

「もうしません……許してください」

「そこまで言わなくても良いんじゃないかな……。あはは」

若干呆れながらも許してくれた。

それから更識さん改め姉さんとしばらく話して、面会終了のアナウンスが鳴り姉さんは帰っていった。

だれも居ない病室で明日からの考える。

「やっぱ迷惑掛けたくないよな……うん」

姉さんはいつでも相談に乗るとは言っていたが、俺にも辛うじて男としてのプライドがあるのか、つい迷惑掛けたくないという考えが出てしまう。

「やっぱ俺は馬鹿だな」

自嘲気味に呟き目を閉じた。

〇〇〇

「退院おめでとう！ もう帰ってこなくて良いわよ」

割と本気 of 目で帰ってくるなって目が語ってるんですけど……怖いんですけど。」

「やだなあ〜俺も好き好んで注射されに来ませんよ」

内心ビビリながらも、冗談を言って誤魔化す。

ここの中央病院からIS学園の距離は短い。大体歩いて5分程度くらいのもので、看護師さんに適当に別れを告げ、IS学園かのごくへと歩いていく。

「うわっ見えてきた」

病院生活楽だったな〜なんもしなくてもいいからさ。イジメもない、暴力もない、まさにパラダイス！ 桃源郷！ 素晴らしかった。

校門が見えてきたところで誰かが立っていた。

「……校門の前に誰がいる？」

少し気になりながらもゆつくりと歩いていく。焦らない焦らない一休み一休みつてね（笑）。

「……久しぶりだな。安部」

「あや〜これは織斑先生じゃないですかっ！ ちゃんと教師やってました？」

「……人を馬鹿にするのも大概にしろよ」

「嫌々だな。冗談ですよ」

今度変なこと言ったら教育的指導でつけんせいさいをされてしまうので、何も言わない。お口にチャック！

「そういえば織斑君達は元気にしてました？ それと授業はどのくらい進みました？」

「落ち着け。織斑達も元気だし、授業もそんなに進んでない。それと安部」

織斑先生はポケットから、ネックレスを取り出した。

「これを返しておくぞ。お前も一応国家に「分かりました」……そうか」

深緑を受け取り、無造作にポケットの中にしまう。久しぶりの対

面って言うのに中々テンションが上がらない。

「どうかしたんですか？ 顔色が悪いですよ。保健室にいきますか？」

織斑先生は静かに首を振って、校舎の中へ消えていった。まあ世界最強なのだから体も丈夫だろ。俺が気にすることでは無い、今の問題はイジメだ。

何気なしに時計を見ると8時半。もうすぐホームルームが始まってしまう……まあいいか。どうせ対した事言われないんだろうし。行っても無駄無駄。

「ゆっくり行こう」

階段を上がりながら、好きな音楽を口ずさみ教室を目指す。

「意外と早く着いたな……まあ良いや」

ゆっくりと扉を開けて、バレないように入るか。扉を勢い良く開けて今までの俺とは違うんだぜアピールをするかどうか………むむむ、迷う。

2chに安価取るか……どうしよう……ええい！ 男は根性！

「ラウラ・ヴォ「遅れましたー！」……」

扉の大きな音と俺のデカイ声が合わさって誰かの自己紹介と被ってしまった。何か教壇の前に二人ほど並んで……金髪と銀髪って（笑）なんか折り紙みたいだな。

「……ヴォーデヴィツヒ、もう一回自己紹介を頼む」

ボーデビツヒ？ さんは織斑先生にビシツと敬礼をしたあと、自分の名前だけを言っ黙り込んだ。

俺もそろそろ席につきにたいので、自分の席を座る。

「やっと帰ってきたわく何日振りだ……この席に座ったの……」

割とどうでも良い事を考えていたら、パシシツと音が鳴った。

「さっきのいい音はなんだ……」

どうやら銀髪さんが一夏にビンタ食らわせたっぽいな……でもあのレベルからすると俺が先生にぶん殴られたほうが絶対痛いに違いない。アレまじ痛かったから、オバケも泣いて逃げるレベルだった

な。

### 閑話休題

あの銀髪の人大丈夫かな……一夏にビンタ食らわした事で、めっちゃ睨まれてるんだけど……狂信者に……虐められてたら出来れば力になってあげよう……。

そんな騒動も終わり、1時間目はグラウンドに出て実習との事。俺は騒動に巻き込まれたく無いため、こっそりと教室を逃げ出し更衣室に駆け足で向かった。

○○○

「着キタコレ！」

さっさと着替えたかいがあったってmondだよ本当に。俺がグラウンドをチヨロチヨロしている間に着替え終わった生徒たちが続々と校舎から出てくる。

早めに着替えて良かった……あれに巻き込まれてたら絶対遅刻だったわ。

「おいヘタレ〜」

「……なんですか。俺アンタ等の事知らないんですけど……」

「え〜そんな事言わないでよ。おんなじクラス何だから仲良くしようよ☆」

俺は別に仲良くしようとか全く思っていないけどな。

「で、言いたいたいことはそれだけ？ 俺結構急いでるんだけど」

「へ〜『着キタコレ！』って言ったてたくせに、暇なんだ……良いご身分だ、ね！」

知らない女から蹴りが繰り返される。かなりの速度があり避けるのは……いや避けなくてもいいや。

ビシッ

左足に直撃、結構痛い。屈したら駄目だ……心をOFFにするんだ……。

「……………で？」

「何スカしてんのよ。ほら土下座とかしたら〜？」

何それこわい……俺がいつも土下座すると思ったか？ 大間違い

だよボオケ！ とは言えないので心にしまっておく。

「放課後体育館裏きなさい。来なかったら……分かってるわよね？」

「……」

なんかドラマみたいだなくって思ったけど、これかなり危機的状況じゃね？ まあいいか、アイツ等を自主退学にする為に俺は折れてはいけない。

「整列しろー！」

鋭い声が響き皆並んでいく。俺も適当に後ろに並び、なるべく目立たないようにする。

「では二人一組となつて準備体操を始めろ！」

「……まじ？！」

それなんて死刑宣告ですかこの野郎。チクシヨコノヤローバカカバーカ……まあそんな事思つても仕方が無いけども……。

皆が次々と一緒にやる人が決まり、俺一人に……どうやらもう一人お仲間がいた。例の転校生である。

まあそんなわけで俺はヴォーデヴィツヒさんの所へ近づき声を掛けた。

「……良かったら一緒にやりませんか？」

「………こちらとしては断る理由がない」

何か言い方が回りくどかったけど、了承？ してくれた。

「ヴォーデヴィツヒさんはどこから来たんですか？」

「ドイツだ」

「……誰が？」

「貴様ふざけているのか？」

なんか発音がおかしかったような気が……どこのどいつだ？ みたいな感じ。

「あ、あごめん。ベルリンの壁があつたドイツでしょ？ 知ってる知ってる」

「そうだ」

会話が進まねえ……でもこれ以上と突っ込んだ事聞いたら殺されそうだしなあ。でも一応忠告はしておこう。

「そういえばさつき一夏にビンタしたじゃないですか」

「……そうだな」

「多分というか何というか、あれでこの学園の女子の何割かは敵に回した事は覚悟して下さい」

狂信者たちは絶対目を「下らん」OH……。

「群れなければ行動できんクス共に屈すると？ 馬鹿馬鹿しい、そんな物真っ向から叩き潰してやる」

……………ヤダカツコイイ。

「それに専用機も満足に持てない「ヴォーデヴィツヒさん！」なんだ」「俺に……俺に戦い方を教えて下さいっ！」

精一杯頭を下げ、精一杯の誠意を見せる。駄目かなあ……でもこの人について行けば、確実に強くなれるような気がするんだけどなあ。「断る」

「……訳を教えるて欲しいのですが……よろしいでしょうか」

「貴様の軟弱な眼が気に入らん。それだけだ」

この人やべえな、俺がヘタレだって一瞬で見抜いたんですけど……。会社の人事課みたいな観察眼もった人だな。

「……でも俺諦めませんから」

ヴォーデヴィツヒさんは鼻で笑い、列に戻っていった。

## 11話 ヘタレ自分の内情を語る

「安部君」

「ん？ 貴方は誰でしようか」

イツけねつい敬語で喋っちまった……て言うか誰だこの金髪さん。  
「や、やだなあ忘れないでよ……一応君と同じクラスのシャルル・デュ  
ノアって言うんだけど……」

「へくそうなんだ。何かと生活しにくいとは思うけど頑張つて」

「う、うん。それは頑張るけど……随分違うんだね」

「何が？」

「違う？ 何が言いたい。主語を言え主語をとほ、言えないので心に  
しまつておく。」

「一夏とのモチベーションの差……っていうのかな？ 全体的にやる  
気が感じられないんだよね」

「今カチンと来たぞ。なんだよモチベーションの差ってバカにして  
んのか。俺だつて好き好んでこんな兵器持ったわけじゃないんだよ。  
何も知らない癖に。」

「あのな一応言つとくけどな、俺はお前らと違ってISにあんまり触  
れてなかったんだよ。ただ試験会場ミスつてISに触ったら起動し  
たんだよ」

「あーイライラする、しかも一夏とつて……なんで皆一夏基準なんだ  
よ、馬鹿じゃねえの。普通からしてみれば一夏も充分狂つてるとは思  
うんだが……気のせい？」

「でもそれつて一夏も同じなんじゃ無いの？」

「……………」

「ゴメンね？ 変な事言っちゃつて。あはは」

うっぎ。なにはい論破みたいな顔してんだ。

「……俺用事があるからこれで。機会があつたらまた。マジウゼエ」  
最後のうぜえは聞こえないように言い、その場から足早に去つた。

○○○

「やっと来たわね」



「……………」

先の転校生のせいで若干イライラしている俺。早く終わんねえかな。

「殴るなら早くしてください。俺勉強しなくちやいけないんで」

「アンタマゾ？　なんで好き好んでアンタみたいなクズ殴んなきやいけないわけ？」

「じゃあ何で呼んだんだよ。意味が分からない……………ああ、俺みたいな下等な屑には理解できない、さぞ高尚な理由があるんですね。わかります」

言い終わると殴られた。別に痛くは無いから問題は無いのだが……………こんなレベルで大怪我出来るのか心配になってきた。

「なんで俺を目の敵にするんだ？　妬み・嫉みか？　うん？」

「……………アンタ等帰っていいわよ」

取り巻き二人を帰らせた後、女はフウーと息を吐いた。

「——単純に気に入らないだけよ。土下座して解決すると勘違いしているアンタが」

「え、そんだけ？　俺が専用機持っているのが気に入らんとかそういうのじゃないのか……………」

これじゃ色々考えてた計画が台無しじゃん……………つまんねえの

「話終わった？　じゃあ帰るわ」

女の横を通りすぎて寮に帰ろうとしたら、頭に衝撃が走る。いきなりの出来事だったので思わず転倒してしまった。

「アンタのスカシた態度。屑みたいな性格。男の癖に男の癖に男の癖に男の癖に男の癖に——」

女の容赦の無い蹴りが、腹を足を……………とにかく蹴られまくる。痛え……………。

「ぐっ……………や……………めろ」

「何でゴミが喋ってんの？　理解できないーい」

不愉快な笑い声が耳に侵入してくる。うぜえ……………でも反抗しても意味がないことは分かりきってる。ここでそんな事をして更にも更に調子に乗るだけだ……………。

「ねえねえ起きてよ〜」

胸ぐらを掴まれ無理やり起こされる。女の顔はさつきと打って違つて感情の無い人形のような顔。

女は空いてる手で腹を殴る。

「ガハッ!？」

口を抑えゲロを吐き出すのを我慢する。コイツ容赦ねえ……なんちゆう世間なんだよ……これもISのせいなのか……？

「ゲロ吐くとかやめてよ、ね!」

女から繰り出された蹴りは俺の腹に直撃して――

「ウゲエエエ」

とうとう我慢できずに胃の中の内容物を吐き出してしまった。女はそれが面白いのか腹を抱えて笑っていた。怖い……なんなんだよ! こいつは! 何で人を殴って笑ってるんだよ! こんなのおかしい……狂ってる。

落ち着け……怖がるな……俺はコイツらを退学にするために「まだ足りない」……は?

女はそう言つてゆっくり近づいて来る。

「や、やめろ……来るなああ!」

「やつぱさうだよね! 安部はそうでなくちや☆」

女は何が嬉しいのか、俺に情け容赦なくパンチを繰り出す。もはや顔とか関係無しに殴る。女は終始笑顔で、それが更に恐怖心を加速させる。

「……ふうスツキリした! 安部君ありがとね〜じやあまた明日」

やつと終わった……俺も寮に帰ろ。

「あ、あれ? 足に力が」

やべえ、体中が痛え……誰か来ないかな……姉さんに電話……いや自分で解決するつて言つた手前、言うのはちよつと気まずい……仕方が無い自力で帰ろう。

痛む体に鞭をうち、壁に支えてもらいながら、ゆっくりと寮へ戻つた。

寮へと戻る途中何度も生徒とすれ違つたが肩を貸してくれるなん

てイベントは無かった。あつたの嘲笑と敵意の視線だけだった。

近くにあつた手洗い場に行き、蛇口をひねる。取り敢えず泥だらけの顔を洗い、次に口をすすぐ。

口が切れてるのか、ピリツとした痛みが襲い、眉をひそめる。

「ついてねえ……はあ」

今更だけど俺はこの学園に来て間違いだったと再認識した。

○○○

「やっと着いた……泣きそう……」

もうダメだ……早く部屋に入ろう。俺は扉を「おかえ——どうしたの?!」……ハア。

「姉さん。勝手に入らないで下さい」

やつと一息つこうと思つたら、姉さん襲来である。どこのラノベ主人公だ……はあ。

「あ、ごめん……じゃなくて！　なんでそんなボロボロなの?!」

「階段から落ちて。グラウンドで転んだりしました」

「明らかに嘘つてわかる。嘘をつかない！」

「別に姉さんが痛くないんだから良いじゃないですか！　良いんですよ俺は……別に前と変わらないし。それに自分で何とかするって姉さんに言い「でもこんな大怪我見逃せるほど私はっ」……」

「心配しなくても大丈夫です。なんとかしてみせます」

それにこれ以上心配されると、姉さんに甘えてしまいそうで……嫌だった。

「姉さんも仕事忙しいし疲れてるんですから……無理しないでください」

「私の心配するより自分の心配をしなさい！」

やめろ、それ以上心配しないでくれ……嫌だやめてくれ、俺に優しくしないでくれ！　俺の中に入ってくるな……折角覚悟を決めたのに……どうして?」

俺は自分の心を悟らせないために笑顔を作った。姉さんを心配させないような言葉を口からひねり出す。

「そんなに心配しなくても俺は死には「バカ！」姉さん？」

姉さんは俺の言葉を遮り俺を抱き寄せた。なんで俺は抱かれてんだ？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで涙が出てくるんだ？　分からないワカラナイ。

「汚いから離して？　風呂も入ってないし……」

「……なんでそんな事しか言えなのかな？　人の好意は素直に受け取っておきなさい」

「……はい」

姉さんの心音がトクン、トクンと脈打つのをを感じる。姉さんの体温はとても暖くて気持ちよかった。しばらく体温を感じていたら今更になって、眠気やら何やらが襲って来た。

「……おやすみ」

何かが聞こえたような気がした。

夢を見ていたような気がした。まだ俺がヘタレになる前……中学くらいか？　その時は皆とは普通に話も出来たし、土下座もしなかった。

——いつから俺はヘタレになった？——

——いつから俺は土下座でなんでも解決しようと思った？——

——いつから俺は——もういいや、なんでこんな事を考えるんだよ。

ゆっくりと目を開け、半身だけ起き上がる。

あの後どうなったんだっけ？　よく思い出せない……なんだろう

……なにか大切なことを——なんでもないか。

俺はゆっくりとベッドから出て行き、昨日入れなかった風呂に入る。と言っても今の時間は6時なのでシャワー程度しか浴びれないんだけど。

俺は制服を——しまった……めっちゃ汚れてる……どうしようか……やべえ。

「洗濯はどうだ——出来るわけないだろ……やっべまじやっべ」

よし今日はサボろう。それが良い。先生風邪ひきましたっつて

言ったらなんとかなるだろ。よし。そうと決まれば風呂に入ろう。

俺の気分はオゾン層を突き抜ける位にハイになり、バスルームのドアノブを捻った。

「風呂風呂風呂風呂風呂風呂風呂風呂風呂風呂オオオオオオ」

ジョ○よろしく、奇妙な奇声を発しながらいぎ「なんだ入ってきたんだ〜一緒に入る？」は？

なんだ今のは？ 落ち着け〜落ち着けよ〜今の状況を確認しろ。

今日サボろう。

←

奇声を発しながらバスルームに入る。

←

何処からともなく聞こえてくる声「いや君の前に居るんだけどね」  
な、ななな、なんじゃこりやああああああああああああ。

「姉さん！ なんで！ なんでここに!？」

「いや〜君が寝ちゃった後、私も寝ちゃってさ〜困った困った」

詰んだ人生詰んだ……もう駄目だ……俺は痴漢の容疑で逮捕されるんだ……しにたひ……。

「まあ私はもう終わったから次どうぞ♪」

「あ、わかりました。じゃなくて！」

この人は何も思わないんだろうか……こんなね絶対おかしいと思うんだ。

とりあえず落ち着く為にシャワーを浴びよう、うん。なんか体の節々が痛いし……ハア。まあ原因は分かっているんですけどね……あいきやんふらいしたい。

そんなことを考えながら、シャワーの蛇口を捻る。シャワーから水が出始め、頭とかを洗う。

「あ〜気持ちいい〜風呂は人類が見つけた宝だよ」

どこぞの兵器よりずっと有能だしな。

そんなこんなで風呂場から上がり、スウェットへと着替え、バスルームから出た。

「あ、おかえり」

「……ただいまです」

この人いつまで居るんだろ？ 今日学校なのに……と言っても俺はサボる予定だけど。そんなわけで学校行かないのかって聞いてみる。

「今日学校休みだよ？」

え、ええ、ええええ、マジで？「マジマジ」……ひやつほおおおとおおおおとおおおおとおおおおとおおおお。マジかよ！

キタコレ！ 俺の時代キタ——（。▽。）——！！

そうと決まれば家に帰ろ！ うんそれが良い。母さんの肉じゃがが俺を待っている！ いざ行かん！

「姉さん外に行きたいです！」

「へえ、じゃあ外出届を受付で貰ってきてね」

「はい。じゃなくて！ 出てってくださいよ！」

「えーだってまだ6時だよ？」

そうだった……まだ時間が一杯ある……嫌だなあくどうしよっかな……取り敢えず制服を畳んで、あつちで洗濯しよ。それでそれで何持っていていこうかな……あ、そうだ！

「姉さん姉さん！」

「？」

「一緒に俺の家行きましよ！」

「!？」

姉さんかなりビックリしてる様子で、フハハ気分がええのう。姉さんは迷っているのか、しばらく考え込んでいた。まあ来てもらってもあんま意味ないんだけどさくでも偶には友達を連れて行きたいっていう俺の願望があるわけでして、テヘペロ☆

「……行くわよ。行ってやろうじゃない！」

「本当ですか!？ やったやった。姉さんいい人ゝ流石ゝ」

ヤツベ早く9時位にならないかなゝ超楽しみ。そうと決まれば腹ごしらえですな。

「姉さん俺朝飯食べてきます」

返事も聞かずにさっさと部屋を出ていき、食堂へと向かった。

〇〇〇

カレーうどんをすすりながら、今日の予定を立てることにした俺。そんなわけで今日の予定。

家に帰る↓母さんのお腹の子を見る↓昼飯↓何か色々↓持っついていく物を纏める。まさに死角なし、完璧な作戦である。もう早く家に帰りたいですわ。父さんに会えないかな……会えたら良いんだけどな。

妹？ 怖いからパス。だってヤンキーなんだから。だもん☆

やっべニヤニヤが止まらねえぜ。他の奴らから滅茶苦茶睨まれてるけど、そんなの気にしないぜ。今日はホンマにええ日やでえ。

「双真」

「は？ 誰？」

「何そんなにニヤニヤしてんだよ。良いことでもあったのか？」

「……まあそんな感じ。だって今日学校休みだからさく家にでも帰ろうかと思って」

「あ、そうか。そりや嬉しいよな」

一夏と話していたら、団体さんがこちらへやってきた。あ、勿論敵意の籠った視線付きで、言わないでも分かると思うけど、篠々之さんとチビツコと——金髪の人？ 誰だ？ まあいいか。

そう言えばセシリアが居ないな……まあいいか、俺には関係ねえ。

俺は自宅ライフを楽しむだけだ（キリッ なんちゃって☆

てか俺のテンション上がり幅がやばいんだけど、もう早く家に帰りたい。帰ったらまず何をしようか。

「なあ一夏」

「ん、なんだ？」

「俺あの金髪の人知らないんだけど……誰か知ってる？」

一夏の対面に座る金髪の人を指差し、確認を取ってみる。すると皆から呆れたような声がしたり、ハアとため息をつく人もいた。因みに金髪の人は驚きの余り目をむいていた。

「……それ本気で言ってるのか？」

「し、仕方ないだろ。教室行ったらヴォーデヴィツヒさんが自己紹介してるところだったんだから……」

「なんでアイツの名前を覚えて、シャルルの名前を覚えてないんだ！」  
「影が薄かったんだよ……きつと」

「一応シャルルだって男なんだから……影が薄いって言うのは、無いと思うけどな」

「え！ まじー男だったの?! 知らなかった〜あー知らなかった〜  
てつきり女かと思っただぜ！」

俺が女って言った瞬間、シャルル君？ は体を強ばらせ慌て始めた。なんかおかしな反応だな……一発騒いでみるか？ でもリスクが……ここで騒いだりして、織斑先生がくるかもしれない。

うーん、騒がない程度にやってみるか。

「へえーよろしくシャルル、ちゃん、あ、悪い、シャルル君だった。俺の名前は——ってどうせ知ってるんだろ？ いやでも、男だったんか〜ってつきりおれあ、女、かと思っただよ。体とか細いしき、ちゃんとご飯食べてる？」

「……………食べてるよう！ 馬鹿にしないで！」

うーん何か良心が痛むな……まあいいか。別に俺は何も悪いこと言っていないし。

「安部、弱いものイジメは楽しいか？」

篠々之さんが何か言ってる。弱いものイジメ？ ハッバロス。

「え？ これイジメ？ じゃあ俺が織斑先生に無意味に殴られたのも、そのチビッコに無理やり戦わされたのも、イジメじゃないって言うんですか〜どうなんですか〜」

もういいやこの際全部言ってしまうおう。俺の心の中にある物全部吐き出してやる。

「そ、それは……………」

「一応言っとくけどな、アンタ等おかしいよ。だってさ俺等が乗ってるISってなんだと思う？」

「宇宙活動「それは表の顔だろ？」……………」

「俺達が使ってるISは人を殺せるんだぜ？ そこんとこ分かってくれよ。それなのになんでやれ専用機が欲しいだの、飽くまでスポーツだからとか言えるんだよ！ おかしいだろそんなの」



「私たちは別に戦争に行くわけじゃないんだから、良いじゃないそんなの」

「テメエ代表候補性だろうが、なのに何でそんな口叩けるんだよ。馬鹿じゃね？ お前みたいな奴が候補生だどこぞの国も大変だろうよ」

一夏達は拳を握り締め、今にも殴られそうな雰囲気だったので、「これからは代表候補性らしい行動と責任をもってくださいあい（笑）」  
そう言い捨てさつさと食堂を出ていった。

「怖かった……うわあ膝が笑ってる……」

死ぬかと思った……はっははは……ハア。どうしてあんな事言っただろ。折角みんなと仲直りしようと思ったのに……あーあ。もう嫌だ……ハハハ。

「……何か疲れた。早めに部屋に帰ろ」

「おい、そこのお前」

「俺の事ですか？」

声を掛けられた方向を向くとヴォーデヴィツヒさんがいた。この人っていつも無表情で何考えてるか分からない顔してるよな。まるで軍人みたいな人だな。

「おはようございます。どうしたんですか？ 貴方から声を掛けてくるなんて」

「フン。貴様の不抜けた面が気に入らなかつただけだ。——尤も先の大立ち回りは中々面白かった」

「いや、俺は至極真面目に言つたつもりなんですけどね……見苦しい物を見せてしまって申し訳ありません」

改めて言われる中々恥ずかしいな。うん、何かすげえ顔が熱い。

「まあ世の中そんなに強くない奴だっているんだって、言いたかつただけなんですけどね……ははは」

「そうだなお前は、その弱者の中の更に弱者だからな」

ううう、気にしてるところをズバッと抉ってくるなあ……この人絶対強いんだろうな……良いなあ、俺ももつと強くなって皆をぎやふん

と言わしてみたい。

「じゃあ俺これから用事があるんでお先に失礼します」  
そう言っつて俺は駆け足気味に自室へと足を進めた。

## 12話 ヘタレ帰る

取り敢えず今の時間を確認するために携帯を開く。時刻は8時を過ぎたって感じか……どうしようか。

ついでに、この足で受付まで行って外出届けを貰っておこう。うんそれがいい。

「いざ受付」

ちよつとした冗談を吹き、早足で受付へと向かう。お家に帰れるぜえヒヤッホーヒーハーヒヤッハッハー。きもちの悪い韻(いん)を踏みつつ、目的地までダッシュ。

今俺は風になっている(キリッ

「家に帰るーかつえつるぞー」

俺の心はもう家に帰ってる気分だぜえええええ。もう早くベッドにダイブしたい気分だぜえええええ。

色々したいことが一杯あるぜえええええええ。

「あの……安部君」

「なんだぜえええええ——はっ、誰だ!」

……取り敢えず声のする方を向くと、パツキンの男の娘さんがいた。一瞬だけ嫌な気分になるが、クールに対応して、顔に出さように頑張った。

「……なんですか? えーとデュノア……さん、でしたっけ?」

「僕は男だよ! もういい知らない!」

ハア? 意味わかんね。何勝手にキレてんだ。まあ所詮彼とは友達になれないのだろう。まあこっちから願い下げだけど。でも何か腹が立つので、腕を掴み逃げられないようにする。

「ごめんって、冗談冗談マイケルジョーダン」

「全く誠意が籠ってないうえにギャグが寒いよ!」

「……なんでそんなに怒ってんの? 意味分かんないんだけど……」

「だって君が! 何回も女女って言うから……とにかく! 僕は男なんだよ!」

「そうやって何回も否定してるから、女って言われるんじゃないやね? て

か一々そんなことでキレんなよ。バカじゃねえの？ ——ああ構って欲しいから、そんな事言うんですね分かります。かまってちゃんだなーどうしようもないくらいに」

「……そ、そこまで言わなくても良いじゃないか！ バカー！」

「うるさつあーうん分かった分かった。俺忙しいから構って欲しいなら一夏んどこ行け。俺のところに来るな迷惑なんだよ」

——バチン！ ……ビンタされました。なんで殴られなきやいけないんだ。もういいや……こんな奴と話しても時間の無駄だ。無視しよ。俺はかまってちゃんを無視して受付へと向かった。

後ろから何か聞こえて来たような気がするが、まあ無視した。

○○○

「門限は5時まででとなっていますので注意してください」  
「分かりました」

受付のお姉さんから外出許可証的な物を受け取り、胸ポケットにしまう。やっべオラわくわくすつぞ！

みたいな感じ。早く家に帰りたい。ちよつとだけでも良いから、こんな学校とオサラバしたいぜ。

準備は整った、後は姉さん呼びに行くだけだ。

と言つても姉さんがどこにいるかなんて分からないので、一旦部屋に戻ることにした。もしかしたら居るかもしれないし……。

「なんか行ったり来たり忙しいな……」

今思ったことだけどき……気分的にはもう学校一周してきような感覚なんだよ。しかも寮は違うところだし……あー忙しい忙しい！でも家に帰るためなら、俺は何だつてするぜ！

走りながらニヤニヤしている俺を見て、皆気味悪がっているが仕方がない。俺はなア、テメエ等と一旦とオサラバするんだよー！ こんなに嬉しい事はない！ ゲバファゲブファゲブファ。

そんなことを考えていたら寮が見えてきた。よっしや！ スパトかけるでええええ。

俺は陸上選手宜しく、クラウチングスタート——らしき構えをとり、走り出した。実際こんな構えなんて意味はないんだけど。

でも気持ちの問題なのか分からないが、若干体感速度が違うような気がした。人間心の持ちよう……ってことさね。

寮の入口を潜り、更に階段を駆け上がり、何かもう風になったような気分になって、自分の部屋へとたどり着く。

取り敢えずドアノブを捻り、部屋へとゴールイン。

「ただいま帰りましたっ！」

———とは言ったものの誰も部屋にはいない。まあ何となく……というか、ぶっちゃけ予想はしていたので、姉さんが帰ってくるのを待つておこうか……なんていう事を考えていると、扉が開いた。

「ごめーん。待った？」

「俺も今きましたから、全然待つてませんよ」

なんていう会話をしながら、校門まで向かっていく。

服装について聞かせてください？ え……そんな事言われても困るんですけど……俺唯のPAMAのスエットだし……え？ お前じゃない、その隣の綺麗なお姉さんの方だ？ ええーそんな……俺服とか分からないんですけど……まあ一言でいうなら、何時もスーツビシツと決めてるけど、オフの時はすごい可愛い。

以上説明でしたっ！

「なにジロジロ見てるの？」

「あ、いや、何時もは格好いいけど、休みの日は可愛いんだなつて」

しどろもどろになりつつも答えてそのまま歩き出す。姉さんは何時ものように柔和な顔をしている。正に

日常！ 俺の愛した日常！

漸く校門が見えてきはじめた。ここを潜ると制限つきだが俺は自由になれる。

「じゃあ……からは俺に着いてきて欲しいのですが……」

「そうだね。付いていかないと分からないし」

そりゃごもつとも……正論で返されてしまったので、言葉に詰まってしまう。話題を探さなければ。

俺が話題を見つけようと四苦八苦していると、姉さんが口を開いた。

「昨日の今日で悪いんだけどさ……イジメ大丈夫？」

「……まあ大丈夫ですよ。自分がまいた種なんで、俺なりに解決させるつもりです」

そう言ったものの、正味アイツ等とは会いたくないし喋りたくもない。虚勢を貼るのが精一杯。

ここで辛いつて言ったら、事態は変わるのかもしれないが………悲しいかな、俺の下らないプライドが邪魔して『辛い』つて言えない。

「大丈夫ですよ、俺達何だかんだで姉弟っぽくなってますが、所詮はおままごとじゃないですか。だから更識さんも『姉』つて言う役に成りきらなくて良いんですよ？」

俺は安心させる為に言ってみたんだが、何故か姉さんは怒ったような顔をしていた。

「……君は本当にそんな事思ってたの？」

「あ、いや俺は——」

言おうとしたら火花が散った。吹っ飛んだのか分からないが、地面をゴロゴロと転がり何処か知らないが壁？ に激突してようやく止まった。

多分殴られたんだろうなあって気づくいたのは、何秒と掛からなかった。ただ俺の言葉が姉さんを傷つけたのか、怒らせたのかは分からなかった。

「……………痛てえ……………」

最近殴られてばかりだったが、今回はガンジも裸足で逃げ出すレベルくらいに痛かった。よく気絶しなかったと自分を褒めてやりたいぐらいだ。

「……俺何か変な事言いました？」

「分からなかったら良いよ。何となくやっただけだから」

んな理不尽な……俺は殴られた場所をさすりながら、家路へと向かった。

○○○○

やっとたどり着いた………ただいま。と言うにはまだ早いので、俺はドアを開けた。

「ただいま帰りました」

姉さん無言。でいつものように柔和な顔をしている。別に怒っては無さそうだった。

俺は靴を脱ぎ、姉さんにスリッパを履くように差し出し、二人でリビングへと向かった。

心無しか玄関にある靴が多かったのは気のせいだろう。別に妹の友達がどんちゃん騒ぎしてる、みたいな事は無いのだろう。そう信じたい。

「……あら、帰ってきたのね」

「休みだしね。別に家が恋しくなったりとかじゃないから」

母さんは特に驚いた様子もなく、俺と姉さんを見る。まあ俺個人の見方だから、本当は凄い驚いてるのかもしいれないけどね。

「母さん。この人学校の先輩。何時もお世話になってるから、呼んでみたんだけど……」

「更識楯無と申します」

取り敢えず自己紹介を終えたあと、俺は姉さんを椅子に座るように促し、俺も丁度母さんと対面になるように座った。

「学校は大丈夫？　ちゃんとやっていけてる？」

「全然大丈夫だよ。母さんが心配することは無いよ」

「そう言ってもねえ……アンタは何時も大事なことを隠してから、心配なのよ？　アンタの性格もお父さんに似てるし、すぐ厄介事を招いたりするから」

うぐっ………母さんのおっしやる通りでございます。とは言えないし……心配かけさせたくないしで………うくん、困ったものだ。

「だ、大丈夫だよ。俺の心配より自分の心配しなきゃ……もうすぐなんでしょう？　出産」

「それもそうなんだけどねえ。でも私は貴方を息子だから心配してるの。息子の心配をしない親なんてどこにいるの？　アンタがIS学園に入学してそんなに経って無いのに、こうやってすぐ帰ってきたりするから、心配かけさせるんでしょう？　そこらへん分かってくれて

る？」

「し、仕方ないじゃん。周りは女子ばかりで、すごい疲れるのに……それにイジメもあつたりするん——あ!？」

「やっべ！　口が滑ってしまった！　やべーやべー母さんの顔がドンドン怖くなつていく……姉さんに助けを求めるために、目を合わせようとするが、目を逸らされてしまう……やべえ、詰んだ……」

「アンタまたイジメられてんのかい？　はあ……どうしようもないねえ本当に……まあ、アンタらしいっちゃらしいけどね……ごめんないねえ更識さん。何時も息子が迷惑かけて」

「お気になさらず。私も双真君には手を焼いているので……」

そんな会話をしていると、母さんはこつちをむいて、

「アンタはちよつと席を外しな。彼女からすこ〜〜〜しばかり、アンタの生活態度を聞くから」

ひええええええええええ。俺のスクールライフが白日の下に晒されてしまう！　やべえマジで怒られる！

「ち、ちよつと母「良いから行きな！」はい！」

母さんの気迫に飲み込まれ、反射的に返事をしてしまう。

仕方がないので俺はリビングから出ていき、自分の部屋へと向かうために二階へと上がっていく。

階段を上がり、全く変わった様子がない我が家を見てちよつと安心した後、目的地である自部屋の扉を開けた。

久しぶりの部屋の感想は、めっちゃ汚い。もく半端なく汚い。よくこんなところで生活できた俺……マジで。

服とか漫画とかゲームとかが散乱していて目も当てられない………仕方がない片付けるか。

取り敢えず足下に散らばってる漫画を本棚に戻し、ゲームもどこか適当なところへ置く。

「……やべえAVとかどないしょ……」

ここに来てラスボス現る。AVはエロゲー・エロ本・官能小説・同人誌——所謂エロ四天王を束ねる、究極のエロである。思春期真っ盛りの少年がAVにどれだけの期待を寄せ、ゲ○やTUTA○A



とかに足を運ぶのは言うまでも無い。

もちろん俺はAVを始め四天王を全て網羅している。ここに友達がいいたら俺はドヤ顔しているんだろうが、生憎この部屋には俺しかない。

「取り敢えずエロ系はまとめてどこか放り投げてこう」

DVDとかはちゃんとケースに入れて、本棚に収納する。これで俺結構映画見えますよアピールが出来、尚且つこんな目立つところにAVが置いてあるわけ無いだろ、みたいな考えを逆手に取った作戦だ。まさに完璧！ 死角なし！ である。

「……よし。だいぶ片付いたな」

俺にしてはよく片付けたと自分で自分を褒めてやりたいぐらいだった。若干ほこり臭いけど、窓を開ければ万事解決。

「さて……勝利の美茶でも飲みに行くか」

流石にもう話も終わってるだろうしな。俺は自分の部屋を抜けりビングへと向かう。だがその道中で、

「……アンタ……帰ってきてんだ……」

「お前は……!」

はい、妹と遭遇しました。中学生の癖に茶髪で厚化粧、何というかいきがった中学生スタイルを地でやっている我が妹。んで性格はどぎつい、ツンデレとかっていうレベルじゃない。もう常にツンツン、デレなど塵も残っていない。

そんな妹は起きたばかりなのか、目を擦りながら喋り始めた。

「ふああ。今友達寝てるから静かにしてね。しないと……分かってるよね?」

「それは……分かってるけど。お前母さんの事考えてやれよ」

「チツ、めんどくさいな。分かってるよ。じゃあね」

そう言つて俺と目も合わさずに通り過ぎていく。全く困ったもんですな。いつからあんな感じになったんだろうか。

「てかタバコ臭っ!」

しかも煙草吸ってるし……やべえな、おい。もう大人の階段登りまくリングじゃん。俺なんて酒すら飲めないっていうのに……。

「喉乾いたな……いい加減リビングに向かわねば」  
俺はリビングへと向かった。

〇〇〇

階段を降りて、リビングへと扉を少しだけ開けてみる。

……どうやら話し込んでいるっぽいな……この雰囲気が入っているものなのか……クツ迷「そんな所から覗いてないでさっさと入ってきなさい」oh……どうやらバレてたっぽいな。

よくしここは怒られる覚悟を決めて……部屋に……入ろう。

ゆつくりと扉を開けて椅子に座った。

「更識さんから大体のことは聞きました。この際私はもう何も言わない、貴方の好きにきなさい」

「……わかったよ。まあ元から俺だけで解決しようと思っただけだね」

精一杯の虚勢をはり、無理やり笑顔を作る。母さんは俺の顔を見て呆れたような様子でため息をついた。

母さん何にも分かってないって言う顔やめてくれませんかね。俺だって一応作戦はあるんだぜ？

「まあそんな所だから何とかなるよ。でも今度帰ってきたら五体満足で帰ってこれるか怪しいけどね」

そう言った途端に誰かから頭を叩かれた。結構強めな感じで。

「痛い……誰だよ叩いたの……」

「お母さんの前でそういう事言うのやめなさい」

姉さんでした。少し怒ってるようだったけど、まあ大丈夫だろ。

「でも絶対怪我しないっていう確証はどこにも無いよ。一応専用機持ちの人達は国家が危機に晒された時は出て行かないと行けないしね。一応なんたら条約でもISの武力介入は禁止されてるけど、そんなの表向きだよ。紛争地帯に行けば普通にISが武力介入して、戦地を蹂躪しているって言う噂も聞いたし……怖い事ばかりだよ」

一応ネットとか調べまわったから裏付けは取れている……はず。

姉さんは険しい顔をしながら俺の顔を見ている。てか目付きがやばい怖い。

「確かにそうね……でも自分のお母さんを悲しませることは言わない

ほうが良いと思うわ」

「……そう……ですわね」

そんなやり取りをしていると母さんが声を殺しながらクスクスと笑っていた。

「更識さんウチの子をお願いね。まあさっきのやり取りを見てると、すっかり手綱は握ってくれてるとは思ってるんだけどね」

そう言ってまたまた笑い始める母さん。まあ母さんが笑ってくれるのは嬉しんだけど……なあんか釈然としない………まあいいか。母さんが笑ってくれればいいや、それで。あ、勿論家族みんなが笑って過ごせてたらもつといいけど。

「さあ私もこんнадし、更識さんを部屋に案内してあげて？　ちよつと疲れたわ」

「分かった。じゃあ姉さん着いてきてください」

立ち上がり階段へと続く扉をあけ、恭しく頭を下げた。これぞなんちやってホテルマンすたいである！

「あら気が利くじゃない」

「姉さんはお客様なので。それに偶には格好付けたいんです」

母さんの前で粗相を働いたら怒られるしね。まあ今やってることはいやすぎだと思っけど。

姉さんがリビングから出ていく、完全に出たのを確認して扉を閉める。

「着いてきてください。部屋まで案内します」

「へ〜なんだか学校にいるときよりオドオドしてないのね。憑き物が落ち用な感じ」

「まあ学校では常に警戒っていうか、なんて言うかとにかく色々してるんでつかれるんです。でも家だったらそんな事を心配する必要もありませんから……」

まあ家にいても妹がいたらあんまり安心できないけど……そこはいう必要なんて無いだろう。

適当な話をしながら自室の前まで歩いて行く。

「着きました」

そう言いながら扉を開け姉さんを招き入れる。さつきよりは小綺麗になつていたので多分大丈夫……だと思ふ……AVとかも隠したし。

「意外と綺麗にしてあるのね」

「そう言われると有難いですね〜さつき急いで物を片付けたので……ははは」

「そうなんだ」

そう言つてベッドに座る姉さん。俺も机の近くにあつた椅子を引つ張りだし座る。そして訪れる沈黙。

「そう言えば……中学校の友だちとは仲良くやつてる?」

いきなり質問され少しばかり体が強張つた。てか何故に中学?

「え……まあそりゃ一応メール位なら……してますけど」

「なら良かった。君の生活態度を見ると友達いなさそうだったから……いるんだね」

「いくら姉さんでもそれは酷いですよ……まあそりゃ多くは無かつたですけど……」

あいつ等何してんだろ……みんな同じ高校行つたからなあ……俺も行きたかつたなあ工業高校。これほどあの日を恨んだことは無い。皆の前で泣いちゃつたし俺。

斉藤に「お前は女子か!」つて言われたなあ……懐かしい。転校してえ。

おつと感傷に浸つてる場合じゃなかつた、俺もすかさず質問し返す。

「姉さんは緊張しないんですか? 男の部屋で二人つきりとか……」

つて何聞いてんの俺!? 馬鹿じゃね!? ああああああ穴に入つたら火炎地獄! いや違うまずことわざですらない!!!

「信用してるからね、君の事」

心臓が今ドキツとした……なんでそんな事言えるのさ……あれですか魔性の女つて奴ですか、そうですか。

「……はあそうですか……」

これつてあれだよな? 暗に襲う勇気も無いくせによく言うぜつ

て言われてんのか？ 俺……まあいいけど……でもそんな事言われると意識しちゃうわけで……。

「なんか変な事聞いて「双真」は？」

あれっでもしや安部家の鬼子双葉（ふたば）様ですかああああああああああああああ!! やばいってまじやばい!! また殴られる!

あ、因みに双葉って俺の妹の名前ね。

いや誰に向かって説明してんの俺!?

そんなことを考えているときなりノックもせず乱暴に開かれた扉、そこから出てきたのは金髪で香水をバンバンにかけたけばい妹がいた。

「金貸して」

「無いよ」

「出せ」

「だから無いって言ってんだろ。彼氏に言えよ……そう言うのは」「別れた」

うっぎ！ 学園にいる女子よりうぜえ……アニメと現実の違いのね……やっぱり。兄が大好きな妹なんていませんから！ 残念!

二次元と三次元をごっちゃにするなく斬り〜!

「……とにかく金なんて持ってないからとつと出て行って……ください」

「キモツ妹に敬語とか……キモツ」

椅子から立ち上がり無理やり追いだそうと肩に触れた瞬間、腹に重い衝撃がきて思わず膝をついてしまう。要は腹パン喰らいました……痛いです……息ができない……。

双葉は更に俺の顔に膝蹴りを繰り返す。当然避けれるわけもなく鼻っ柱にクリティカルヒット。

衝撃で脳が揺れる。意識を保つことで精一杯だった。

「金出せや……コラッ」

何か言っているような気がした。気を抜いたら気絶しそうな状況で喋れる事なんて出来ないわけでした……そこら辺わかってくれると嬉しいなあ。

「……チツ、まあいいや。久々に殴れたから良しとするかあ……あ、お客様がいたんですね。ゆっくりしてって下さいね？　ちよつとやり過ぎちゃったんで、コレの手当でもしながら暇を潰しててください。じゃあつつね！」

　　帰り際に超力のこもった蹴りを一発。止めの一撃によって俺の意識は完璧に闇に落ちていった。

### 13話へタレ決心する

双葉が出ていった後、気絶した双真を楯無は抱き抱え、ベッドに寝かせた。

「可愛い寝顔」

思わず呟いてしまう。自分より遥かに頼りない双真はもはや楯無にとつては掛がえのない存在になりつつあった。

最初の印象は良くは無かった。不意討ちと言うルール違反を犯し、尚且つ危なくなったら降参。その様な男に何処に好感を持てるというのだろうか？

だが教員室での千冬や一夏達との対話で少し見方が変わった。誰も知らない双真の奥底にある感情を訴えた。

子供のように、泣き叫び今の現状を訴える。

そんな下らない事が楯無の心を揺さぶる。そして楯無は双真と屋上で邂逅を果たした。

その姿は、やはり自分の第一印象通りの男だった。正直ここまで印象通りだと、自分の背中が薄ら寒くなったのは覚えている。

そして保健室での対話。自分が脱臼しているのにも関わらず、楯無を治療しようとした姿に、ドクンと心臓が高鳴った。

他の人に言ったら、多分馬鹿にされるだろう。楯無自身誰彼構わず、意識する訳では無い。でもその時ばかりは、柄にも無く赤面してしまった。

なぜこんな男に？ 疑問が浮かぶばかりで、解答がちつとも浮かばない。

「何で君なんかに惚れたんだろね？ 可笑しな話だよ。本当に」

答えは未だに分かっていない。

○○○

「何で君なんかに惚れたんだろね？ 可笑しな話」

は？ 今なんて言った、この人。信じられねえ。よーしここはねたふりしところ。

……どっか行かねえかな……姉さん。正直心臓バクバクでうるさ

いんだが……誰の心音かなんて言わなくても分かると思うが、俺の心音だ。

それにしてもいつまでこうすれば良いんだろうか？ すっげえ居心地が悪い。

そんなことを思っていたら、姉さんが扉を開け出ていった。あー良かった。

「……ふー漸くいなくなったか」

ゆつくりと起き上がり、蹴られた場所をさする。あのバカ妹手加減せずに殴るから、嫌なんだよ。昔はすっげえ可愛かったんだけどねえ……いつからか急に暴力的になったんだよな。嫌な話だよ、本当に。

俺はベッドから降り凝り固まった体を伸ばそうと軽いストレッチを行う。

ストレッチする事数分、ポケットの中にある携帯電話が着信を知らせるために音楽をかき鳴らした。

着信の主は、俺が一番会いたい人の名前が液晶に写った。

「もしもし。どこいるのさ？ 今」

『すまん。今は日本なんだけどき、まだ帰れそうに無いんだ』

「そっか……なら仕方ないよ」

『悪いな。所で深緑の調子はどうだ？』

「……さあ。別にいいだろ……ISの事なんて」

そう言うのと父さんは大声上げて笑った。スピーカーから割れんばかりの音量に、俺は思わず電話を耳から離した。

て言うか何で笑うんだよ。

『そうかーまあそうだな。予想どうりの反応で思わず笑ったよ。すまん』

「……………」

『そう怒るな。俺は自分の息子が変わってなくて安心したよ』

「俺は変わらないよ。一生ね」

『うん、そうだ』

だがな、と父さんは声を低くして言葉を紡いでいく。

『何時までも逃げてばかりじゃ話にならん。お前はやれば何でも出



来るのに、お前のその性格で台無しだ。これじゃ磨けば光る原石もただの石ころだ。ゴミだよ。中学の時みたいは何も考えずに暴れてみる！ それで一杯悩め。まだ若いんだ……やる前から考えていたら、最高に楽しい10代も灰色になるからな」

「……でも「でもじゃねえ！ やるんだよ」……うん。やってみるよ」  
『俺や母さんの頭だったらいつでも下げてやるから、心配すんな。女尊男卑なんて風潮なんて忘れてみる。案外見方なんて変わるもんだぞ』

「……うん。俺頑張るよ。こつから変わる、約束するよ。やつぱ世界でIS使えんの俺と織斑だけでもんな、俺の背中に男の全部が乗っかてるんだよな。いつまでもへたれてたら、皆に笑われちまう」

父さんはまた笑った。結構良いこと言ったつもりなのに……ぐぬぬ。

『そこまでは言っていないんだがなあ。双が言うんだ間違いない。俺は信じてるからな』

「任せとけて、今度会うときにはもつと格好よくなってみせるよ」

『そうか。まあ応援してるよ。じゃあなもう切るぞ』

通話が終わらやいなや、俺は携帯を投げ出しベッドに体を預けた。

「……やってやる。俺は変わる。んで持って強くなる。ISもあいつらよりも今の俺よりも……！」

「君って結構恥ずかしいんだね。人前でそんなこと言っちゃうなんて」

ん？ おおおっと、何か姉さんの声が聞こえたぞお……おかしいなーさつき部屋から出たの見たんだケドナー。

背中に冷や汗が伝う。何かこの感じは覚えがあるぞ。

確か俺の部屋が勝手に掃除されてて机の上にエロ本が置いてあるあの感じだ！

「アーサラシキサンオソイナードコニツタノカ「君のすぐ近くにいらるんだけど」………そっすね」

「素直なことは良いことだよ。褒めてあげる」

頭を撫でられる。うーんすげえ恥ずかしい。独り言もそうだけど、

この状況もな。

顔が熱い。たぶんすげえ赤いんだろうな顔。

「どうしたの？ 下向いちゃって。もしかして恥ずかしいんだー可愛  
いねえ」

勝手に自己完結して調子に乗る姉さん。

「そうです恥ずかしいです！ もういいでしょ。帰りますよ」

すると姉さんは驚いたような表情をしてこつちを見てくる。どう  
かしたのだろうか？

俺が考えことをしていると、少し嬉しそうな顔をして口を開いた。

「そっか。うんそうだね。帰ろっか」

「はーい。それと姉さん」

椅子に座ってる姉さんに俺は素早く土下座をした。これが恐らく  
最後の土下座になるだろう。バイバイ俺のアイデンティティ。

「俺に戦いかたを教えてください」

「ふーん……いいよ、別に。ただし逃げないでね。絶対」

「覚悟は決めた。やんなきゃいけないことが出来ました……だからこ  
こで足踏みするわけにはいけないんです」

取り敢えず一夏ぶつ飛ばそう。目標はノーダメ。その為には一杯  
練習しなきゃな。

大分スタート遅れちまったけど、ハンデと思えば心の持ち用はいく  
らでも変わってくる。

「そ。ならいいわ。じゃあ帰ったら早速やるわよ」

「分かりました。じゃあ母さんに帰ること言ってきますね」  
立ち上がり部屋から出ていった。

○○○

「良い息子を持ったな」

振り替えると作業着を着た老人がそこにいた。葉真ようまは笑いながら  
答える。

「将来が楽しみですよ。本当に」

「そうだな。何と言っても 男でISを使えるのだから」

老人は胸ポケットから煙草を取り出し火を点けた。

「期待はしないで下さいよ？ シゲさんの期待は果てしなく重いんですから」

「ふん。ワシは良い息子と言っただけで期待などしとらんわ」

それを期待しているというのでは？ 言おうとしたが言ったら十中八九面倒くさくなるので、笑ってごまかした。

葉真は煙草に火を点け、シゲと呼んだ老人に問いかける。

「そう言えば前に面白い事が起こったと言っていましたか、それは何なんですか？」

「ああ。深緑の武装が設定したものと違つとんじや」

「……言っている意味が分からないんですが」

「面倒くさいやつじやのう。碎羽はのう元々近接ブレードじゃったんやが……何故か遠距離ライフルになつておつたわ」

一体何を言っているのか分からない。刀が銃に変化するなど前代未聞である。

「……あれからかなり調べたんじやが、何も分からんかった。あのバカ兎ぐらいしか分からんのんじやねえんかの」

「まあそもそもその点からそうですがあの深緑は色々とおかしかったじやないですか」

「そうじやな。残りの炎斑・円、ほむら まどかそんで蜘蛛……か」

ちゃんと確認したんじやがのうとシゲは一人ごちる。葉真は顎に手を当て口を開いた。

「まだまだ俺達の常識は通用しそうにないですねえ……本当に面白いモノを作りましたよ彼女」

「バカ言うな。良い歳こいた人間が世界巻き込んで、クソみたいなもの I S 作つて偉そうにしてる奴の何処が面白いだ」

そう吐き捨てるのとシゲは煙草を灰皿に投げ捨て部屋から出ていった。

「……俺は信じてますよ。彼女の言った I S に心はあるって言葉——  
——つていいいたかったんだけな——やっぱ怖いわあの人」

あーやだやだのため息をつき葉真も部屋から出ていった。

## 14話へタレ気ますぐなる

「全然ダメだね〜まあ初めて一週間でこんだけ出来たら上出来かな？」

まいつか、と姉さんは軽い口調で言う。

俺はと言う、姉さんに投げ飛ばされ畳の原料である井草の匂いを堪能中である。

「いつまで寝てるのかな？ 態々君のために一週間分の仕事を終わらせてきたんだから、もうちよつと時間をゆ〜こ〜に使うとか思わない？。」

「……今起きますよ」

「そうそうそれで良いんだよ」

あく身体中が痛え。強くしてくれって言ったのは俺だけどき、毎日走り込みと道場で組手？ みたいな事してるだけなんだよなあ……まあいいや。基礎体力を鍛えてると無理矢理思う事にしよう。

だからだと立ち上がると姉さんが思い出したように、ポンと手を合わせた。

「そう言えば、あと一週間後に学年別タッグトーナメント？ があるじゃない。君はもう相棒決まったの？」

「なんすか？ それ。今知ったんですけど」

「も〜学園の行事にもう少し興味を持って欲しいんだけどな」

説明するのが面倒じゃない、と首を横に振る。

いや、興味の無い事柄に興味を持ってと言われても困るっすわ〜まじで。まあどうせクジかなんかで決まるだろ。だから相方なんて興味な〜し。

そんな事を考えていると、姉さんが学年別タッグトーナメントについて説明しはじめた。

要約するとこんな感じ。

- ・ 気に入った人とタッグの約束を取り付け申請する。
- ・ 優勝したら食堂のデザートが半年ぐらい無料になる。
- ・ 申請が無かった奴は無かったもの同士で勝手に決められる。

大体こんな感じか。これ専用機同士で組むとやヴあくね？ ほぼ負けないだろ。ずつこいわー

興味もないから適当にやつとくか。どうせまだ弱いし、まあ今の強さを確認するためにガチでやっても良いんだが、疲れるからあんまりたくないなだよな。

「……大体分かりました。でもこんな事をするんだから企業とかも見学に来るんですかね？」

「よく気付いたわね褒めてあげる。そう企業が自国の代表候補生のデータを見に来ると、あともう一つあるのよ」

実を言うと本題は絶対に今から言うことの方が、どの事柄よりも優先されるんだけどねと姉さんは含みのある言い方で、俺に言う。嫌に回りにくいな。

「そう！ 本題は君と織斑君にあるんだよ！ 何でかって？ そんなの分かりきってるじゃない。世界で二人しかないISを使える男がこのトーナメントに出るんだよ？ データが欲しいに決まってるじゃない」

「ああ。そう言うことっすか。よく分かりました。だったらマジにやんきや損だわ」

「珍しいじゃない。君がそんな事言うなんて」

俺は姉さんに顔をズイツと近づけ、口角を吊り上げた。

「だって公衆の面前で一夏をぶっ飛ばせるんだからマジにやんきやいけねえっしょ。しかもここで良いところ見れば、給料が良いところに行けるかもしれないじゃないですか。だから俺の進路の為に負けるわけにはいかなくなりました」

「……………そ。まあ頑張って応援してるから」

そう言う姉さんは俺から離れて、構えをとった。どうやら休憩は終わったらしい。てか一週間後って時間が無いじゃん。やべえ、話してる時間が勿体ねえ……よしもっと頑張るぞ。

俺が当面の目標を決めた瞬間、世界が回ったあとのような感覚が襲い畳に叩きつけられた。

「ぼうつとしてる時間があつたら、受け身の一つも覚えたら？」

「……………ごもつとも……………」

姉さんを前に考え事をしながら強くなろうとするには、まだまだ修行が足りないかと痛感した。

〇〇〇

休み明けの学校行ってすげえ行きたくないよな。もうね起きたくないの。あいつらの顔も見たくないし、織斑先生の顔なんて視界にいれたく無いもんね。不思議。

「あー行きたくねー」

バックレようかなと邪な事を考えていると、扉をノックする音が聞こえた。

「開いてませんよー」

するとガチャガチャと音が鳴り、カチンと嫌な音が鳴る

。これはもしかしてピッキングなんですかね？

「お早うございます」

ピッキングした当人は、事も無げに言つてのける。

俺のプライバシーは何処に行ったんすかね。てか誰だよ、この人。

「布仏虚です。以後よろしくお願いいたします」

あー！ やたら眼鏡をくいっとあげる人か。ん？ て言うか布仏

？ って何かもう一人いたような気がする。

「本音は私の妹です。まさか覚えていないんですか？」

「まあ。そうっすね。クラスの人数多いし」

そう言うとき虚さんはため息を着いた。なんか態度がムカつくな。

「てか何なんですか？ いきなり人の部屋をピッキングしたと思つたら、いきなり自己紹介。まずごめんなさいだろうが、教養が無いんですか？」

虚さんの額に目に見えるほどの血管が浮き出てきている。なんであんたが怒つてたんだよ。ふざけんな。

「……………ごめん」  
「きこえませーん」ツツ

「もつと大きな声で誠意を込めて言ってくれませんか？」

本当さあ……………一応俺等初対面じゃないですか。貴方は初対面の人の部屋にピッキングされたら、どう思いますか？」

「嫌「俺もそうだよ、馬鹿が」……………」

「だからいはいもうお引き取り願えませんか？　こんな気分で話なんてお互いに来ないでしようから」

言うや否や虚さんはなにも言わずに出ていった。少し言い過ぎたかもしれない…………反省。

てか何のために来たんだろうな、全く目的が分からない。

ま、いつか。次来たときに謝るついでに聞けば良いことだし。そーするべ。

「そうと決まれば食堂だっ」

目的も決まったことだし食堂へ行くことにした。

扉を開け食堂までの道のりで敵意の視線しか感じないが、気にしない。こいつらは何かの野菜と思えば、あらず不思議何気ない廊下が畑を横切っているような気分になる。やっぱ人間て心の持ちようなんだな。

「ハローハローオイラ一人の男道く成せばなる洗えば食える何事も」

適当に思い付いた単語を繋げてそれっぽい歌を作る。今回は中々良い出来つすなー自分で自分を誉めてやりたい。

俺はこの歌の続きを真剣に考えていると、どうやら目的地に着いたようだ。

食堂は相変わらずの盛況っぷり、何時も余裕そうなおばちゃんの顔も若干険しくなっている。やはり朝の台所は戦場なんだな。

俺は冷奴と味噌汁とご飯の食券を買う。一般の男子生徒ならば二時間目が終わった辺りから早弁の体制を取りそうだが、朝はそんなに食わない俺にとってはこんだけで十分である。

一週間位前だったら、俺が食っている途中に女子が隣に座るという中学じゃあ考えられない事が多々起こっていたが、最近はもっぱらソ口である。

騒がしい飯も好きっちゃ好きだが、あまりにもうるさかったらそれ

もそれで嫌。線引きが難しいよね。こういうの。

「いただきますよつと」

まずは冷奴に醤油をかける。んで一口たべる。んーでりしやす。鰹節と生姜のコンボは本当に殺人的だね。そしてそれを引き立たせる醤油！まさに至高の食べ物ですな。

そして味噌汁をすする。いいね、赤味噌。俺のツボをしっかりと押さえてくるなんて……やっぱここの食堂は最高だ！

「……おはようございます」

後ろから声が聞こえてきたが、どうせ俺じゃないだろ。無視だ無視。

「おはようございます」

おい、早く返事してやれよ。何か後ろの奴が不憫に思えてくるな。ここまで反応されないとは。

そんな事を考えながら飯を口にはこんでいると、肩に手を置かれた。

煩わしいので肩に置かれた手を払い、また飯を口に運ぶ。

「おはようございます。安部双真君！」

「……なんだよ。うるせえな。飯食ったら相手してやるから、黙っとけよ」

「いい加減にしてください」

そう言うと、声の主は俺の対面へと座った。その正体はセシリア・オルコットさん。イギリスの代表候補生で《ブルーティアーズ》のパイロットである。

「なんだセシリアか。また俺に説教垂れにきたのか？」

「いいえ。ただ見掛けたので朝食を一緒にさせて頂くこうかと思いましたが」

「あのなああんまりそんな言い方しない方が良いと思うぞ」

「？　どうかしたんですか」

「そう言う事を言うと世の男共は勘違いするぞ。因みに俺はさっきのドキッとした」

あの肩に手を置いた奴な、と付け加え俺はお新香を一口。



「……………貴方がそこまで女性慣れしていないとは思いませんでした」

「この御時世だからな。ま、そのお陰か何か知らないけどそんなに執着はしなくなつたよ」

「なににですか?」

「そりゃああれだよ。彼氏彼女の関係になるみたいだな奴。だからと言つて決してホモでは無いから安心しろよ」

それにやりたいことも出来たしな。まあでも童貞ぐらゐは捨ててときたいよな。もし俺が男女平等を成し得たとき、リーダーの安部双真は童貞だった!? みたい感じで新聞一面を飾ったら嫌だし。

「色々複雑なんですね。———そういうえば話は変わるんですが」

「どうした」

「ソウマさんは学年別タッグトーナメントの相手つて決まっていますか?」

ああ、姉さんが言つてたあれか。俺はまだ決まつてないと首を横に振つた。それにしても誰が良いかなあ……………出来れば近接が得意な奴が好ましいな。俺が遠距離だし。

「そうですね。でしたら私と組みませんか? まだ決まつてないのよ」

む……………セシリアか。まあ代表候補生で腕前は俺より遥かに上でI Sのイロハを知っているから、ドンと来いなんだが……………中距離なんだよなあ。まあ今の立場で選べれる程偉くは無いので、有り難くその提案に賛成しようではないか。

「別に良いぞ。俺も専用機を持つてる奴と組みたかつたから、その提案は渡りに船つてわけだ」

「あら、どうして専用機同士なんですか?」

「そりゃ勝率が上がるからだな。おれは一つでも多く勝つて強くなりたいから」

「……………貴方がそんな事を言うなんて珍しい事もあるんですね」

「心境の変化だと思つてくれればいいさ。そうなつたら……………たちまち放課後辺りに一回アリーナでも使つて練習するよ」

「それは良いアイデアですわ。ええやりましょう」

決まりだな。んじや次の休み時間にも登録&アーリーナの使用許可願を受け付けに出しに行くか。

なんでそんな先の事を早くやるのかって？

そんなの簡単だ。後手に後手に回ってちゃ目的を果たせない事が多々あるじゃん。つまりはそう言うことだ。

## 15話へタレ跳ねる

「あくやべえ。遅れてまう」

今俺は廊下早歩き気味でアリーナへ向かっている。理由は簡単である姉さんに今日の事を報告して向かっている為である。断じて姉さんとの修行が嫌だからでは無い。だって姉さんの事好きだし。修行結構好きだし。

本当は昼休みに行きたかったんだが、織斑先生の有り難いお説教のせいで飯食うだけの昼休みになってしまった。ふあつく。

本当は放課後もお説教タイムだったが、トーナメント向けて少しでもISに触りたいと言ったら、驚いたような表情してゴーサインを出してくれた。いやー俺の性格もこう言うときは使えるね。

なんか性格が変わった？ とか言われそうだが、この性格が俺の本質みたいなもんだから気にすんなよ。

そうこうしていると、アリーナの更衣室の扉まできた。さっさと中に入り、やけにピッチリとしたスーツに袖を通す。

これ着るのは本当は嫌なんだよね。ピッチリしすぎて時間かかるから。

そんな事を考えながら早数分。漸く履き終えピットゲートまでダッシュ。ここには『廊下を走るな。馬鹿者』とか言いながら、拳骨をお見舞いしてくる馬鹿者はいないので気兼ね無く走ることが出来る。

「双真行きまーす」

某ロボットアニメよろしく。粋な掛け声と共にアリーナを飛び出してまず視界に入ったものと言えば、ヴォーデヴィツヒさんがセシリアをワイヤーみたいな物で首を締め上げ、チビツ子をボコボコにしているシーンであった。

「一体何が起きてるんですかぁねえ……」

これ助けた方がいいかな？ 痴情のもつれとかで揉めてるんだったら、すげえ声かけ辛いんだが。

あ……セシリアの顔が赤を通り越して、紫っぽくなってる。死ぬか

もしれないから助けよう。

俺は碎羽を呼び出し、ワイヤーみたいな奴に狙いを絞り引き金を引いた。

ワイヤーは切れて、地面にドサツと落ちるセシリア。うわあ……：ゼエゼエ言ってる。ちよつとやり過ぎだろ、これは。

「邪魔をするのがお前みたいな雑魚とはな」

「そんな格好つける前に、相手の事を考えようぜ。あんまやり過ぎて退学とかなったら困るのアンタだろ」

「……………」

ありやりや黙っちまった……………反省してくれたのか？　と思ったらワイヤーが伸びてきた。

「こりやこれ以上の会話無理っすな」

バーニアを吹かし右へ左へ避けていく。あああああ面倒くさい！

逃げる際に視界に入るのはチビツ子の薙刀みたいな奴。これいな使わせて頂きますか。

虚空を四つの砲門から打ち出す。当たらなくて良い、これは只の牽制（のつもり）。その隙に薙刀まで高速で向かう。

「取ったあー！」

迫るワイヤーをぶった切り、ヴォーデヴィツヒさんの元へ向かう。途中ワイヤーが襲い掛かってきたが無視。所詮拘束用の武装など速度に限界があるので、迎撃には向かない。やるなら不意打ちだよな。

「貫ったああああー！」

薙刀を横薙ぎに払おうとするが、ヴォーデヴィツヒさんの目の前で固まってしまった。なんだこれ。

やべえ……故障か？　意味わかんねえ！　ふざっけんな動けよ！

「デカイ口を叩く前に、もっと強くなれ。話はそこからだ」

「…………うるっせえ！　ばーか！　今回は偶々故障したから負けただけ、次は負けねえよ！」

「吠えるなよ。ただの犬がっつ！」

間近でキャノン砲の引き金が引かれた。ドオン！　と爆音が鳴っ

た。俺は来るべき衝撃に備え、目を閉じ体に力入れた。意味無いけど。

……だが待てども待てども衝撃が来ない。何が起こったのか、分からない。

「ふん……命拾いしたな」

何いってんだこいつ……：……すごく気になるので、目を開いてみる。

そこには『新しい武装が解放されました』と無機質な文字で、表示されていた。

「そこで何をやっているー！」

おおつとまた随分と面倒くさい奴が現れたもんですな。ヴォーデヴィツヒさんがISを解除した瞬間、自由になる体。

ん？ 故障じゃないのか、これ。どういうことだ……：……全く分からんぞ。

「何が起こった。説明しろ」

「あー俺とセシリアと鳳さんとヴォーデヴィツヒさんで実践形式で練習していたら、打ち所が悪くて……：……すいません」

ヴォーデヴィツヒさんが信じられないと言う目で俺を見てくる。なんか変な事言ったかな俺。

織斑先生はしばらく俊巡した後、何処かへ連絡していた。

「安部とヴォーデヴィツヒは後で職員室に來い。じっくり話を聞かせて貰うぞ」

はー？ また話さなきやいかんのか。面倒くさいな、こいつ嫌われてんの気付いて無いんかね？ 俺は一秒たりともアンタの事をいい人だと思ったこと無いし、教えを請いたいとも思った事がねえよ。てか教員免許無い奴が偉そうにしてんじゃねえよ、カス。

だがそんな事を言うのと、半殺しを通り越して全殺しコース間違いなしなので黙って頷く。長いものに巻かれた方が話が早く進む事って良くあるよね。

○○○○

「時間を取らせてしまつてすまなかつたな。もういいぞ」

織斑先生の煩わしいお話も終わり、職員室から出ていく。時間は一度夕飯時、これは目的地は決まったようなもんですな。どうして面倒事が終わった後って、謎の解放感に包まれるんだらうか？ こればかりは永遠の謎かもしれない。

「さーてぱぱっと終わらせますか」

「おい。その貴様」

「俺っすか？」

何かと思えば一緒に事情聴取したラウラ・ヴォーデヴィツヒさんじゃありませんか。何やかんやで口裏合わせてくれるし、この人はもしかしたらツンデレかもしれない。

「何故あんなことを言ったんだ」

「……………すっげえ偉そうに口聞いてくんのかな。まあ、別に気にしないけど。」

「面倒事は早く終わった方がいいでしょ？ ま、あんま気にしない方がいいと思います」

「……………」

「でもセシリアと鈴音さんには謝りの言葉を入れといた方がいいと思いますよ」

「なんで私が……………みたいな顔してるんですけどこの人。うわあ……………怪我させといて謝らないとかどういう教育受けてんだよ。」

「相当DQN気質だな。悪い事したらごめんなさいだろ……………常識的に考えて。」

「だがあれは奴等がISをファクションぐらいにしか感じていない、軟弱な考えを持っているからだ。私は断じて悪くない」

「何だコイツ……………本気で思ってるのか？ 思ってるだろうなあ……………だって目が本気くさいし。これは相当質が悪い。」

「分かりました。先ずは飯にしませんか？ そこでゆっくり話をしましょうよ」

ヴォーデヴィツヒさんは首肯し、二人で向かった。

○○○○

「イヤッホオオオオオオオオ！ やつと解放されたぜ！ あのギン

パッツがああああああ！」

部屋に帰るなりにベッドにダイブ！　ベッドの上でトランポリンをしながら日々のストレスを叫んで発散する。今日のストレスの原因はもっぱら銀髪変態軍人隊長と鬼畜脳筋ゴリラブリザードである。「なああにが！　ISをファクションと勘違いしてる(どやつ)！　だよ！　お前が判断してそれを制裁を加える立場じゃねえだろうがバーーーーーカ！」

イライラしか溜まらねえよ、畜生め。ああいうのは本気で思ってるから更に性質が悪い。もうマジ迷惑。出来れば近くによらないで欲しいですね。

「しかもセシリアはトーナメント出れねえとか言ってたしきああ！　もうマジなんなの！　あいつ邪魔しかしてねえじゃん！」

しかもその後は何て言ったと思う？　今のお前ならタツグに組んでやらん事もない、光栄に思え等と意味不明なことを言って部屋に帰って言ったんだぞ。ふぎけんカーズ！　どんだけ上から目線なんだよおおおおおおお！

親の顔が見てみたいわ。

俺がベッドでトランポリンしながら叫んでいると、扉がノックされた。

「開いてますよおおおおおおお！」

扉が開き、来客者が顔を見せた。おー結構大所帯だなあ。

「どうしたんですか？　姉さんに布仏さんにあともう一人はだれだっけ？」

「えーべーやんそれは酷いよー」

「いや知らないし。てかべーやんやめろ」

「布仏本音です！　これからよろしくー」

「あーね。布仏さんが言ってた妹ってアンタの事だったんか」

「そうだよー今朝はごめんねーお姉ちゃんがそそーを働いたみたいで」

「ああその件に関してはもういいんだ。俺も謝りたかったんだよ。少し言い過ぎたかも……って」

あ、やつべ今完璧に二人の事をかやの外に放り投げてた……こっからフオローしなければ。

俺は一回トランプリンをやめて、ベッドに座った。三人にも立ちっぱなしじゃ悪いので適当に座るように促す。

「安部くん。今朝はすいませんでした」

「いや俺も言い過ぎちゃいました。ごめんなさい」

でも意外だよなあ……こんな真面目そうな人がピッキングとかやらかすんだもん。人は見かけによらないって、マジでこの事だな。怖い怖い。

「それはお嬢様に指示されたので仕方なく……本当にすいません」

「うわあ……それは御愁傷様です……貴方も辛かったんでしょように。姉さんだったら仕方ないですね」

「そうだねーいくらお姉ちゃんでもお嬢様じゃしかたないねー」

あ、姉さんの肩がプルプルと震えているぞ。これは面白い物が見れたなー役得役得。

まあこれ以上やって怒らせるのも良くないし適当に謝ってお菓子でもあげよう。

「まあ姉さん。これ食べて元気出してくださいよ」

まだ開いてない黒飴を姉さんに押し付けた。丁度良かった俺黒飴嫌いだし。

「いや私黒飴そんなに「大好物なんですか!?!」………うん、ありかと……」

しゃあ！ 腹いせに妹の部屋からパクってきた好物を押し付けたことによつて、テンションが上がりトランプリンを再開する。

「それでなんの用があつてここにきたんで？ 超暇だったんで助かりましたけど」

「私が説明しましょう」

虚さんは眼鏡をクイッと上げ説明を始めた。要約するとこんな感じ。

- ・相方決まったの？ 貴方友達いなくて心配。
- ・いじめ大丈夫？



・最近お嬢様がやる気になって、仕事がすぐ終わります。本当にありがとうございます。

「あーイジメね。忘れてました。」

「ベーやん虐められてたの？ ごめんね。気付いて上げられなくて」

「ほんねちゃんに気にすることじゃあ無い。明日以降にあいつら全員ぶっ飛ばすからみとけよー俺の超かっこいいところ」

「……うわあ。すごい格好いい事言ってるけどベッドで跳ねながら言うと凄くカッコ悪いわね」

……今すぐく心にグサツと来た。凄く痛いです、心が。

「そういえば安部くんは敷島製作所から貴方のISの武装が届きました。よければ明日の放課後に整備室まで足労お願いします」

「新緑の新しい武装？ どんな武装つか。布仏先輩」

「私達は詳しく知りません。有効なものを持つてきました、としか」

おおー新武装か……なんか燃えるな。こういう展開。どんな武器なんだろうか？ 懐に入られた時用のブレードとかだったらマジで嬉しいぞ。俺が泣いて喜ぶね。

「では全ての連絡を終えたので私達はこれで。お休みなさい」

「あーい連絡ありがとうございます。おやすみなさい」

三人は往々にして立ち上がり、出ていった。さあて俺もシャワー浴びてシコツて寝よ。

○○○

「ただいまー」

本音が扉を開けルームメイトに帰ってきた旨を知らせる。ルームメイトは気付いていないのか、そのままキーボードをもの凄く早さで打鍵していく。

本音は何時も見慣れているのか、棚を開き菓子を取り出しながらルームメイトに話しかけた。

「さつきベーやんの部屋行ってきたんだあ。そしたらねベーやん虐められてたんだって」

「ふーん」

「私達も何とかして上げたいねー」

「ふーん」

「晩御飯食べた？」

「ふーん」

ルームメイトがあまりにも集中しているので、声を掛けたのは失敗だった、と思っただが事情が変わった。

作業しているルームメイトの背後に立ち、首筋にフーと息を吹き掛け、作業の強制停止を図る。

「?!?!」

?!?!?!  
面白いぐらいにオーバーなりアクションをとるルームメイト。本音は誇らしげに胸を張る。

「今良いところ。邪魔しないで」

「集中するのは良いんだけどーやっぱりご飯食べないの良くないかなって……思っただけけど、ごめんね？」

本音が申し訳なような顔を見ると、ルームメイトは顔を歪めた。良心の呵責に刈られたのかルームメイトは大きいため息をつく。

「ごめんなさい。少し焦ってた」

「ううん、こっちこそごめんね？ 簪ちゃんの作業邪魔しちゃって」

簪と呼ばれた少女はもう一度謝罪の言葉を入れて、棚にあるカップラーメンを取り出した。

ポットに水を入れて、最近本音が良く話題にする双真の話振る。

「彼どうだったの？ 安部君」

「んとねー最近ちよつとかっこ良くなったよーどれぐらい格好良くなったかって言うと、チワワが急に柴犬になった感じかなあ」

全く想像が着かない例え方をされ眉を潜める簪。

「……そうなんだ。でも安部君の試合見たけど、酷いね」

何と答えれば良いか分からない簪は話題を無理矢理変えて、鳳と戦ったときの感想を述べた。

「あれだったら織斑君の方が断然いいよ。正々堂々戦ってるし、降参もしない。それが普通なんだけどね。それが出来ないって言うことは法律が守れない犯罪者と一緒だよ」

嫌悪感を丸だしで感想を言う簪。本音はドウドウと手で抑える。

抑えられた後にはつと気付き、すこし言い過ぎたと後悔した。

本音はそうだねーと寂しく言い、既に沸騰しているポットを傾け、カップラーメンの中に注いでいく。

「会って話してみるときつとかんちゃんの影響も変わると思うよお」  
(それは無いかなあ……馬鹿そうだし)

本人が居ないのを良いことに好き勝手に言う簪。まあ今までしてきたを事を纏めて考察したら、誰でも似たようなことを思うの自明の理であるが。

本音のフォロワー虚しく、本人の居ないところで好感度がガラガラと音を立てて崩れていった。

## 16話へタレ備える

昨晚言われた通りに整備室とやらに向かう。

詳しい話は何も聞かされていない……よくよく考えるとこの学園の指揮系統つて割と滅茶苦茶っぽいよね。

大抵の事柄が事後報告な所が特に顕著だよな——まっいいか、んな下らない事考えても悪い事象が改善する訳でもないの、ここ最近は諦めてるよ。

嫌違うな。諦めた方が話が早く終わって面倒なことが起こらない見ぬフリをしているって感じか？ ああこっちの方がしつくりくるわ。

「やあ君が安部双真君かな？ 初めまして俺は小此木英憲<sup>おこのぎひでのり</sup>。深緑の新武装のテストを任された人間です。今日はよろしくね」

後ろから声を掛けられ振り返ると、疲れたような顔をした男が立っていた。

俺も小此木さんがしたように似たような挨拶をして、早速本題に入る。

「とりあえず武装の紹介からしようかな？ 双真君も行き成りの事で頭に入ってるかどうか怪しいからね」

むう……なんか馬鹿にされたよう気分。事実だから仕方ないけども。

小此木さんの武装の紹介を纏めると大体こんな感じ。

近接武装 『マイクロソード：鋸』<sup>のしきり</sup>

見た目は鋸らしくない普通の刀。名前の由来は小此木さんの趣味日用大工な事から名付けられたとか。

常に刀全体が小刻みに振動しているらしく、従来のブレードの切れ味を数段上に行く。さらにカーボンを使用する事により軽量性・取り回し・強度を底上げた自慢の一品……らしい。

中距離武装 『シールドライフル ハモニカ』

見た目は縦長のシールド。名前の由来は小此木さんの趣味である

楽器演奏からとのこと。防御力はいわずもがな、一番の驚き所はシールドが二つに割れて、そこから覗くのは8門のビーム砲。趣味と武装を取り入れた、小此木さん至高の作品らしい。

「んま大体こんな感じか」

「……………」

「その顔は分からないって顔をしているね。まあやれば分かるから、ちよつと深緑を貸して」

言うや否や渡した深緑を変な板に置いてパソコンを立ち上げた。

「そう言えば君って葉真さんの息子なんだね。俺それ聞いた時、結構びびったよ」

あーあれか似てなさすぎて、逆にびっくりしたみたいな感じか。よく言われるから別に気にしていないけど、どこら辺が似ていないのかが気にはなるな。

「普段の君と葉真さん結構似てるよね。んで極めつけは模擬戦のときの降参。あれ見たとき昔の葉真さんにそっくりだったから、思わず笑っちゃったよ」

うっそ！ 若い時の父さんってそんな事してたのか、血は争えませんな。

「よし！ 出来た。んじやまお喋りもそこそこにして、軽く君のクラス代表のして来てね。応援してるから」

「は？ あんた何言って「まあまあ。君のクラスの偉そうな担任にもちゃんと許可を取ったから」俺の許可は?！」

「あーうるさいなあ。さくつと倒せばいいんだよ。んなもん」

そう言うときさつさと整備室を出ていった。結局俺の許可とか言う話では無く、面倒事をぶっこんで出ていきやがった。

ちよつと対応が雑すぎやしませんかねえ……引くわ。だがこれ以上此処にいても、話しが進まないの俺はアリーナへと向かった。

○○○○

「あーだるいわ。くそ」

「いいのかなーそんな事言っちゃって」

大あくびをしながら、此方に近付いて来る小此木さん。

「まあ今の君なら勝てるよ。俺が作った武器は近接の脳筋共を狩る為に作ったんだからさ。まあそれを生かすも殺すも君次第って所かな？」

この人随分口が悪いなあ。まあ俺も人の事言えたわけじゃないけどさ。

ISを展開をして、ピットゲートから飛び出す。そこには不機嫌な顔した一夏がいた。

「すまんな織斑きゅん。こんな事になるなんて」

「……別に気にしちゃいないぜ。それに双真とは決着着けてたかったからさ。このマッチングには渡りに船ってやつだ」

おいおい偉くやる気出してくれてんじゃないの。そんな感じで行かれたらさあ……本気で潰したくなるじゃん？

んま勝てるとは思ってないんだけどね。

「じゃあこの際どっちが強いか、分からせてやるよお！」

開始のブザーが鳴り、一夏がかなりの速度で突っ込んできた恐らくあれは瞬時加速だよな？

なろう……あんな大技もう取得してやがったのかよ……卑怯くせえやつだな。

そうこうしている内にあっさりと懐に入れられブレードが振り下ろされる。だが素人目からみてもバレバレの剣筋、俺は鋸を展開し、鏢迫り合いへと持ち込んだ。

「やるなあ双真！」

「まぐれだぜー！ バーカ！」

俺は空いている左手で一夏の右手を力の限りぶん殴る！ どうやらIS越しても痛覚はあるらしく、苦悶の表情を見せた一夏はブレードを落としてしまう。

ここが絶好の攻め時である。俺は鋸を横一線に払う！ どうやらかなりのダメージがあったらしく顔を歪ませる一夏。だがまだまだ終らせない。

「それにしてもこれじゃちっとも面白くない。もっと本気でやって欲しいな」

「……ぐっ！」

「そろそろいでしまいだ！」

一夏の横っ腹に蹴りを繰り出す。右足のスラスターを吹かし速度と威力を倍増させる！

「……あり？ おぎやああああああああ！」

俺は右足だけスラスターを出すのに対して間違えて左足を吹かしてしまったらしい。

しかも予想以上に吹かしていた為、アリーナの壁に激突する始末……全くついていけないぜ！

それに激突した際に絶対防御が発動し、シールドエネルギーがごっそり持つていかれた……ああこれからはちゃんとISの機動練習しよ。

「つたく俺つてばホント馬鹿……」

あーこっからどうしようか？ 折角ノーダメで行けたのに自分の下らないミスで自爆だもんなあ……まっいいか！

なるようになれだ。

とここで気になる武装を見つけた。『炎斑』・『円』と言う武装。

簡単に説明すると炎斑は両腰から発射できるアンカーワイヤ。円は点と線を繋ぎ、その面がバリアとなる。

これだけの武装があるのであれば！ もう勝ったも同然じゃん！

「うっしやあ！ 待っててくれてありがとな！」

「こっちこそ雪片を取りに行けたからな。お互い様だぜ」

ほほう……イケメンは心までもイケメンでござるか……！ こういうのがいるから我等ブサメンには日が当たらず、ただ影で蹲っているだけなのである!!

「……決着着けようぜ！ ド腐れイケメン」

「望むところだ。根暗チキン」

え……ちよつとまって、そこで人の気にしてる事言っちゃおう？

あーあかん結構傷つくわ、さっきの一言。

俺が傷ついている間にちやつかりと歩を進めていた一夏。

先ほどの様に一直線に向かって来る。どうやらさっきの火傷を覚

えていないらしい。

俺は迎え撃つようにスラストを吹かし、鋸を構えた。

もう少しでぶつかりそうになる直前！ 一夏が目の前からいなくなつた。

「もらつたあああああああ!!!」

「間に合え！ 円！」

上からの襲撃にお俺は即座に点と線を繋ぎ円を自分の真上に描き展開させる。バチバチと力のせめぎ合いが俺の頭上で繰り広げられる。

一夏はバリアを破ろうと必死に押しているが円のバリアはただのバリアに非ず。

「今回は俺の勝ちだな一夏あ！」

「そんなの……やってみなきやわかんねええええええええええええ！」

「終わりだよ……手前は拘束されて負けるんだよっ！」

円を消しバランスが取れずに変な格好をした一夏を両腰から伸ばしたアンカーで拘束し、シールドエネルギーが尽きるまでとにかく打ち続けた。

『勝者 安部双真』

「楽な戦いじゃなかったぜ。次はタッグトーナメントだな」

勝利の余韻もそこそこに次の戦いに向けて、色々しとかないとな。あとで小此木さんの所へ行こう。

なんか有益な情報でも貰えそうな気がするし。

○○○

「いやー大金星じゃないですか！ 双真君」

「いや結構ギリギリでしたよ。俺が如何にISに触ってないって事も露呈してしまつたし」

「そうだね。あの自爆は……まあ皆まで言わなくても良いでしょう！ 武装もちゃんと使ってくれましたし……欲を言えばハモニカの方も使つて欲しかったんですが、倉持のISを叩いたのでなんでもいいです！」

おおぅ……偉く饒舌だな。余程嬉しかったのか。



まあ俺も嬉しくないわけじゃないんだが、今回は予行演習みたいなもんだし、本番は二人一組だから全然気が休まらないんだよな……所詮タイマンだし。

「よしとりあえず今回の記録は取ってありますので、編集した後にはパソコンの方に送っておきますね」

「それはありがたいです！ 送ったら連絡ください」

俺は小此木さんにお礼をしてアリーナから出ていった。

## 16. 5話これまでの双真君と深緑

名前：安部 双真 『あべそうま』 年齢／誕生日 15歳／7月1日

性格：ヘタレ↓ただうざくなった

好きな物・人：肉じゃが・更識楯無・家族

嫌いな物・人：ニユルニユルした物・命令したら何でも言うことを聞くと思っている馬鹿者・教員免許が無いのにいきっている人間

特徴・人物関

父葉真が言うには元々へたれではなかった様子。ISが台頭し始めてきた頃から、卑屈に暗くなっていた。恐らく突っ張るより流された方が楽なことに気づいたから、この様な性格になったと考えられる。それまでは全く逆の生活をしてきたらしく、そこそこのヤンチャ坊主だった模様。最近の生活では徐々に元の性格が顔を現し始めたのか、口が悪くなり態度もチンピラのソレ。クラスメイトが遠ざかるわけだ。

楯無に関しては割りとは好意的に接しているが不要な一言・動作で殴られたり・窘められる事が多々見受けられる。

それでも本当の姉の様に接している分、他の生徒とは違うのである。

IS 深緑 『しんりよく』

第三世代

コンセプトは万能機体（器用貧乏とも言う）を目指して作られた。碎羽でダメージを取っていく機体ではあるが、所詮素人なので使いこなせるわけが無く、専ら拡張領域に封印されている。だが他の武装は優秀。

そうならたら必然的に近接機体になるが、機体スペックの殆どが射撃プログラムに割いているのでブースト・シールドエネルギー・燃費等が標準（基準を打鉄とした場合）を下回っている。

武装その①：碎羽（さいは）

あまり特徴の無いスナイパーライフル。シゲや葉真が言うには元々『近接ブレード』で設計したはずが、何故かライフルになっていたといういわく憑きの代物。

武装その②：虚空（こくう）

双真がよく使う武装。牽制に使ったり、ダメージを取りに行ったりと万能な武装。威力は低いが弾速が早いので非常に使い勝手が良い武装。

武装その③：円（まどか）

点と線を繋ぎ面を作り、面が所がエネルギーバリアーが貼れる武装。自分を囲ってビーム等を防御する他、相手を閉じ込めたり、かなり応用が利く武装。反面持続時間は120秒しか続かない。点を攻撃されると狭くなる。リロード時間が長い等の欠点も多く存在する。

武装その④：炎斑（ほむら）

両腰に一本ずつ装備されているアンカーワイヤ。相手を拘束したり、横や縦に払うことで白兵戦に持ち込む相手を近付けさせないという、『格闘機』相手には脅威な武装。

武装その⑤：鋸（のこぎり）

刀身が細かく振動している特殊なブレード。切れ味はほぼ斬れない物は無いというブレードである。

武装その⑥：ハモニカ

展開式シールド、展開したシールドから覗くのは8個の砲門。距離は短いからこそこの威力がある。

## 17話へタレ喧嘩する

「織斑先生も休憩ですか？」

後ろから声を掛けてきたのはクラスの副担任を勤める山田麻耶教諭であった。千冬も別に断る理由もないので、首肯して同席を促した。

「今日の安部君凄かったですよね、何か昔を思い出したみたいで！」

「そうだな……全く私は本当に幸せ者だ。あんな才能の塊を受け持つ事ができるのだから」

だがあの性格は頂けないがな、と苦い顔をして見せたが心の奥底では興奮は抑えられていなかった。

麻耶もそれを分かっていたのか、顔を綻ばせる。

「私決めました！ やっぱり教員試験を受けようと思います！ 今よりももっとあの子達に頼りされたいですから……今のままじゃ全然フェアじゃないような気がして……おかしいですかね？ こう思うのって」

「……そんな事は無い。今は私のような教育は合わないんだろうな……安部の態度を見て良く分かったよ」

千冬は椅子から立ち上がり麻耶に頭を下げた。

「私もこれから変わりたいと思う。だが私は教員としても大人としてもまだまだ不十分だ……これからも迷惑を掛けると思うが、付き合ってもらいたい……いや、お願いします！」

今まで見たこと事の無い、麻耶は驚き椅子から立ち上がろうとしたが勢いが着きすぎたため、派手に転んでしまった。

涙目になる麻耶であったが、ゆっくりと立ち上がり深呼吸をした。

「はい……こちらこそよろしくお願いします！」

学校中に響き渡ろう様な元気一杯な声で返事をした。

〇〇〇

「あーべーやんおっはー」

む……この気の抜けるような声は本音だな。てかベーやんやめろ。  
「ああ、おはよう。丁度よかった朝飯でも食いに行こうぜ。もう朝からボッチ飯は飽きたからさ」

「おおー朝からだいたんくベーやんってば結構なタラシだね」

「ほほおまだベーやん呼びを止めようとしなのか……次言ったらくすぐりの刑な」

ああこんな妹が欲しかったあああああああああ！ まじで！

同年代見えないくらいに挙動が幼いんだもんなーこれでモテない方が可笑しいだろ。なんでや！

「恐いこというなーもーまあそう言うなら、やめるよー」

「そうそう。本音は賢いなーそんな君には飴をあげよう」

妹の部屋からパクってきた黒飴を一個渡す。最初は顔を輝かせていた本音だが、黒飴とわかった瞬間に顔を曇らせた。

……まあ仕方ないっちゃ仕方ないんだけど、少し正直過ぎやしませんかね……そう言うところも可愛いけど。

「今から朝飯食うから、後から」案外おいしいね、これ」……そうだな。俺が悪かったよ」

まあ、本人が幸せそうだからいいか！

ふと時計をみるとそろそろ急がなくては行けない時間になっていった。今回朝飯抜くか、ちよつと用事もあるしな。

「本音ちゃんすまんが、俺用事があるからやっぱ食えねえわ。また昼飯でも一緒に食べようぜ。勿論俺の奢りでな」

本音の返事も聞かずにさっさと走り出す。こりやあ絶対怒られるわ、どうせ口を3の字にして何か言うんだろうな。

それを想像すると少しわらいそうになる。

「さあてー！ さくつと決着着けてきますかー！」

目指すは教室！ 目標はイジメっ子！ 勝利条件は――――ボコボコだあああああああ！

○○○

教室まで全速力で走ってきたが、幸いにも先生にも見つからなかつ

たので比較的早く着く事が出来た。教室には他のクラスメイトがいるが、そんな物には構っていられないし構うつもりも無い。目標はイジメっ子だけだ。

「おっはーイジメっ子」

「……アンタに構ってる暇は「俺にはあるんだよ」なに！」

腕の力を全部使って座ってるイジメっ子の胸ぐらを掴み無理矢理立ち上がらせた。教室では悲鳴があちこちから起こるが構いやしない。

「おいおい、俺をあんだけボコって今更シカトって訳じゃないよなあ！」

胸ぐらを掴んでいるせいか、思うように呼吸が出来ない様子。なんか拍子抜けしたわーまあ所詮女だし、こんなもんかコイツにISがあるわけでもないし。

「……あん……たが………わるいのよ……ばあ……か」

「今度は人のせいだよ……お前も良い根性してるぜ。ま、俺も人の事言えないし言わないけどな……でも俺はやられた分はしつかりと返すから、そこん所よろぴく☆」

俺はイジメっ子を掴んだまま壁に叩きつけた。

おーおー痛そうな顔をしやがる。まあ俺はコイツにゲロ吐くまで蹴られたわけだが——それに比べるとまあだ軽い軽い。

「今謝ってもう二度と俺に近付かないって誓うなら止めてもいいけど？ どうする」

「……ばあ……か………死………ね」

「あつそ。お前が死ね」

いい加減手が疲れたので、手を離してやる。咳き込む姿を見ると何と情けない！ て言うか普通に可哀想になってきた……んじやさつさと止めを刺して終わらせようかねーああ虚しい。

俺はへたり込むイジメっ子の腹めがけて、思いつき蹴り込んだ。

「あ、やべ」

「あああああああああああー！」

なんか爪先がめっちゃ良いところに入った……こうメリツと。ま

いつか。報復だと思えば。

周りを見ると教室がシーンと静まりかえっていた——当たり前ではあるが、うーん自分が蒔いた種ではあるがここまで静かだと、逆に怖いな。

「べーやん！ 後ろ!!」

後ろを振り向く、そこには椅子を降り下ろすイジメっ子の姿が！  
ガッツツツ！

頭に衝撃が走った。一瞬視界に星が見えた。

足元が覚束ない……て言うか視界がドロドロ……？ 俺何してたんだっけ？

ガッツツツガッツツガッツツ

いてえ……何か誰かが騒いでる？ 耳がキーンってなって何も聞こえない、視界もドロドロで赤いし……どうなってんだ？

ん？ 赤？ 俺は辛うじて動くて右手で頭を触ってみる。そこには今の状態でも分かる位になっている真っ赤な手であった。

「死ねええええ！ 死ね！」

立っていられずに思わず尻餅を着いてしまう。すぐ近くで風を感じる。

「ああ……そう言うこと……」

俺はここで漸くイジメっ子の椅子を受けたことを理解した。

「……ここまでやるかあ？ ふっー」

誰が答えるわけでもなく、勝手に出た一言。ああイジメっ子が椅子を振りかぶった。これさあ……もしかたら次来たら俺死ぬんじゃないの……これ。

「だからってやられっぱなしは性にあわねえええんだよおおおお！」

気合いで立ち上がりでイジメっ子の両手を掴んだ。そのまま押し合い動きを止めたのはいいけど、この窮地を打開する策が見当たらない。

「あ、やっべ……」

イジメっ子は一瞬の隙を着き、両手を振り払い椅子を横風ぎに振

るった。

当然避けれる訳もなく直撃を貰う俺。机とか椅子とかを盛大に巻き込み、転がる。

「何をやっているー!」

声が聞こえる、それもとびつきりの怒号。誰もが直立不動になるなか、ただ一人は俺に向かってこちらに向かつてくる。

こう言うときぐらい先生の言うことぐらい聞いた方が良いんじゃないの? ま、俺もだけど。

「な……にも、やって……ませんよ……ちよつと俺が……あいつの……スカート、めくっ」

もー無理しゃべれねえ……おやすみなさい。織斑先生が何か喋ってるような気がするが知るもんか。

相変わらず視界は赤いままだが、意識を暗闇に手放した。

○○○

目が覚めると知らない天井が目に入った。でもこの匂いはなんか覚えがある。ここはいつぞやの病院じゃん。うつわ懐かしい。

「起きたか安部」

「……なんすか。止めでも刺しにきましたか? 先生」

隣には正直居てほしくない人が一人。まーた糞面倒くさい話を聞かせられるのか。憂鬱だね。

だが予想に反して先生は安心したような顔をして、フツと小さく笑った。

「彼女は一週間の謹慎——それはお前もだ安部。だがトーナメントには出て貰うぞ。嫌だと言わさん」

「先生に言われなくても出ますよ。もっかいアンタの弟ぶっ飛ばしたいですからね」

「そうか。一夏を倒すのは良いが、ちゃんと退院したら反省文10枚隙間無くみっちり書いた奴を提出しろ。私が言いたいのはそれだけだ。じゃあな」

「はあ!? ちよつとおそこはこの怪我に免じて云々って感じじゃないんですかあ!?!」



「これでもかなりの温情をかけているんだ。ガタガタ抜かすな。それに退院してからで良いといっているだろう」

ええくなんか超腑に落ちないんですけど……っってもういないし。つたく言いたい事だけ行って行きやがって、暴君スタイルは依然変わらず。相変わらずイヤくな先公だこと。

織斑先生がいなくなった数分、扉がノックされた。開いてますよ、と一言かけ来客を待った。

「えらい事してくれたじゃない安部君」

「いや、申し訳ないです。姉さん」

来客は姉さんだった。でもこのタイミングで来たってことは墾々とお説教タイムだなあ……あああせめて日を空けてくれませんかねえ？ 俺の体はいいけど精神的にくるみたいな？

「本音が泣いていたわよ？ 私のせいだーって、本当に手がかかるわね君は！」

「ちよつと待ってくださいよ。俺は何もしてませんって！」

なんで本音が泣くんのだ？ 全く理解出来ないんだが。まあいいや、今度お菓子でもあげたら機嫌なおすだろ。

全く退院したら仕事一杯ありますな。まあ充実してるから良いんだけどさ。

「……でもイジメは俺の手で解決しましたよ？ すごいっしょ」

言い終わったら軽く頭を叩かれた。あつれー俺なんかおかしい事いったっけ？

「今そう言うことを言ってるんじゃないの！ 全く君は本当に……」

あかんこれ……久々のガチ説教タイムやん……あーあ早く終わらんかなくこの人まじスイツチ入ったら拘束時間が長いこと長いこと、でもこうやって怒ってもらえるってすっげー幸せなのかもな……もしかししたら。

「何にやけてるの？ まーた変なこと考えてたんでしょ!!」

「ち、違いますよ。こうやって怒ってもらえるのって、凄く幸せなのかもって思ったら笑えてきちゃって……すいません」

「……そう。ならいいけど！ あともう少し自分の体を大切にしてい

ね。言いたいことはそれだけ。じゃあね！」

「はい。これからはあんまり喧嘩しないようにしまーす」

「ちつがああああああああう！ 喧嘩をするなって言ってるの！ 良  
い！ わかった!?!」

「はい……もうしません。人を泣かせません」

ならよし！ と快活に答えた生徒会長様は満足したのか、お大事に  
と一言言って病室を出ていった。

「ふー昔はこんな事考えられなかったんだけどなあ」

この時間だったら俺何してたんだろうか？ ああ授業中か。そう  
いえば授業と言えば、

「織斑先生の雰囲気何か違ったような気が……しないでもない。気  
のせいかな」

多分気のせいだろ。あの人が変わるとか無いな。我ながらバカな  
事を言っちゃまったぜ。もういいか寝よ。

## 18話へタレ衝突する

退院して一日が過ぎた。俺は一週間の謹慎と言うありがたい処罰の真つ最中である。

当然客人等と言うものは影も形も見受けられない——当然ではあるが。

「あー反省文でも書くかなー面倒くせえ」

問題を起こした人間に平等に現れるイベント『反省文』を消化しようとも思うが、如何せん気だるさが先行してペンを取る気にもなれない。

このままトーナメントまで寝ていようか……なんて怠惰な気持ちになり始めた頃、扉をノックする音が聞こえた。

て言うか良いのかこれは？ 俺一応謹慎処分者だぜ。気軽に部屋に来ては行けないような気がするんですが、それは。

取り敢えず待たせつ放しも悪いので、扉の鍵を開けて来客を出迎えに行つた。

「あ、ベーやん」

「……お休み」

「ちよ！ 待つ「待たない」本当に！」

「なんすか。反省文を代わりにやってくれるんだったら、入れても良いけど」

「えーそれは……」

「冗談だよ。まあ入りなさいな」

ああー入れてしまった……こう言うのって、いけないんだよな？  
まあ良いか。どうせ授業終わってるんだろうし。

「……なんか用事？ あんま長居してほしくないんだけど」

「まあー用事って言えば用事なんだけど……えーと元気？」

「椅子でぶん殴られた割りにはな。そっちはどう？ クラスとかさ」

それから途切れ途切れであったが、会話をした。やっぱ喧嘩する前に変な会話したたから妙に緊張した。

て言うか今って俺と本音二人つきりじゃん！

何か自然な感じで部屋にいたけどさあ……そう思うと何かドキドキしてきたぞ。

「アーナンカノドガカワイタナーチョットノミモノトツテクルワー」  
俺が冷蔵庫に向かっていたら後ろから抱きつかれた。

「——ツッ!?!」

急な展開に言葉が出ないまま固まってしまふ俺。

「のほとけさ、ん?」

声が上手く出せない。違うやろ！俺ってこういう場面でも普通に喋れたろ!?! なのになんでもつてるんだ。

しかも本音の奴は何も喋らないしよお！

「あ、エアコンの設定温度が低すぎたか？ 悪い。今上げるわ。だから放しなさい」

背中では首を振ってるんだろうか、そんな感触が伝わってくる。どうしたんだろうか、今日は何時にも増して意味が分からない本音に抱かれている状態で、自分が何かしたかを考えてみる。

あ！ そう言えば姉さんが本音が泣いてたみたいな事言ってたな——もしかして喧嘩したから？ でも考えられるのってそれぐらいだよな——しかし何処に泣く要素があるんだ？ 本音関係ねーじゃん。

「……私さあの日ね、君と普通に朝御飯食べて授業受けるんだろうな——って思ってたんだ」

ああそう言う事あの時止めなかった自分を責めてるって訳ね、納得。危うく変な勘違いしそうになったわ。もしかしたら俺の事が好きなのかって——具合に。

「あー別に本音が気に病む必要はないぞ。全くな」

「……でも何時も君が怪我してるからさ……心配なんだよ」

「俺の怪我は全部自己責任だからさ、本当に気にすんなよ。ほら離せ」  
ああー何か知らない所ですげ心配かけてたのか……つつてもどうすればいいのこれ。最善な方法なんて無いぞ。

「本音は優しすぎるんだよ。あんまりこう言うことしない方がいいぞ。勘違いされ「勘違いしてもいい!」……はっ!」

「勘違いでもいい！ だから私の側にいて……」

これは……一体どうなってるんでしょうかね……？ 声を荒げる事が無いと思っていた、本音が叫んだ。しかも告白まがいの事を言ってるし——ああそう言うことですか。

一気に冷静になった俺は本音を引き剥がし、手を握りベッドまで引っ張って無理矢理座らせた。

そして自分にも本音にも言い聞かせるように言葉を紡いでいく。

「いいか。その気持ちは多分嘘。うっかり出たとかそんな奴だ、分かるか？ 本音は賢いから分かってくれるよな。俺が喧嘩して大怪我じゃないけど入院したから、そんな気持ちになってるんだ」

「……違う……」「違わねえよ！」「……っ」

「あのほら何て言うだけ……あれ吊り橋効果つつうの？ 多分あれだ。だから今のは聞かなかった事にしてやるから、もう……部屋に帰れ」

本音は目に涙を溜めながら、ゆっくりと頷いた。それから立ち上がり袖で顔を覆い部屋から出ていった。

「また泣かせちゃった……何なんだろうな。この感じ……ほんつといやだねえ」

傷付けたのかは分からない……でも彼女も不安定だったらから、思わず出てしまった言葉。心配ばかり掛けたから変な事になるんだろうか？ だがケジメだけは付けなければいけなかっただろうから——要らないやり取りで本音が勘違いしてしまったわけか……これからはもつと周りの事と先の事を考えて動かなければ。

「ああーもう！ 反省文書こ！ 10枚位直ぐ終わらせてやるぜええええええ！」

うだうだ考えても仕方がないので心を入れ換えて、今出来ることから終わらせてようか。

○○○

本音とモヤモヤする会話を終え、そのテンションで反省文を終わらせた俺は、織斑先生以外にいない職員室へと訪れた。

「反省文できましたよっと。先生」

「遅いぞ。そんなに時間が掛かるものでは無いだろう」

「それはすいませんね。何分こちらでも色々たて込んでいましたねえ」

俺の言い訳など既に聞きかずに原稿用紙をパラパラとめくつていく。そして立ち上がり、なにも言わずにシュレッダーへと原稿用紙を入れた。

「あのー他の先生とかに回さなくても良いんすか……いきなりシュレッダーはあんまりでしょ……」

「他の先生方はお前の事なぞとつくの昔に匙を投じているからな。無駄だ」

「はー!? 俺別に何もしてませんが? 今回の事だってイジメがあったからこそでしょ。俺関係ねえじゃん」

一息に言い肩で息をする。その姿をみて織斑先生は深く深くため息を付いた。て言うかまずイジメを見つけられなかった学園側に問題があると思うんだ、俺は。それをただ俺が勝手に暴れただけ見たいになって俺だけ悪者みたいにしやがって、本当糞だな。

「それ以前にも色々問題はあるぞ。普通の生徒だったら退学もの問題ばかりだ。分かるか? お前は『男』だから学園にいれるんだ。そこを少し分かれ」

「わ、分かるかよ! ふざけんな! だったらさくつと退学にしまがれ!! こっちだってこんな陰湿な学校辞めてやるよ! バーカバーカ」

「全くお前は前にも同じような事を喚いていたな……そう言う所だよ、お前の一番悪いのは周りも人の事も考えられない阿呆だから匙を投げるんだよ。まあそれを矯正するのが私の役目ではあるが」

「無理。俺とアンタとは合わねえし言うこと聞くつもりも無えから「跳ねつ返りが……あまり調子にのるなよ」……うつ」

ただならぬ雰囲気思わず言葉を詰まらせていまい。また拳骨か……こればかりだよな。

「良いかそのまま黙って聞け。私はなお前みたいな馬鹿が嫌いだよ。自分の事しか考えれない人間だ……私もそうだ」

隙あらば自分語りですか。

「私の事などどうでもいいんだよ。問題はお前だ」

ここで一息着いてコーヒーを一口飲む。

「これから一緒に勉強していこうじゃないか。最近読んだ本だと教師と生徒が一緒に勉強する所が学校らしい……からな」

そう言つて薄く笑つた。この人がこんな事言うなんて明日は槍でも降つて来るんか？ それとも俺が面倒になつて、下手に出て後は放置パターンか？ わからん。

「お前に説教なんてこれ以上無駄だ。話しを変えよう」

「今度はなんですか？ 俺を垂らし込もうたつて無駄ですからね」

「信用されない私は……まあ良い。模擬戦に付いてだよ」

アドバイスでも貰えるのか？ まあこいつのする事だ。

余り信用はしてねえけど。

「良くやったな。武器の相性もあるが……それでもだ。正直私は一夏よりセンスがあると思つている」

あんな奴に負けてたまるか。次の大会でも徹底的に叩き潰すぞ俺は。

「そんな事言つたらアホの弟君は勘違いするんじゃないっすか？」

「勘違いでも何でもすれば良い——私はお前と一夏あと全員に強くなつてほしい、私からすればお前がやる気出して一夏と戦う。寧ろドント、来いだ」

そう言つて不敵な笑みを浮かべる。良い年こいてそんな事言つて恥ずかしく無いんですかねえ……本当に自分勝手な先公だわ。

「一番の問題児を良いように使つてくれるから、こちらとしては生徒会長には頭上がらないな……殴つても言う事を聞かないのはお前とあいつぐらいだ……」

そう言つて少し物憂げな顔をして、コーヒーを一口飲んだ。

○○○

モヤモヤする会話を終え、自室へと帰る。

「あー終わった。謹慎中なのに疲れるつて中々嫌なもんだな」

ベッドに寝転んで天井に視線を合わせ一人ごちる。中々平和に過

ぎない毎日を思い浮かべると、中学時代が懐かしく感じる。

あの時だって——俺が苛められる↓斉藤と鈴木が笑う↓田中と佐藤が女子を殴る↓怒られる。

あれ？ 全然平和じゃない……もしかして今とあまり変わってない？ 泣けるぜ。

「そうだ佐藤に電話でもしてみるか」

気紛れで級友であった佐藤に電話をかける。

短いコール音のあと「もしもし」としばらく聞いてなかった声が聞こえた。

「久しぶりだなあ、骨なしチキン」

「開口一番にそう言う事言うのやめよう、その悪口は俺に効く」

「良んだヨ、そんな下らねえ事。てか何？ 苛められてるから何とかしろって電話だったらきるぞ」

「残念だがそんな電話じゃないんだよなくそれに苛めなんて俺が終わらせましたけどお？」

嫌味たつぷりに答えるが、電話越しの奴はどうやら信じていないらしく大笑いしていた。

何で笑われているのか分からない俺は何度も弁解を重ねるが「はいはい。君が一番ダヨ」と言っただけでまともに取り合ってくれない……まあ分かってたけど。

「ネタにしちゃ面白かったぜ……初めて会ったときと比べてって奴だな」

「そうだよ！ だから何回も言ってるじゃん」

「まあ次なんかあったら電話しろよ。そんな時は助けてやるから」

「助かるよ。じゃあまた」

そう言っただけで電話を枕元に置く。

やっぱり落ち着くよなあこいつの声聞くと……ああ久しぶりに会いたいなあ。

「あ！ ほかの奴等は元気なのかって聞くの忘れた！」

仕方ない次に電話すれば良いか。

「よし！ 明日もがんばるぞ」



明日も何か良いことあります様に！

## 19話 タツグトーナメント 前

謹慎生活もそれなりの日にちが経ち、明日は待ちに待ったタツグトーナメントだ。正直謹慎になるなんて思っても無かったので、修行もしていない。準備不足で非常に不安だ。

「あー深緑で思いつきり風を感じたい」

うわあ今の凄い主人公っぽい……俺もそろそろ漸くスタートラインに立てたっていう事か。

そんな事を考えていると、扉がノックされた。

「どうも更識さん。どうかしましたか」

「いやーちよつとお願い事があるんだけどさーいいかな」

めんずらしい事もあるもんだと思い、静かに首肯してみせる。

「私の妹の面倒を見て欲しいのよ……まあ本音もいるからしなくてもいいんだけどさ」

微妙な顔で内容を教える姉さん。姉妹仲が悪いと大変だよなあ。まあ俺も一緒なんでけどねー。

「別に良いですけど……でも俺面倒とか見切れないと思うんですけどね。双葉と色々——あ、双葉って言うのは妹ですね」

「正直君には頼まなくても現状維持でも良いかな〜って思ったんだけど……無茶苦茶な君に頼んだら無茶苦茶になるかな……と思って」

「しつちやかめつちやか狙いで俺を頼むなんて面白いですね……まあやれたらやりませよ」

適当に挨拶でもして後はスルーかな。訳のわからん奴が話しかけてきて混乱するだけだろうし。

付かず離れずな感じで行けば無駄な事も防げるだろうし。

「んまなるようになるでしょ。後は本音にでも聞いときます」

「お願いね。あとはまあ明日のタツグトーナメント頑張ってるね〜今の君だったら多分楽勝だと思うから」

「だったら良いですけどね」

それから姉さんとポツポツ話しをして満足したのか、帰っていた。

「さて今何時かな」と

携帯を手に取り時間を確認すると一件のメールが届いていた。内容を確かめる為、メール画面を開く。

差出人は織斑千冬と書かれた無機質な物だった。

『明日のタッグトーナメントの相手はラウラ・ヴォーデビツヒだ』  
うっそだろ……あの軍人みたいな奴かよ……嫌だわあ。

自然とため息が出てしまう。何だってあんな奴と組まなきゃいけないんですかねえ。

「あーあやだやだ。もう寝よ」

携帯を放り捨て電灯のスイッチを消した。

〇〇〇

「ふいー久々のシャバだぜえ」

まだ謹慎中ですけどねー一回言ってみたかったんだなこれが。

取り敢えずの着替えを完了させてトーナメント表を流し見している。  
る。

やっぱりと言うかなんと言うか代表候補生達の皆さんは殆どがペ  
アを組んでいた。

他の生徒が可愛そうに見えてくる。まあ関係無いから良いんだけど。  
どき。

そして気になる対戦相手は————おっほ！ 一夏じゃん！ と  
後はデュノア君か……あんま記憶に無いからどうでも良いや。

「探したぞ。安部」

後ろからシャキツとした声が聞こえ振り向いたら、今日の相方がい  
た。

「今日は宜しく。色々あったけど『今は』気にせず順当に勝っていこう  
ぜ」

「貴様からそんな言葉を聞けるとはな……教官の教育の賜物だな」  
「それはどうかわからんけども。しんきよーの変化って奴さ」

まあそんな事はどうでも良いや。作戦とか聞いてもどうせ「私が一  
人やるから何でも良い」見たいな事を、言いそうだから聞くのは無し。

「て言うか、何時からだっけ？」「今だぞ」……は？」

「だから探しに来たんだ。それと逃げて無いかを確認しにな」

「んな事は早く言えつての！ ほら行きましょ行きましょ」

二人でアリーナまで走っていく。さあて頑張りますか！

○○○

「ヒエー一杯人がおるなあ〜キンチョーしてきたあ」

「抜かせ。今更こんな事で緊張するタマか？」

「いいや！ 全然！ と答える様に大声で笑ってやる。」

「——ここで対戦相手の顔を見てみよう。相手方の方もやる気満々と言った所か……ちよつとは緊張してくれば良いんだけどなあ。」

特に一夏の方は俺の事を親の仇かと言うぐらいに睨みつけて来る。ヤバいわあ、今まで生きてきてあそこまで闘争心をむき出しにする奴と出会った事が無い為、どうして良いか分からなくなってしま

う。——まあ叩き潰すだけだ。

そんな事を思っていると試合開始を報せるブザーが鳴った。

真つ先に飛び出してきたのはデユノアだ。瞬時加速を上手に使い俺の方に向かってくる。

「分断か？ 狙いは」

大まかな予想をつけて敢えて誘いに乗ってやる。俺は虚空を打ち出しながら、ゆっくりとヴォーデビツヒさんから遠のいて行く。

遠目で見てもヴォーデビツヒさんは余裕綽々と言った雰囲気ですの場で仁王立ちしている。

「——何よそ見してんだ」

後ろから声が聞こえてくる、男の声。一夏だ。

闇討ちを狙っていた一夏に対して素早く振り向き自分の背中を覆う様に円を発現させた。これでデユノアの豆鉄砲を防ぐ。

「ようこそ卑怯者の世界へ！ 闇討ちたあ恐れ入る」

「これはタツグだ！ 戦略と言って欲しいぜ！」

んな大声で言わなくても聞こえてんだよバアカ！ 炎斑を一夏に向かって横薙ぎに払う。

て言うかウチの相方は何やってんだよ!!

と思つたら後ろからヒウン! と風を切る音が聞こえた。どうやら援護はしてくれているらしい。

「じゃあ俺ヴオーデビツヒさんの所戻るわ」

「させるとでも「できるんだなあそれが」……」

今度は円を全身を覆う様に発現させる。制限時間は心許ないけど戻る位の時間はある。

スラスターを吹かし全速力で相方の方へ戻る。

「やるじゃないか。割と見直したぞ」

「へーへーそう言うのは勝つてから言おうぜ」

丁度敵さん戻つて来たみたいだし、仕切り直しですな。

そして間髪入れずに一夏が向かってくる。本当に血の気が多くて困る。頼むからもうちよい手加減して欲しいね。

「今度は私が行く。援護しろ」

ヌツと黒いISが一夏の前に立ち塞がる。

一夏が口角を吊り上げるこの距離だったらもう貫つたとも思っているのんだろうか?

「敵が何を使うか分からない状況で突っ込むと言うのは愚策中の愚策——そしてこれがシュバルツエア・レーゲンの能力だ」

そう言うときつきまで笑っていた一夏がヴオーデビツヒさんの目の前で静止した。何か見えない力が働いているのか……分からないが、今が好機!

素早く一夏の後ろに回り込み鋸で袈裟斬りを放とうとした。

ダアアン!

デカイ銃声が響き渡ったと思ったら、次の瞬間には右手に激痛が走った! 慌てて後ろを振り返ると次弾争点を完了したデュノア。

「クツソが!」

叫ぶのも束の間デュノアが一気に肉薄してくる。一夏は固まったままだがヴオーデビツヒさんは躊躇い無く一夏にどデカイキャノン砲をぶち当てていた。

だが今は一夏の心配するのでは無く、かなりの速さで近づいて来る

デユノアだ。

俺はハモニカを呼び出し横に構える。

そして可変させのぞかせるのは八門のビーム砲。

そして一定の距離に達した時ハモニカの引き金を引いた。

扇状に伸びるビームに虚をつかれたデユノア。直撃とは言えないが、それなりダメージを負わせる事が出来た。

だが本当の狙いは俺では無く一夏だった。キャノン砲で吹っ飛んでいた一夏を受け止め、二、三言言って離れた。

敵さん中々手強いじゃないの！ すげえワクワクしてきた。

「あの男はもう瀕死だ次は此方から攻めるぞ」

そう言うのと瞬時加速で奴らに肉薄して行く。俺も負けじとその後を追う様にスラストを吹かした。

一夏は兎も角デユノアが結構な曲者だったな。頭の回転が速いし、いいチームだったなあ。まあ俺の方が強いけど。

「流れは今完全にこっちに来た。一夏今だよ！」

「ああ！ 行くぞ！」

カツツツツツ!!!

瞬間視覚と真っ白に覆われ聴覚の方はキーンと耳鳴りに襲われる。　

マトモに閃光弾を喰らった俺とヴォーデビツヒさん。

俺は追撃が来る前に円を覆う。

正直ヴォーデビツヒさんを助ける余裕が無かった為、心の中で謝った。

そこから攻撃のリズムを完全に握られたオレ達。

まだ視覚が完全に回復していない為、周りの状況も分からない。

だが耳の方は若干回復してきた。

ズガンツツツ！　ズガンツツツ！

腹にまで響く渡る重低音。それが連続で恐らくヴォーデビツヒさんが蹂躪されているのだろう。

「が……ギッ！」

多分ヴォーデビツヒさんがやられたのだろう……申し訳ない気持

ちで胸が一杯になる。

やがて視界も徐々に回復して、耳の方は完全に回復した。

こう言う速いし回復もISのお陰なんだろうか？

「……まあ結果は酷いもんだわな」

晴れた視界が写したものは横たわるヴォーデビツヒさんとこちらの様子を伺う一夏とデュノアだった。

「あんまりこう言う事は言いたくないけどさー完璧に作戦負けだわな」

円はとつくに時間切れ、相方は脱落。あんまり強くない俺——  
んく絶望テキイ！

「ここで降参するか、俺達によって負けるか——選べ双真！」

瞬時加速って言うのはISの後部スラスター翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速するものらしい。

感覚的に言ったら深呼吸見たいなもんだ。

一気に肉薄して一夏を斬りつけようとする。

だがそれを許さないのはデュノア。俺が近付いてきた瞬間にはすでにライフルをこちらに構えていた。

ズダダダダダダッダダダダッ！

鉛弾の雨をハモニカと瞬時加速で避けようと試みるが、如何せん瞬時加速をぶっつけでやっているから、姿勢制御がおぼつかない。

最初は余裕があったシールドエネルギーも0から数えた方が速いくらいになった。

頭の中ではどうしてこうなってしまったんだと言うのと、あの時  
もつと考えて動いていたらと言うのが、頭の中に浮かんでくる。

だがそんな事を考えても仕方ないし、この状況が好転する訳でも無い。  
い。

ふと何の気なしにヴォーデビツヒさんの方を見してみる。

相変わらず地面に倒れこんでいるが、どうも様子がおかしい……なんか黒い煙みたいなのがヴォーデビツヒさんの周りに漂っている。





ゴチャゴチャ言っている一夏を無視して、聞きたい事を聞いてみる。

「て言うかなんでお前そんなに焦ってるの？ 親でも殺されたか？ あれに」

「あいつは！ あのISは千冬姉の……千冬姉のなんだよ！」

「今の話しは本当か？ デュノア」

デュノアはゆっくりと首肯してみせる。

あーまじで面倒くさい事になってるじゃん今……一夏はこんなだし、取り敢えずデュノアとなんとかしてやるから、それまで待つとけ。

「おい一夏落ち着いたら出してやるから、それまで待つとけ」

まだ怒りが治らない一夏に対してそう言い捨てデュノアに向き直る。

「一回二人で敵さんの情報を集めようと思うんだが、なんかある？」

「特に何も無いけど……良いのかな？ 先生に報告しなくても」

「してもしなくてもお偉方の避難とかで対応が遅れるんじゃないか？

取り敢えず今できる事をしよう。敵さんがこっちに向かってくるかもしれないし」

「……うん。君の事は信用出来ないけど……やろうか」

あらら……随分嫌われてるけど、やるしかないな。

「協力感謝するぜ。んま気楽にいこうぜ！」

俺とデュノアは一気に黒いISに肉薄した。

## 20話 タツグトーナメント 後

まずは様子を窺い、虚空とデュノアのライフルで相手の武装を確認する。目視で確認できるのは今の所一夏が持っているブレードによく似ているブレードだけだ。

牽制を二人でかけてみるが、虚空は最小限の動きで避け、デュノアのライフルはブレードを振り回し弾を弾いていく。五右衛門かよ。

「武装はブレードだけっぽいな」

「そうだね。でも織斑先生のISだったら、一夏と同じバリア無効化攻撃があるから、不用意に接近しない方がいいよ」

分かった、と返事をするが俺のシールドエネルギーはもうオワタ式なのであまり関係は無い。

「双真一度戻って、一夏と作戦を立てよう。もう偵察は終わったし」

通信が入り、俺は黒いISに背を向けて一夏の方へ向かった。

「落ち着いた？ 一夏」

デュノアは一夏に声を掛ける。当の本人は円の中に閉じ込められて、何も出来なかったのですっかり拗ねてしまっていた。

「アレの武装は一夏によく似たブレードだけだ。だから俺とデュノアで牽制しながら、隙を見つけれ。デュノアも俺も余りエネルギーが無いからな……一撃でキメろ。決めれなかったら全員心中だ——やれるな？」

一夏を無視して一息に喋る。精一杯の虚勢を張り落ち着いている様な雰囲気醸し出す。

一夏も覚悟決めた様で、ゆっくりと頷いた。

「……双真、シャルル後ろは任せた」

キリツとした顔でそんな事を言う一夏を少し格好いいなと思ってしまう。

最初に飛び出したのはデュノア。三人の中でエネルギーまだ余裕があるらしく、先陣を買って出てくれた。

銃弾の雨を否応なく浴びせているが、黒いISはその場から動かず自分に当たるであろう弾だけを弾いていく。

そして俺はデュノアの後ろで虚空と碎羽を構えていた。

正直スナイパーライフル何て余り使わないから勝手が分からず、ヤキモキしてしまう。

「双真！」

ハツとして前を向くと黒いISが俺の前に立っていた。

圧倒的な存在感に呼吸すらままならない。ブレードを持つ腕が振りかぶり、俺の命を刈り取ろうとしていた。

ガギンツ！

「~~~~~重いッ」

デカイシールドでブレードを防ぐデュノア。苦悶に満ちた顔は今にも崩れそうだった。

安心したのも束の間、冷静になれと自分に言い聞かせ炎斑を黒いISに絡みつかせた。

「ぐおお……何ちゆう馬鹿力……」

恐ろしい程の力で振り解こうしてくる黒いISに力比べ……めっちゃキツイ、マジで。

ズダダダダダッ！

いつの間にか黒いISの後ろに移動していたデュノアが、持てるだけの銃弾を浴びせる。

力が緩むの感じて、一気に黒いISを炎斑で引き寄せ抱きすくめる。

「今だあああああああああー！」

腹の底から声をあげ一夏に攻撃を促す。

「はあああああああああー！」

最大出力であろうブレードが黒いISと俺を切り裂いた。

———ありがとう———

何処から聞こえた声。シールドエネルギー0と表示される新緑。俺の意識は深い闇に落ちていった。

○○○

「あーあ疲れた。たまに本気出すとこれだよ」

誰もいない保健室で一人ゴチる。嫌だねえ本当……誰も見舞いに

来てくれないなんて——来てくれる友達がおらんかった。

「よっこいせ」

べつどから降りて周囲の散策を試みる。まあ至って普通の保健室。

暫く歩き回っているともう一つのベットから絹擦れの音が聞こえた。

覗いてみようか……と思ったが流石にそれはどうなのだろうか？

「そんな事を考えるくらいならさっさと入ってこい」

「えー起きてたのか……」

「お前の独り言がやかましいからな」

やかましいって……二、三言やんけ……どんだけ警戒心が高いんだよ。

俺は言われた通りにヴォーデビツヒさんの所まで歩いていった。

「あん時はごめんな。助けてやれなくて」

「別に気にしていない。アレは私の油断が招いた結果だ」

私も腑抜けになったものだ……寂しげに呟いた。

「そんな寂しい事言うなよ。ヴォーデビツヒさんが気にやむ事ないだろ……それを言うならば俺が弱くてヴォーデビツヒさんの、足を引張ってたね」

だからそんなに自分を悪く言うのはやめてくれよ……俺が悲しくなるからさ。そう言っつてヴォーデビツヒさんの肩に手を置いた。

「……そうか……そう、だな。だがな私がした事は許されないんだ……尊敬する教官のコピーになってお前達を傷付けてしまった」

「あーあれかー俺は別に何も思わなかったけどなあ。どう言う事情でああなったも興味無いから、如何でもいいんだよあ」

面倒くさい事は先生がやるだろ、投げやりな言葉をかけてみるが俯いたままで。

「たかが子供の癖に何悩んでんだよ。皆にごめんなさいって言えば、多分皆許してくれると思うぞ」

「でも「駄目だったら一緒に謝ってやる」……ああ、分かった」

「あ、あとセシリアと鳳さんにも謝っとけよ。あいつ等すげえ悔しそ

うだったから」

まあこれは後から聞いた話だけだな。間接的に俺も被害を被っている訳だが……それはもう終わった事なので、どうでもいい。

「んま面倒くさい事は全部織斑に任しときゃいいんだよ。だからヴォーデビツヒさんは自分の事を考え「ほう。偉く喋るじゃないか」……じゃあ俺部屋戻るわ」

そう問屋がおろしませんと俺の首根っこを掴んでくる、担任の先生。

掴まれたお陰で首から変な音がしたのは内緒だ。

「そう嫌がるな。お前はどうでもいいが、ヴォーデビツヒの体調を確認しに来ただけだ」

だったらどうでもいいはいらないじゃあないですかねえ……俺は深くため息を吐いた。

「あ、そうですか。だったら先生がヴォーデビツヒさんを慰めて下さいね」

余り織斑と話したくもないので逃げる様に保健室を後にした。

○○○

「あー！ いっけね本音に連絡入れねば」

シャワーから浴びて着替えている最中に姉さんの事を思い出した。

正直メツチャ気まずいもんなあ……二日ぐらい前の話しだから、尚更ねえ……電話を押す指が震える。

「ええい！ ままよー」

ヤケクソで叫びながらコールボタンを押した。短いコール音の後に本音からもしもと小さく聞こえた。

「あ、あのはな、はにやしが……話がしたいんだけど……自販機の所まできちえ……きて欲しい」

「君の部屋で良いんじゃない？」

「あ、いやしいれだとあの色々と「もう行くから」……ま、待つて」

ふー結構簡単に話が進んで良かった。本音も機嫌良さそうだったし……これで何も不安無く話せれば万々歳だ。

「よおし気を落ち着けろ。これからの戦いはトーナメントより厳しい

物だ……頑張れ双真」

深呼吸をして気分を落ち着かせる、電話をかけるだけで心臓がバクバクしているのは、初めての経験だ。

暫くすると、コンコンと扉をノックされた。

俺は扉を開けに行き、客人を出迎えた。

「よお本音。今日は大変だったな」

挨拶の言葉もそこそこに本音を椅子の方に促す。

本音はいつもの様な穏やかな雰囲気では無く、何故か少し不機嫌な感じだ。

「夜遅くにごめんな？ 眠くないか」

「別に」

「べ、別について……まあ良いけど……て言うかどうした？ 何か不機嫌だけど」

「別に」

「……なあ俺何かしたか？ あん時は確かに悪かったけどさ……そこまでムキになる事も無いと……思います」

本音は暫く逡巡した後、トコトコと俺の方に歩いてきて、隣に座った。

何でよりよって俺の隣に座るんですかね……むっちゃ良い匂いするし——変態みたいだな……俺。

俺は本音から離れるべくスイツと、横に移動した。本音も負けじと俺の方へ寄ってくる。何なんだ一体。

「なあ本音はどうしたいんだ……分からないぞ」

「もう何処にも行かないで……私から離れないで」

「無理だろ……じゃあ何？ 今日泊まってくの？」「うん」……いや無いわあ……「お姉ちゃんとお嬢様に言うから」……ええ」

今とんでもない爆弾を投下しようとしているんですけど……マジで、この場面でそんな事言われたら……いや、でも駄目だろ。常識的に考えて。

「……今日だけだからな。絶対今日だけだから！ それ以外は何とかしてやるから、泊まるのは絶対今日だけだ！ それと手

も出さないからな」

「今日のトーナメントはあんだだけカツコよかったのに……夜になるとこれだもんなくく本つつ当にヘタレだね」

「ぐぬぬ……今だってちゃんと話せてるし！　って言うか普通の事だろ！　もう俺はヘタレじゃないの！」

これ以上は構っても埒があかないので、逃げる様に布団に逃げ込んだ。

そして当然の様に俺の布団に入ってくる本音。

「何でや！　別に一緒じゃなくても良くない？」

「ええくく良いじゃん。今日だけなんだから」

「……………好きにして……………」

好きにしてと言った瞬間、俺の背中に抱きついて来る本音。

好きにしてと言ったが、そこまでするのはあんまりじゃないですかね……もう理性と言うダムが決壊寸前なんです……それは。

「おやすみーべーやん」

「おやすみ……………」

おやすみっていたけど、俺の息子はWAKEUPなんですよ。

この状態じゃ、萎えさせるのも無理なんですよ……誰か助けてくれねーかな。

俺は眠れない夜を過ごした。

○○○

あーすっごい……すっごい気持ちいいわ、この抱き枕。ギュツと抱きしめたら、抱きしめ返してくれるし……心なしか良い匂いもするし。

何で今までこんな良い抱き枕使わなかったんだろうな……すっごい俺。

「…………抱き枕？　さっきのは夢か？」

意識が徐々に覚醒して行く。

俺抱き枕持ってたっけ？　あれれくおかしいなあ。

瞼をゆつくりと開き抱き枕？　っぽい物を確認する。

サラサラ感触が手に残る——これ人間の髪じゃね？　え？　本音

は？

本音は俺の背中に抱きついてスースーと寝息を立てている。

え？　じゃあ誰なの？　は？　銀髪？　ヴォーデビツヒさん？

「おわあああああああああああああああ！」

余りの出来事に目を背けたくなる現実がそこにあつた。俺は急いでベットから出た為、転げ落ちてしまった。

「なんじえ……何でヴォーデビツヒさんがここに……ここに……ここに……だ」

俺がデカイ声をあげた為ヴォーデビツヒさんと本音が起きた。

本音はマイペースに俺に挨拶してきやがる。何か突っ込めよ！

この状況に！

「親しい人間夜這いをかけるのが日本の通説だと聞いたんだが……」

本音は洗面台に向かい、早々にいなくなつてしまった。

誰か助けてくれませんか？　切実に願います。

そんな事を考えていたら、急に目頭が熱くなつてきた。何だか急に涙が出てきてた

「もういやだ……グス……」

余りの出来事に頭の処理が追いつかない。考える事を放棄したい……もう放棄しよ。

ヴォーデビツヒさんにベットから退いてもらい、枕に顔を埋める。

誰にも泣き顔は見せたくない。

「そんなに私達といるのが嫌なのか？」

そんな事を後ろから言ってくるヴォーデビツヒさんに、首だけを振り、否定してみせる。

「もぐばやぐどつかいげよう！　そつとしといてくれ！」

もう嫌だ。今は誰にも顔を合わせたくない。

「へそ曲げちやつて……子供だねくくヴォーデビツヒさん行こうか。こうなつたらもうダメだよ」

棘のある言い方がグサツと心に刺さる。そんな人を傷付けて何が楽しいんだ……バーカ。

やがて二人が出て行き、部屋の中に静寂が訪れた。



## 21話 祭りの後は

あーまた一人だ。折角いい感じになったと思ったんだけど、中々上手くないもんだ。もうしんどい。

そんな事を考えているとドアがノックされた。

俺の返事も聞かずに開かれた扉は、勝手に客人を部屋に迎え入れた。

「よー！ 元気にしてたか」

「……一夏か。珍しい事もあるもんだ」

なんか一夏と久しぶりに話した様な気がする。まあ正直一夏の周りにいる奴が好きじゃ無いから、話しかけたくなかったって言うだけだ。

まあ結局は俺のやる気の問題って奴？

「体は……大丈夫か。謹慎だもんな」

「なんとも無いよ。それにしてもヴォーデビッツヒさんにスカされ、俺には歯が立たなかつた一夏君はどういう用事で？」

「きつついなあ……まあ別に大した用事も無いけど、友達の部屋に遊びに来たっていうのはアリか？」

「限りなくナシに近いアリ」

そう言つて一夏に背を向けて、話す。双真君イジケモードである。

「それにしても前から思つてたけど、双真つて強いよな」

「何が？ 勝負に勝つたのは一夏じゃん。もしかして嫌味っすか」

そう言うつもりで言つたんじゃ無いんだけどなあ……と困つた様に笑う一夏。まあ何と無くだけど励まそうとしてるのは分かる。

……友達つて言ってくれたし。

俺は頬を少しかいて、ベッドから飛び起きた。一夏は驚いた様な顔をして、俺の方を見つめる。

「暇だから相手してくんね？」

「何のだよ？ 今授業中だし……それに謹慎だろ？」

「抜けだしてるんだから大して変わらんだろ……それに先生の説教で終わるんだつたら安いぞ」

「……お前がそう言うんだったら別に良いけど……何処に行くんだ？」

「アリーナだよ」

○○○

「やっぱ決着着けないとダメだろ。トーナメントの」

一夏もスイッチが入った様で、俺を睨みつける。

ああやっぱこう言うのって良いな。気兼ねなく戦えるから。

誰もいない二人きりの空間で小さく笑った。

『なら！ 思う存分やっちゃって！』

ハウリングするぐらいの音量で響き渡る声。姉さんである。

文句を言おうとした瞬間、一夏が切り掛かって来た。

ガギンツツツ!!

鋸を展開し、受け止めたが不意の一撃は重すぎた。そのまま少し吹っ飛ばされ、バーニアを吹かし体勢を整える。

「やるじゃん、クツソムカついた」

「戦術だろ？ 双真」

にやろう……ドヤ顔でそんな事言われたら余計にあつたまるじゃん？

俺は最近覚えた瞬時加速で肉薄して行く。

だが狙いは鋸の一閃……ではなく加速中に展開しておいたハモニカのビームお目当である。

当然一夏も俺が向かってくる訳だから、迎撃しようところらに向かってくる。

もう良い距離だろうと思ひ、俺は軽く横に跳びハモニカ扇状にビームを発射した。

「読んでたぜー」

どうやら読まれていたらしく、機体を無理やり上昇させビームを回避した。

「らあっー」

ビームソードを大きく振りかぶり、一撃で決着をつけるつもりなのだろう、ビームソードから危ない匂いがビンビン伝わってくる。

「んなろ……！」

展開しておいた鋸で受ける。受けた衝撃が大きく体勢を崩したが、なんとか受けきる。本当に近接特化って面倒くさいわ。

通信をプライベートチャンネルに切り替えて、一夏に一つだけ質問する。

「なあ強さってなんなんだろうな……俺ってば何でこんな所にいるんだろうな」

「それは分からねえけど、俺達が持っているモノは……誰かを守れる力だと俺は信じてる——だから俺は強くなるんだっ！」

「ふーん……なら俺は今まで傷つけられた世の男達の為に戦おうかね……なあんて」

イマイチ一夏の言っていることが分からなかったが、まあいい。そう思う事が大事って奴なのか？ 人間やっぱ心の持ち様ってこと？ 考えれば考えるほど思考が迷子になっていく。

「ボオツとしてると負けちまうぞ、双真！」

ビームソードを引いて横一閃。気を取られていた為にマトモに食らってしまう。シールドエネルギーは……まだ大丈夫。

「俺……もう少し頑張ってみる。せめて……俺が行ける限界まではっ！ ——逃げてたまるか……！」

虚空を打ち出し一夏の動きを、鈍くさせる。今の俺ならいける。

「来いっ碎羽」

更に激しく虚空を打ち出す。そして俺自身も動き、一夏を簡単には近づけさせまいと、牽制する。

「見えるわ……一夏の動き、全部」

スコープを覗き込み、スラスターの慣性で滑りながら一夏の逃げる場所を狙い打つ。

乾いた銃声と一夏にヒットした事を確認するのは、ほぼ同時だった。

行ける……まだその先へ！

「たった一発当てて勝ったつもりかよ。双真」

「いや、むしろこれからだろ。そうだろ一夏」

名前を呼び合い二人して笑った後、瞬時加速で一夏に一気に肉薄する。一夏も同じ様に加速し、俺を迎え討つつもりでいるのだろう。

俺は円を体全体に纏わる。

「最強の剣か最強の盾——どっちが強いか、試してやるぜ」

ビームソードの威力をあげたのか？ 途轍もないエネルギーを感じる。

あれは流石にヤバイ——だがもう逃げる訳にはいかない……さつきそう決心したから。

だから——俺はぶつかり合う前に体をひねり直撃を免れる。

バチイ！

覆っていた円が殆ど削られ装甲も右半分を削られる。シールドエネルギーギーも殆ど無い。

体に激痛が走る。だがこんな所で——こんな痛みでもう止まらないうって決めた。鋸を強く握りしめ、一夏を斬り付ける。

「読めるんだよ。お前と一緒にさ」

微かに聞こえた声。そして訳も分からないままにシールドエネルギーギーが尽きた。

「……今のは、何をしたんだ……」

「ああ？ 雪片でもう一回切っただけだ。簡単だろ？」

「……あーとすくい上げて斬った……みたいなの？」

まあそんな感じと言って、へへっと言って頬をかいた。そうか視界に雪片がいなかったから、そういう風を感じたのか……それをぶっつけてやってしまう……一夏のポテンシャル。

寒気がするわ。今迄何回かやったけど、ここまでの精度にするのに何処まで行った？ そう思うと自然と笑ってしまう。

「負けられない……負けらんねえよ。お前だけには負けたくない」

「はあ？ 何言ってるんだ。俺だってそうだよ」

そう言う手を手を差し伸べて来た。

「……今回は負けといてやる。次は——ずうえつたい勝つ」

……大事なことで噛んでしまった。一瞬惚けた後一夏は急に笑い出し、俺の手を無理矢理握って来た。

て言うかすぐく恥ずかしいんだが、何笑ってんだ。

「じゃあまた今度千冬姉には俺が言つとくから、お前は気にしないでいい。何たって友達……だからな！」

「恥ずかしいから、そう言うの。てか俺も一緒に行くわ。何たって友達だからな」

一夏の真似をして一緒に歩いて行く。途中急に一夏が笑い出しただりしたが、特に何も無く織斑に怒られた。ふあつく。

○○○

双真が部屋で謹慎中の課題をやっているとコンコンと扉がノックされた。千冬の説教と一夏との試合で割と疲労が溜まってはいたが、居留守を使う訳にも行かないので来客を迎えに行く。

「……邪魔するぞ。アベ」

「ボーデヴィッツヒさん。なんか用？」

返事を聞かぬままズカズカと部屋に入って行くラウラ。ため息を吐き椅子に座る双真。

「どつたのよ。俺なんかしたっけ？」

「ああ。今朝はすまなかった……いきなりの事で驚かせた。謝りの品だ。受け取ってくれ」

美味いぞ、と言い紙袋を渡して来た。中を開くと見た事の無い恐らく英語で書かれた缶詰が出て来た。

「あーこれもしかしてレーションって奴？ ……アリガトゴザイマス」

「そうか……喜んで貰えて何より。そ、それとだな……」

真剣な表情を作りコホンと咳払いを一つ。いきなり態度が変わり、少し訝しむ双真だったが取り敢えず紙袋を置き、ラウラの発言を待った。

「お、お前は私の嫁にする。決定事項だ。異論は認めん！」

大きく首を傾げる。頭の中は？マークで一杯だった。双真は口を開けたまま、しばらく固まっていた。思考の復帰が行われたのはそこから2、3秒後の事だった。

「えーとつまり何好きって事？ 意味は分からなくも無いけど……」

「そ、そうだ「まずさ、良く話し合いましたようや」……むう」

渾身のプロポーズをあつさり返され。双真は冷蔵庫に飲み物を取りに行く。ラウラにも手渡し自分は椅子に座り口を開いた。

「何で俺なの？ 普通一夏っしょ。それかあんたの言う教官様でしように……あーなんて言うかな？ とにかく人違いじゃあ……」

「そんな事は無い。確かに……お前から見ればそう見えるかもしれない……だが私はお前の行動と言葉で救われた、それだけだ」

「……うん。そっか」

双真は俯き握っている缶を強く握った。救われたと言う一言で張り詰めた心が、少し緩んだのを感じた。

「俺でも救える事助ける事……あるんだな」

そう呟き潤んだ瞳を手で拭った。そしてラウラを手招きして隣に座らせた。

「ごめん今の俺じゃ答えられない。でも友達から始めよ。俺は絶対に逃げないから、絶対に前から居なくならないから……待ってて欲しい」

「……この臆病者め。だがそれがお前のいい所だ」

ラウラが目を瞑り、肩に頭を預けて来た。不意の事だったので、思わず倒れそうになったが持ちこたえる。これはどう言う事なのだろうかと、考えていると双真の空いてるを手を自分の頭に寄せた。

「撫でろ。優しくだ」

無言で頭を撫でていると気持ち良さそうな声が聞こえて来る。双真は何故こんな事になっているのだろうか……と無い知恵を振り絞るが、やはり思い浮かばない。

壁に掛かっている時計をふと眺める。もうすぐ完全消灯の間である。されるがままのラウラに撫でながら質問する。

「帰らなくていいのか？ もうすぐだぞ消灯」

「バレなければどうと言う事は無い。それに……校則を破ったのお泊まりは、青春の大事な一ページだと……副隊長が、言っていたのだ」「また泊まるのか……まあいいけど服は着ろよ」

碌な事を教えないな、お前の副隊長は……と言いつうになつたが、

流石にそこまで言う度胸が無いので、グツと我慢する。

「今度さあヴオーデヴィツヒさん所の副隊長お話しさせ貰えませんかね」

「……む。浮気はダメだぞ。後私の事はラウラでいい」

はいはいと適当にいなし、ラウラを抱えたまま電気を消す。豆電球だけが点き、薄暗いが無事ベッドまで到着した。

「俺まだ課題やってるから寝といてくれ」

そう言うのとラウラをベッドに寝かす。何か言いたげな顔をしているラウラを無視してさっさと課題に取り掛かる。

「……もう終わるのか？ 課題は？」

「んーまあもうちょい。寝てていいぞ」

そんなに俺と寝たいのか？ と軽口を叩き課題を終わらせて行く。ラウラは複雑な表情で押し黙り、双真の様子を伺う。

(ほんつと変わるもんだな……なんかここまで上手く行くと気味が悪いぜ)

少し前の出来事を思い出してにやける。あんだけ悩んでた自分が馬鹿みたいだと、そして今起こっている出来事に対してもだ——こんな事多分願っても一生経験出来ない事の連発だった。

その殆どが出来ればきて欲しく無い事ばかりであったが。これもまた勉強と、思えばギリギリ割り切れそうな、そうでないような微妙な所である。

「うし……！ 終わった」

それなりに量のあった課題を終わらせて手提げ袋に詰める。

(流石に一緒のベッドで寝るわけにはいかんよ)

もう既に寝ているラウラを確認してそんな事を思う。

豆電球を消して完全に暗くなった部屋。ベッドで寝ている美少女。据え膳食わぬは何とやらの状況で、双真はため息を吐いた。

「メンドクセ寝よ」

机に腕を置いて頭を乗つける。思考を放棄した結果机で寝る事で決着をつけた。

## 22話 祭りの準備

目が覚める。と言うか物凄く体が痛い。

原因を探そうと目を開けると、昨日自分が机で寝ていた事を思い出した。机に置いてある携帯電話を取り出して時刻を確認する。

「げ……まだ4時」

立ち上がり軽く筋を伸ばす、ガチガチに凝っていた体が少しはマシになる。

「……風呂でも入るか」

昨日で謹慎期間も終了した。出来ればあの教室へは行きたくは無いが、終わりは終わり。ため息を吐いて風呂場へと入って行く。

「あくかつたるいな。てか何で俺の部屋で俺が机で寝なきやいけないのか、納得がいかねえ」

客人の前では決して言えない事をシャワーと一緒に洗い流す。

文句は随分と溜まってている、だがここに来た以上は全てとは言わないが、ある程度は堪えるべきだと自分に言い聞かせる。

思えばこの学園に来て、余り良い事はなかった様な気がする。だがそれも身から出た錆なので、全て悪いとは言えない。何とも複雑な気分である。

「ふいー暇だからラウラを起こそうかね」

制服に袖を通してはた迷惑な行動を思いつく。そして出来るだけの身支度をして、ラウラの寝ているベッドに座った。

「おーい起きろ。未来の旦那様」

髪を撫でながらラウラを起こしてみる。すると直ぐに目を開けて双真を恨めしげに睨んだ。

「……何故一緒に寝てくれなかった」

「起こすのわりいかなって……まあいきなり押しかけて来たからなー。ささやかなてーこーって奴?」

笑いながら答える。ラウラもやがて諦めたのか、ゆっくりと半身を起こした。

「てか自分の部屋戻らなくていいのか?」



「大丈夫だ。着替えは持って来てある。

「……そすか。用意がいい事で」

ラウラの周到さに呆れてしまう。自分がそんなに魅力的に見える者なのか？ もう一度鏡でも見てこようかと席を立つたら、

「何処へ行くんだ？」

「散歩。ラウラも行くか？」

行くなら着替えるよ、と指示をしてもう一度洗面所に入って行く。そして鏡の前に立ち、自分の顔を確認する。鏡にはお世辞にも格好いいとは言えない人間が一人。

「うーんこれは不細工」

顔では無く内面的な物か？ そんな事を考えていると扉が開かれた。見るとラウラが準備が出来たようで、外へ行くぞと顎でしゃくる。

外へ出て、鍵をかける。

「誰もいないな」

「まだ5時だからな。まあ早めに出た方が、とやかく言われなくて済む。早く行くぞ」

へいへいと適当な返事そしてラウラについて行く。途中ラウラが何処へ行くのか尋ねてきたが双真はこれをスルー。

しばらく歩いて寮の外にある中庭に到着した。双真は適当なベンチに座り、一息つく。

「そう言えばセシリアとかに謝った？」

「ああ……頭を下げた時はひどく驚かれたな」

「もしかして……レーションも渡したとか？」

そうだと首肯する。ラウラさん多分それですよ。双真は自分が渡された状況をセシリアに変換して想像する。ラウラには悪いが、その状況が笑えて仕方がない。

笑いを必死で堪えていると、不満を含めた顔をしたラウラが睨んできた。その顔がさらに笑いのツボを刺激させる。

「ぶはっ……！ ダメだって……くくっ」

「レーション……美味いんだがな。そう言えば鳳も同じ様な……凄く

微妙な顔をしていたな」

顎に手を当ててレーションと呟く姿を見て、ついに笑いのダムが決壊してしまった。双真は笑い転げ危うくベンチから落ちそうになるが、これをラウラが何とか止める。

「ひーくるしい……ラウラはいい子だなあ。撫でてやろ「うるさいっ」へぶっ」

ラウラは顔を赤くして裏拳を見舞う。鼻を押さええて痛がる双真。その間抜けな姿を見ると、ラウラもつられて少し笑った。

○○○

「織斑先生お電話が入ってます。えと敷島重工の安部と言う方からです」

内線で引き継いでもらい、そのまま受話器をとる。

「変わりました織斑です。何か御用でしょうか？」

「どうも初めまして……敷島重工の安部です。うちの深緑で少しお話しがあるのですが……お時間大丈夫でしょうか？」

物腰の柔らかい声で相談を願う、安部。まあ何時ものメンテナンスだろうと思い、千冬はこれに頷いた。

「近い内に大きな改修とメンテナンスを行おうと思っているのですけど……学園に入れる日程を教えてくださいませんか？」

そう言われカレンダーを確認してみる。そこにはもう数日後に臨海学校と赤丸で記されてあった。それを見てもうそんな時期かと、肩を落とした。

「すいませんが近々臨海合宿があるので……訪問されても、留守になります」

「あーそうなんですかあ。ではその合宿で改修とメンテナンスをしても大丈夫でしょうか？ 勿論駄目なら駄目でいいんですが……」

「ああ、それで構いません。他社もそれに合わせてやる事も多いので……」

つい失念してしまいました。と謝りの言葉を入れる。安部はそれで構わないと言葉を続けた。

「あと最後に……うちの息子は大丈夫でしょうか？ やっていけてま

すかね……」

「息子……？　もしかして双真君のお父上で？」

少し驚いて聞き返してまう。受話器からはそうです、と言葉が出てきた。この父親からあの息子か……中々に想像がつかない。

そんな事を考えていると、

「あの……大丈夫ですか？　もしかしてまた虐められてるとか……」

余りの出来事について意識を深くに落としてしまった。千冬はそれを謝り、生活態度など日々の素行に少し難があると簡単に説明していた。

「あーやっぱりか……すみません、息子が迷惑をかけて」

「いえ……彼が来てから教師の難しさを痛感しました。私にも落ち度があります……」息子も預かっているのにも関わらず」

「……織斑先生も苦労なされてるんですね。もう少しお話し伺いたいのですが……流石にそこまで引き止める訳にはいかないので、合宿中に二者面談って可能ですか？　もう息子がIS学園に入ってから……ずっと気を揉んでおりました……駄目ですかね？」

本来は余りそう言うことは無いが、今回は事情が事情である為、悩ましいものである。千冬的には即決したいが……他の人間が何と云うかが、問題である。

（いや何の為の学年主任であるか……父兄と話すだけだ、何も問題はない。あつても黙らせればいい）

千冬は大きく頷き、安部に面談の話を了承した。

「本当ですか！　ありがとうございます……では合宿の時にまた連絡しますね。今日は本当にありがとうございます」

受話器から連絡が途切れた音が響いてくる。一度大きく息を吐いて受話器を戻した。何だかやけに疲れてしまった。

「大丈夫ですか？　織斑先生……」

後ろから心配そうな声をかけてきた山田。千冬はそれを大丈夫だと簡潔に終わらせて、すっかり冷めてしまったコーヒーを一口。

「いや……父兄との二者面談を要望されたんだ……」

「はあ、ですが原則的に「安部の父親なんだ……」え?!　そうなんです

か……それは確かに」

「だが状況が状況だ。ちゃんと会って話さなければならぬ。それにブリュンヒルデが一人の父兄に負けたとあらば……それも情けない話しだな」

自嘲気味に笑い、千冬は席を立つた。山田には次の授業の代理を頼み。自分は合宿での面談の許可もらいに行く。

(難しい……が故に充実している……か)

教師と言う自分にとってはただの片手間な『作業』が、今になって少し楽しい。自分自身が生まれて初めてぶつかつた壁とでも言うべきか？ だがいくら登り詰めても超える事は出来ない歯痒さが自分を楽しませる要因だつた。

○○○

「セシリアって今週の日曜日って暇か？」

授業の休み時間に次の授業を準備をしていると、双真が話し掛けてきや。セシリアは特に考える様子も無く、首を縦に振つた。

「おーなら臨海学校の準備しようぜ。買い物行つたりとか」

「分かりました。それにしても珍しいですわね。貴方から買い物誘うなんて……」

「いや……トーナメントの時に助けてやれんかつたからなー。お詫びも兼ねてご飯でもつてね。買い物はその次だ」

「私からもお願いしたい。オルコットには改めて謝罪を」

「……鳳さんはよろしいので？」

ラウラは来ないと言い、双真は頬を掻きながらセシリアに話しかける。

「まあそう言う事だ。なんかまあ色々俺言つたけどこれからもよろしく、セシリア」

そう言つて恥ずかしそうに手を差し伸べる。

「あの時は……私もぶつたりして、ずっと悪いとは思っていましたが、さすが貴方にずっと……謝れずにいました。子供ですね……私」

言いながら自嘲的に笑う。ひとしきり考えたあと、意外な人物が言葉を紡ぎ出した。

「そんな事は無い……話しは大体聞いたが、そうさせる双真が悪いのだ。それにもう……折り合いはついたんだろう?」

ニコツと笑いセシリアの手と自分の手そして双真の手を重ねた。

これで友達だと言わんばかりにラウラは二人の顔を見合す。双真は恥ずかしくなり直ぐ手を引つ込めたが、それでもまた二人の手の上に手を重ねた。

「こんな小っ恥ずかしい事しないんだけどな……まあこれからもよろしくー!」

「無理矢理終わらせましたね……」

「そうだな。臆病者め」

うっせと恥ずかしそうに言い顔を背けて双真は自分の席に戻って行く。ラウラはその様子を見てクツク笑った。

「面白いなあいつは。そう言えばレーシオンは美味かったか?」

期待したような目でセシリアを見る。だがセシリアは即座に顔を窓の方に向けた。怪訝に思ったラウラは、周り込み再びセシリアの顔を覗き込む。

「どうだった?」

「あ、いえ……そうだ! もう授業が始まりますわっヴオーデヴィツヒさんも席に着いたらどうでしょうか?」

さあ行つた行つたと自分の席を立ち上がりラウラを連れて行く。

その間にラウラは感想を聞きたがっていたが、セシリアは誤魔化す様に笑い、何も話そうとしなかった。

(身近な物でいいと言ったじゃないか……クラリツサの奴め……)

余りの不評に少し目の前が滲んだラウラであった。

○○○

「はいーい20秒遅れ〜罰としてもう一周〜」

遠くから残酷な指示が飛んでくる。うげっと思わず声が出てしまう。

双真は楯無を少し睨んで、持てる限りの力で全力でトラックを走りきる。

「はあはあ……ふいー」

「息整えたら次いくわよー。謹慎明けはがつつりと……つてね」

不摂生と書かれた扇子を勢いよく広げる。怪しい笑みを浮かべるは学園最強の生徒会長対して地面に這いつくばっているのは、謹慎者安部双真。

「じゃー何しようかしら……んー人も増えてきたし……そうだ」

何か悪い事を思いつき双真を手招きしこちらに呼び戻す。

「腕立てとスクワットを私がいいって言うまでやって」

「……やりすぎじゃね？ どの昭和だよ……」

100区切りで交代ねーと目の前で間が抜けた声で指示を受ける。

双真はまだ文句を言いたかったが、喋る体力が惜しいのでなるべく顔に出さずに実行する。

「そう言えば……本音とはどうなの？」

「ふつ、話して、ないです。どうかしたんですか、くっ」

「最近元気ないのよねー仕事やってる時に、あれだけ辛気臭いとねえ」

あまり気にしてない様な口ぶりでお菓子を一口。態々グラウンドに机と椅子を持ち出してお菓子を広げる楯無を恨めしげに見る。

「そんな、こと、言っても……ふう、どうするしろつて、いうんですか？」

「あーあ安部君が励ましてくれたらなー！ 私も気楽なんだけどなー！」

「考えておきます……あが、足つった……！」

それも結構いてー奴！ と叫び地面に転がる。声にならない呻き声をあげ地面に転がりこむ姿は間抜けそのものである。

暫くつっている様を無言で見っていたが、やがて大きいため息をついて、立ち上がった。

「それなりにやったでしょ？ もう今日はいいわ。その代わり」

痛みもようやく治り、少し涙目の双真を立ち上がらせる。

「本音と話してらっしやい。今からね」

「いや……それ「あー！本音のあんな顔見たくなかったわー」……いきますよ……はいはい」

かなり嫌がる双真を無理矢理行かせ自分は食べたお菓子を予め

持って来ておいた袋に入れ始める。

「全く……世話がやけるんだから」

可愛い弟分の姿を見てふうとため息を漏らした。